

国立近現代建築資料館 紀要

第3号 2023 (令和5年)



**Bulletin of National Archives of Modern Architecture,
Agency for Cultural Affairs**

Vol. 3 2023

国立近現代建築資料館 紀要

第3号 2023(令和5年)

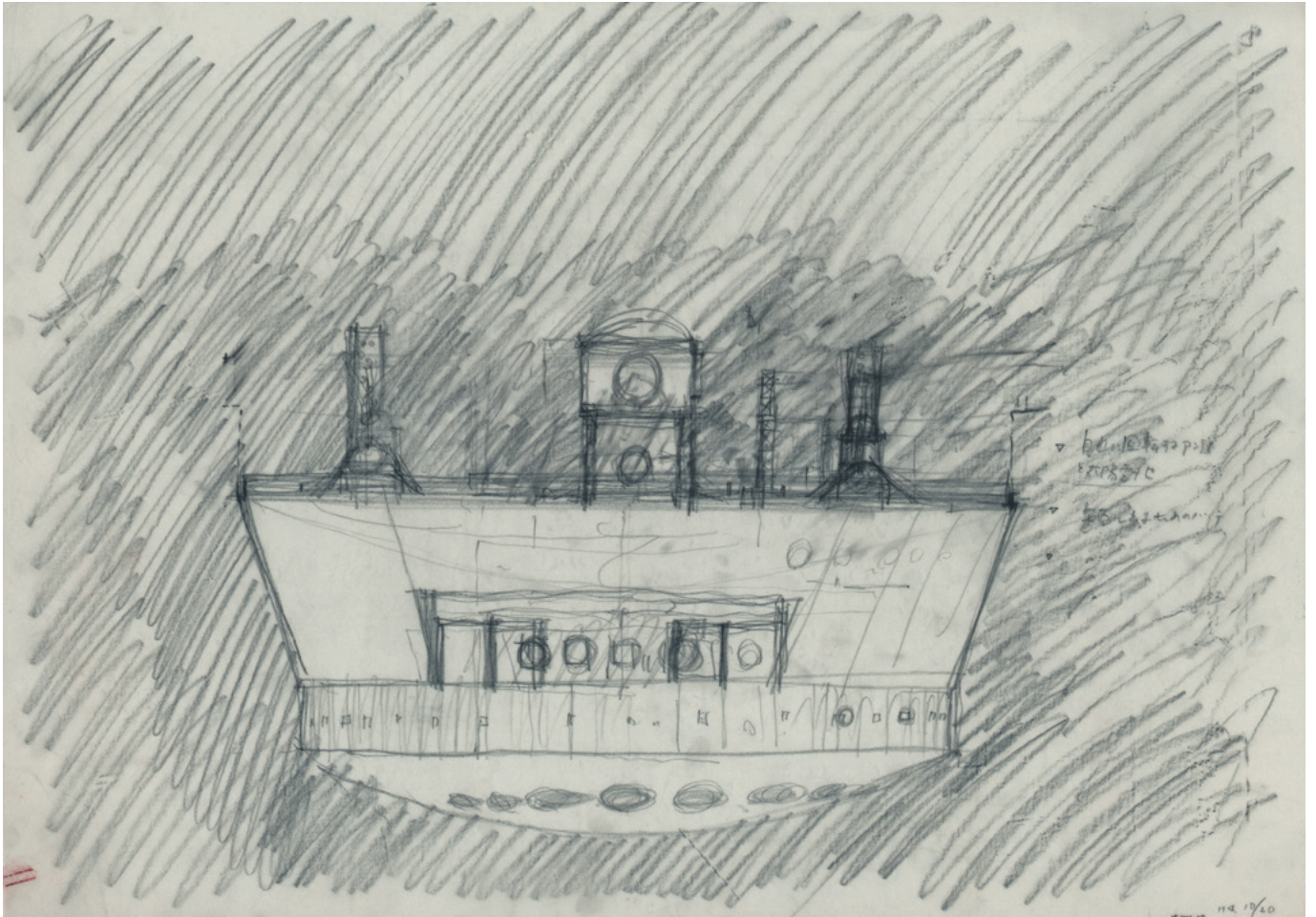
Bulletin of National Archives of Modern Architecture,
Agency for Cultural Affairs

Vol. 3 2023 (Reiwa 5)

原広司+アトリエ・ファイ建築設計資料

スケッチを通じて、建築思考に具体的な形を与える

「原広司 建築に何が可能か ―有孔体と浮遊の思想の55年―」[2022年12月13日(火)～2023年3月5日(日)]では、原広司の広大かつ深遠な建築世界を、代表作の図面の展示を通して経年的に紹介するだけでなく、思考を建築化する過程を示すスケッチを数多く展示した。それにより、思考に具体的な形を与える過程がわかるような展示をめざした。ここでは、3点を紹介する。

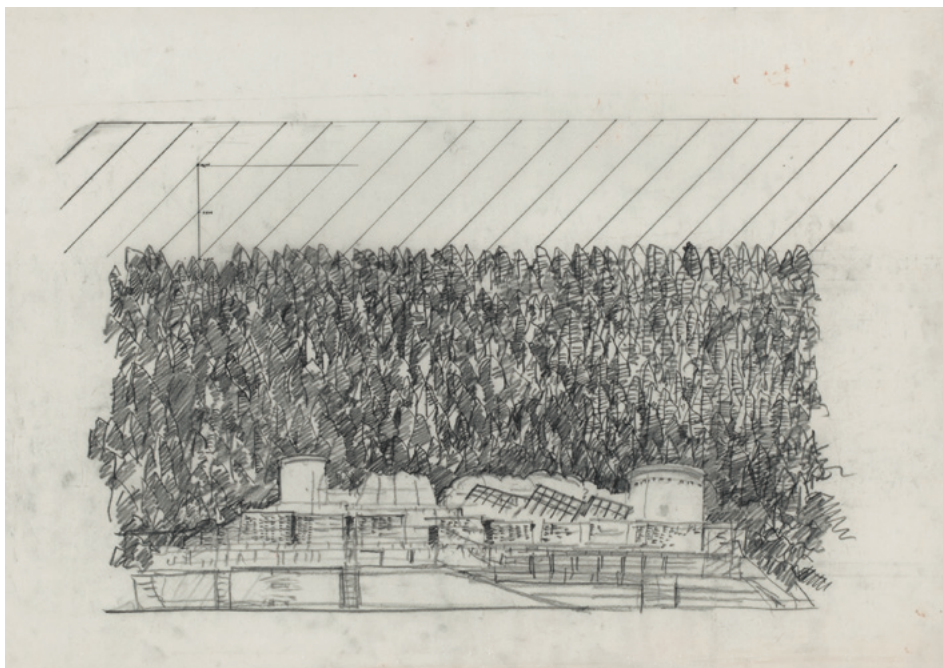


新梅田シティ・スカイビル (1993 大阪市北区) の頂部スケッチ

1992.10.20 | 鉛筆、トレーシングペーパー | 422 × 595

連結超高層建築として知られる新梅田シティ・スカイビルの頂部の空中庭園において、中央のヴォイド空間を、どのような形に割り貫くかをスタディしているときのスケッチである。円錐体の一部で割り貫かれたヴォリュームは、ヴォイド空間ではなく、空中を漂う円盤のような姿に変貌した。思考の意外な展開を示す、ファンタジーに満ちたスケッチである。

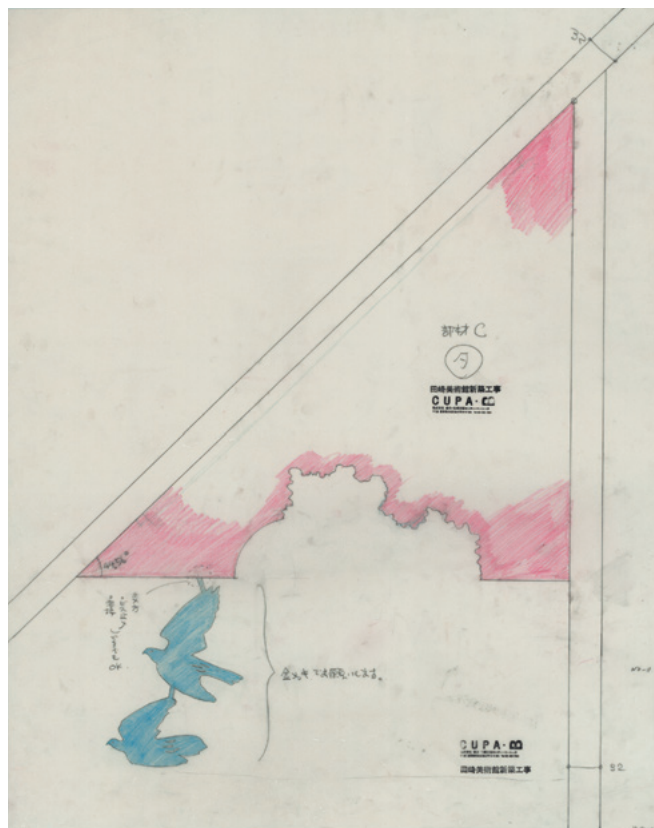
NAMA's Collection



内子町立大瀬中学校（愛媛県喜多郡内子町）の立面検討スケッチ

1992 | 鉛筆、トレーシングペーパー | 593×838

原の友人である小説家・大江健三郎の故郷の愛媛県で実現した中学校の初期のスケッチである。最終的なデザインに見られる要素が、早々に構想されている。この中学校は、大江健三郎の小説『燃えあがる緑の木』（1995年）の中で、舞台のひとつとして登場する。



田崎美術館（長野県北佐久郡軽井沢町）の詳細デザインを描いたスケッチ

1986 | 鉛筆、色鉛筆、インク、トレーシングペーパー | 827×663

この美術館では、手すりや壁面ニッチ内のパネルデザインなどに、フラクタルな形態と鳥などの生き物を組み合わせた細部デザインが多くみられる。それらの細部の形態も、原自身が原寸に近いサイズのスケッチを描いて決定している。こうした作業を経て、思考は、細部形状にまで染み渡る。

こどもの国建築関連資料

令和4年度収蔵品展「こどもの国」のデザイン——自然・未来・メタボリズム建築にて展示



こどもの国案内図

1:300 | 青焼 | 516×420 | 1966年資料を一部加工

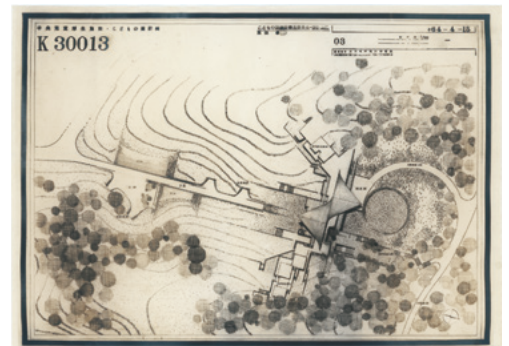
浅田孝によるマスタープラン。青焼でどのファイルにも挟み込まれており、計画中の建物の位置が色鉛筆で書き記されていた。建設が叶わなかった大高正人による修学旅行会館（図面内「ホステル 予定」箇所）、大谷幸夫による児童館（図面内「児童館 予定」）とあり、それぞれ提案していた建築のデザインが反映されている。「林間学校 予定」では、最終形態を変えて実現しているが、書き込まれている検討中図面は菊竹資料群より展示された。



児童館 1964

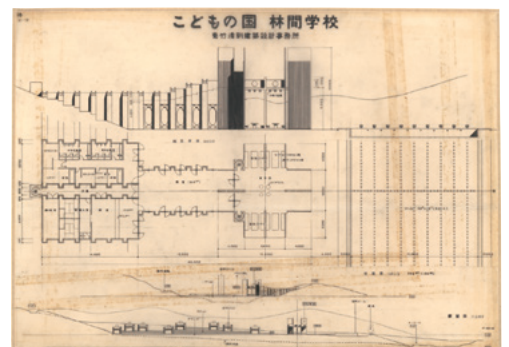
大谷幸夫 | 実現せず | 鳥瞰図 | 青焼 | 593×448

OTANI Sachio | Unbuilt | Bird's Eye View | Blue Print



修学旅行会館 1964

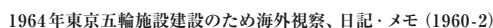
大高正人 | 実現せず | 配置図 | 1:500 | プリント | 420×591



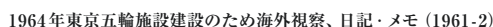
林間学校 1967

菊竹清訓 | 現存せず | 初期のイメージ・ドローイング | 鉛筆、絵具、トレーシングペーパー | 454×720

角田栄（1913-1993）は戦後、1958年アジア競技大会に合わせて建設された旧国立競技場を、建設省関東地方建設局管轄部第一課長として設計を担当した中心の人物である。これらは1964年東京五輪施設建設のための海外視察時の日誌や写真アルバム、聖火台、競技場内の装飾等が描かれているスケッチブックの一部である。日本で初めてのオリンピックに向け、刻々と海外の状況を記そうとする熱が伝わってくる。角田の人物像とともに東京五輪に向かう時代の社会状況および建築文化を伝える資料となっている。



左頁：FOX HOUSEの平面図、そしてイギリスからヘルシンキへ旅立つ機内でみた空景色のきれいな書き残している。右頁：(1960年)4月19日(火)の記録。コペンハーゲンの宿泊先、HOTEL EUROPAからの展望。その日の訪問先が細かく書き残されている。



「物凄い勢いでカーテンウォールがこの通りを蚕食しつつある。古い都市像は一変しつつある。」ニューヨークのマッドマン、パークアヴェニューの49thから51st
ストリートにかけての記述。Lever House (1952年、マンハッタンで初めて建てられたカーテンウォール工法の高層ビル)の近隣を含めて描かれた数々のスケッチ。

国立近現代建築資料館 紀要

第3号 2023(令和5年)

目次

口絵

- 2 NAMA's Collection

論文

- 8 原広司の建築論
—世界の建築思潮の変遷との比較考察—
小林克弘
- 18 近現代建築に関わる構造資料の承継とデジタル資料管理について
浜田英明、藤本貴子、竹内 徹
- 25 樋口清旧蔵吉田鉄郎蔵書 LE CORBUSIER-SAUGNIER, *Ver une architecture* (初版) について
加藤道夫、寺内朋子、青山(高瀬)道乃
- 32 こどもの国建築関連資料整理及び展覧会開催報告
小池周子

レポート

- 38 国立近現代建築資料館における資料収集の手法について
—令和4年度アーカイブズ・カレッジ(史料管理学研修会)短期コースに参加して—
青山(高瀬)道乃

プロジェクト解説

- 42 建築アーカイブズ研修映像教材の制作(令和3、4年度)
田良島 哲

活動報告

- 46 令和4年度 国立近現代建築資料館活動報告

I. 資料の調査・保管等 46 / II. 展示・教育普及 49 / III. 情報収集 55
IV. 調査研究等 55 / V. 委員会 57 / VI. 運営 58 / VII. 予算 58
VIII. 組織 59 / IX. 年譜 59

Bulletin of National Archives of Modern Architecture

vol.3 2023

Contents

Frontispieces

- 2 NAMA's Collection

Articles

- 8 HARA Hiroshi's Architectural Theory
— A Comparative Study with Changes of the Trends of Architectural Thoughts around the World
KOBAYASHI Katsuhiko
- 18 Succession and Digital Record Management of Structural Design Records
in Modern and Contemporary Architecture
HAMADA Hideaki, FUJIMOTO Takako, TAKEUCHI Toru
- 25 On LE CORBUSIER-SAUGNIER, *Vers une architecture* (1ère édition),
originally owned by YOSHIDA Tetsuro
KATO Michio, TERAUCHI Tomoko, AOYAMA TAKASE Michino
- 32 Report of Kodomonokuni Papers and Records and the Exhibition
KOIKE Shuko

Report

- 38 Methods of Collecting Materials at the NAMA:
From the experience of short course in "Archives College" by National Institute of Japanese Literature
AOYAMA TAKASE Michino

Project Explanation

- 42 Production of Visual Education Materials for Learning Archives of Architecture (2021, 2022)
TARASHIMA Satoshi

Annual Report

- 46 Annual Activity Report of NAMA, 2022 (Reiwa 4) fiscal year

I. Activities of Materials 46 / II. Exhibitions and Education 49 / III. Information Gathering 55
IV. Research 55 / V. Committee 57 / VI. Management 58 / VII. Budget 58
VIII. Organization 59 / IX. Chronology 59

原広司の建築論

[論文]

—世界の建築思潮の変遷との比較考察—

小林 克弘*

HARA Hiroshi's Architectural Theory

— A Comparative Study with Changes of the Trends of Architectural Thoughts around the World

KOBAYASHI Katsuhiko

HARA Hiroshi's architectural theory is written using peculiar terms such as porous body, floating, modality, multi-layer structure, discreteness and so on. Therefore, it is believed that his architectural theory is following a unique path without having a direct relationship with the architectural trends of the world at the time.

This paper compares Hiroshi Hara's theory of architecture with the world's architectural trends - the concept of Louis Kahn's room, Robert Venturi's "Complexity and Contradiction in Architecture", Postmodernism, Deconstructivism, etc. The aim is to position HARA's architectural theory in a broader perspective. When some relationships are discovered, we discuss points such as whether there is an influential relationship, or whether they are similar ideas that were born independently.

キーワード：『建築に何が可能か』、ルイス・カーン、ロバート・ヴェンチュリ、ポストモダニズム

What is possible in Architecture, Louis Kahn, Robert Venturi, Postmodernism

1. 本稿の目的

原広司の建築論は、有孔体、浮遊、様相、多層構造、離散性など、独特の用語を用いて書かれているため、同時代の建築思潮とは直接的な関係を持たない、独自の道を歩んでいるように思える。しかし、文化庁国立近現代建築資料館での昨年度の展覧会「原広司 建築に何が可能か—有孔体と浮遊の思想の55年—」（2022年12月13日（火）～2023年3月5日（日）開催）の準備に際して、改めて原広司の建築論を読み返してみると、世界の建築思潮と連関を持つと考えられる内容も多く含まれていることに気づかされた。そこで、本稿では、原広司の建築論と世界の建築思潮の流れを比較考察し、原広司の建築論をより広い視座の中に位置付けることを試みたい。関係を探る、広い視座に位置付けるといっても、影響関係を明らかにするということではない。複数の建築論の中に類似性が見られるといっても、そこに影響関係があるとはいえない場合も多い。同時代の社会背景や建築の状況から、それぞれ独自に類似した発想が生まれるということも多々あり得る。

本稿は、展覧会の図録での解説をさらに深めて、原広司の建築論と同時代の建築思潮に関し、約10年ごとに区切って、類似点や相違点を比較考察する。その考察を通じて、展覧会の内容や図録を補完する役割を担った紀要論文としたい。

2. 1960年代 モダニズム批判の始まり

2.1. 『建築に何が可能か』

原広司は、東京大学大学院博士課程在籍中の1961年にRAS設計同人を設立し、1970年にアトリエ・ファイとの協働を開始する。1960年代には、伊藤邸などの住宅、佐倉市立下志津小学校（第一校舎）や慶松幼稚園などの教育施設の作品を残した。この時期の原の建築思考を示す著作は、1967年に上梓した『建築に何が可能か』¹である。同書において、原は、近代建築の動向の整理と反省を行った上で、その後の作品創造の根幹となる有孔体の理論と浮遊の思想を素描している。

この著作は、次のような次の書き出しから始まる。

「建築とは何か」という問いは、「人間とは何か」という問いが不毛であると同時に、行動の指標とはなりえない。もし私たちが人間について問うなら「人間に何ができるか」を問うべきである。同様に建築についても、「建築に何ができるか」と問うべきであろう。この二つの問の内容には一見さしたる差異もないように見えるのであるが、実はかなりの断絶がある。「建築とは何か」なる問いの背後には、真の建築あるいは建築のイデーが存在し、それを把握したいという期待がうかがわれる。それは、建築の本質と表現されてきた。[中略] 静的な本質への志向は、今ある姿をすべて

*国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官、工学博士



図1 原広司展図録表紙
図録は当資料館のHPにてPDFを閲覧可



図2 原広司展の展示風景

仮象とし、死んだ存在としてとらえており、現実の表れから未来への投射力を読み取ることをしない。[中略] それに対して「建築に何が可能か」という問いは、過去から未来に至るプログラムの設定を可能にする。²

原のこの考え方は、ジャン・ポール・サルトルの影響であると、自ら随所で述べている。ちなみに、サルトルの言説を探ると、「方法の問題 弁証法的理性批判序説」において、以下のように述べている箇所がある。

元来一人の人間について彼が何で〈ある〉かをいうことは、同時に彼に何ができるかを言うことであり、その逆もまた真である。[中略] 個人が自己を客観化し歴史をつくるのに貢献するのは、与件を可能性の分野に向かって乗り越えて、すべての可能性のなかにある一つを実現することによってである。彼の投企はその時、おそらく行為者自身が知らない現実性をもつにいたるが、その現実性はそれが表明し、且つそれが生み出す矛盾軋轢によって、諸事件の進行に影響を及ぼすのである。³

原は、サルトルの言説の中の「人間」を「建築」と読み替えることで、建築の可能性を探るという姿勢を明確にしたのである。

『建築に何が可能か』の「第三章 反省—近代建築の方法とその批判—」において、原は、近代建築が目指した概念的目標、主導的概念である5つの概念——客観性、機能、運動、機械、部分と全体——に沿って、近代建築家の発言や背景にある方法や理念を丹念に検証する。原が、単に近代建築を学習するだけでなく、5つの主導的概念に沿って、その限界や可能性を丹念に考察し

ていることが、極めて先鋭的である。この時期において、こうした視点から近代建築を反省した書は、世界的な視野で見ても見当たらない。

『建築に何が可能か』の最後の約50頁において、原は、有孔体の理論と浮遊の思想を素描する。有孔体とは、内部空間の要請にしたがって形が決定される空間であり、光、風、人の動きを導く孔（開口部）のあり方を強く意識した空間であり、純粹形態ではなく、おのずと不整形な形状になる。浮遊は、きわめてあいまいな無目的な運動、方向が定まらない運動を意味し、偶発的な出会いや結合を生み出す多様な可能性を秘めた状態を指す。展覧会のタイトルに用いられたように、有孔体の理論と浮遊の思想は、その後の原の作品において、形を変えながらも、常に作品創造の根幹を支えるものとなった。

2.2. 1960年代の世界の建築思潮

この時期の世界の建築思潮から見ると、有孔体の理論と浮遊の思想はどう位置づけられるのであろうか。まず、有孔体の理論は、国際建築が主張した、世界のどこでも通用するデザインと機能を備えた建築ができるというインターナショナルイズム、およびそれが生み出した「均質空間」に対する批判でもあった。ちなみに、そうした国際建築という考えは、1960年代には、「モダニズム」という一種のイデオロギーであるという批判を込めた用語で呼ばれるようになっていた。均質空間とは、ミース・ファン・デル・ローエのユニヴァーサル・スペース（普遍的空間）に示されるように、柱と床からできた無限定の空間であり、多用途に使用可能な空間を指す。1960年代には、例えば、ルイス・カーンが、ミースの空間に対して、「ルーム（部屋）」としてまとまった空間の重要性および光の重要性を主張するが、有孔体の

理論もそうしたモダニズム批判という大きな流れの一部であった。

ルイス・カーンをより詳細に考察しよう。カーンは、1960年代半ばから1970年代初めにかけて、盛んに、「ルーム」や「光」を巡る考えを著した。そこでカーンは、「建築はルームを形成することです。つまり諸々のルームからなる集合体。光はそのルームの光です。二人の間にとりかわされる想いは、ルームが異なれば異なったものになります」⁴、さらに、「ルームの何が素晴らしいかといえば、ルームの窓を通して入ってくる光がそのルームに属しているということです。そして太陽はルームが作られたときはじめて太陽自身の素晴らしいさを知ります。それ故、ルームを作るという人間の創造はほとんど奇跡というほかありません。人間が太陽のかげらを要求できるとは[後略]」⁵と述べている。

カーンの言葉は、大変詩的ではあるが、有孔体理論と比べてみると、独立した内部空間、光の入れ方、への注目という点で共通している。加えて、有孔体理論は、純粋幾何学とは異なる形態を主張していたのであるから、より総合的なモダニズム批判であったといえることができる。

1960年代における、もうひとつの代表的なモダニズム批判は、ロバート・ヴァンチューリが1966年に著した『建築の多様性に対立性』⁶である。ヴァンチューリは、モダニズムが純粋性を好むことに対して強い批判を述べた上で、建築の豊かさは、純粋さや単純さや抽象性の中にあるのではなく、マニエリスム、ロココ、バロック、イタリアの街並みの中にあることを述べ、ミース・ファン・デル・ローエの有名な教条「レス・イズ・モア」を、「レス・イズ・ボアリング（退屈だ）」と批判する。そして、単純化された安易な純粋性ではなく、「困難な全体」の重要性を主張する。

『建築の多様性に対立性』の冒頭は、こう始まる。

私は建築における多様性に対立性を好む。[中略]私がここで取り上げようとするのは、芸術には欠くことのできない何かを含んだ、現代の豊饒で曖昧な経験的事象に基づいた、多様性に対立性を備えた建築である。建築の分野以外では、多様性に対立性とは広く認められている。⁷

そして、同書の中で、ウィリアム・エンブソンの『曖昧の七つの型』を下敷きにした建築形態の読み取り方を提示した。

ウィリアム・エンブソンは『曖昧の七つの型』という

著作の中で、「これまでは詩において望ましくないとされてきた意味の不正確さを、あえて詩の長所とみなした」のである。エンブソンは彼の理論を「この上なく曖昧さを体現した人」シェイクスピアの読解によって裏付けたのだが、エンブソンが着目したのは「学者が良く指摘するシェイクスピアの混乱した考えや支離滅裂な文章ではなく、もっと端的に、彼の精神及び芸術の力と多様性」なのである。⁸

ここには、原が浮遊という表現に込めた、あいまいな運動、方向が定まらない運動、偶発的な出会いや結合を生み出す多様な可能性と相通じる主張を見いだすことができる。

2.3. 考察

このような比較考察を行うと、有孔体の理論と浮遊の思想と、アメリカにおけるモダニズム批判は、共通点が多い。冒頭に述べた通り、両者の間には影響関係があるわけではなく、同時に着想されたものと考えられる。デザイン的には、1960年代の原の作品には、表現主義的な側面を見ることができる。特に、伊藤邸の壁の配置や屋根の形にそうした傾向が顕著であり、当時のデザインとしては、画期的なものであったということもできよう。原自身、表現主義への次のような言及がある。

設計を協同で進めてきたが、そのあたりの意識はどうやら形式化した近代建築に対する反抗、どちらかといえば既成のスタイルの破壊活動にあった。[中略]有孔体のデモンストレーションの意識が強く、表現主義的な斜面にのってしまった感がないわけでもない。⁹

表現主義的なデザインへの関心はレイナー・バンハム『第一機械時代の理論とデザイン』¹⁰の末尾の解説の中で、この書の特色の3点目として、未来派や表現主義の重視している点を評価していることにも表れている。この解説を読むと、原はバンハムの本を熱心に読んだことがわかり、第一機械時代という表現から、原自身の「建築は、機械からエレクトロニクス装置への転換によってあたらしくなる」¹¹という言葉にほめかされるように、TVに象徴される第二機械時代のイメージ、さらには、エレクトロニクスに応じる建築という着想を得ることになったようにも思える。

3. 1970年代 ポスト・モダニズムへ

3.1. 反射性住居と世界の集落調査

1970年代の原広司は、世界の集落調査と新しい形式の住居デザインの探求という方向に向かう。新しい住居形式は、その内部空間において都市の要素や自然の要素を映し出すという意味で「反射性住居」と呼ばれた。原自ら、その特徴を8点に整理して述べている。¹²

1. 内核（スカイライトを持ち、天井が高い通路と居間部分。その住居固有の造形的景観を持つなかば外の空間）。
2. 対称軸を基準としたものの配列。
3. 慣習的な住居の外観。あるいは、周辺で目立たない外観。
4. 必要以上に開口部を持たない外壁。比較的閉じた住居（しかし、自然にむけては大きく開かれた住居）。
5. 内核から採光する小さな個室群。
6. 住宅内における季節に対応するゾーニング。そのための日本間。
7. 地形が斜面であれば、斜面に沿った床の高さの設定。
8. 明るい室内。音響的には、ほぼ一室住居。やや長い残響時間。煙突効果にもたよる通風。

「反射性住居」は、栗津潔郎（1972年）に始まり、原広司（1972年）でより確かな形式に高まった。有孔体という説明は見られないが、上部からの光を伴って住居内を貫く空間である「内核」は、まさに有孔体そのものであった。反射性住居では、有孔体は内核として中心を貫く吹き抜けを持つ形式が多く、ニラム邸（1978年）では、うねる曲面壁を伴った吹き抜けを伴って空間はより官能的に、曲面の下面が下から見上げることができることで、浮遊のイメージも具現化した。

「反射性住居」の外観では、1960年代の多面体的な形態とは異なり、単純な形態が採用され、意図的に「目立たない外観」となっている。8つの特徴の2点目に挙げられた「対称軸を基準としたものの配列」は、対称という伝統的な構成手法を主張しているように聞こえる点がやや奇異に思える。しかし対称構成は、その中央の軸線上に明確な内核を作ることができるという点で有用だったのであり、自然光の入り方、風の流れ方、周囲の見え方が室内に反射・反映されることで、対称という強い構成自体も変貌させるという意図と自信を見ることができる。

「反射性住居」の開拓と並行して、1970年代に、原は東京大学生産技術研究所の原広司研究室において、海

外の集落調査を行っている。地中海周辺地域に始まり、中南米地域、東欧、中近東地域、インド・ネパール地域、最後のアフリカ地域に至るまで、計5回行われ、各集落を巡りながら、図面・写真などの記録を作成するという方式の調査であった。その記録は、鹿島出版会の『SD』別冊5冊や『集落への旅』（1989年）¹³にまとめられ、後に『集落の教え100』（1998年）¹⁴において集落から学んだデザイン原理が整理されている。

原は、世界の集落調査の意義を歴史が見落とした重要なものへの着目であると述べる。

建築の歴史と文化といえば、壮大な建築、例えば、神殿、王宮、寺院等々が中心となって語られる。また、そうした歴史を飾る建築をつくった建築家達の偉大さが語り継がれる。古典となりうるこうした建築や巨匠たちと対比的に、名も知られぬ集落があり、これらを作った無名の人々がいる。集落や無名の人々は、古典的建築や巨匠たちに劣るのだろうか。決してそうではない。確かに、パルテノン素晴らしい。けれども、パルテノンと同じように輝かしい集落や小都市に、世界各地であなたは出会い、深い感動に打たれるだろう。しかも、そうした見事な集落には、現に人々が生活しているのである、つまり、集落という芸術は、文字通り生きているのだ。建築に限らず文化一般には、時代や様式の粋となりうる古典的、支配的な層と、権威も与えられず、それが文化であるという自覚もないところでつくられる大衆的な層との二つの層がある。建築にあっては、単純化すればこの二層構造は、古典建築と集落というかたちになる。¹⁵

また、それが現代建築を考える上で参考になるといいうヴィジョンも持っていた。

1970年代は、近代建築が大きな変貌を遂げた時代である。この変動の10年間に、私たちは海外の集落調査を行っていた。この変動期のさなかにあつて、建築家はふたつのレファレンスをとった。一つが古典建築であり、もう一つが集落である。私たちは、結果としてみると、後者を参照することになったのである。¹⁶

3.2. 1970年代の世界の建築思潮

海外においては、ヴァナキュラーな集落に対する関心は、1970年以前から見られ、特に、バーナード・ルドフスキー（1905～88年）が、1940年代に始めたヴァナキュラー建築調査をまとめた展覧会「建築家なしの建

築」(ニューヨーク近代美術館、1964年)¹⁷を通じて世界に広まった。また、ヴァナキュラーな集落から現代建築のデザインの手掛かりを得ようと考えた建築家も存在した。たとえば、オランダ構造主義建築家アルド・ファン・アイクの代表作「子供の家」(1960年)の屋根形状は、ヴァナキュラー建築調査の影響といわれている。実際、ファン・アイクは、1960年には集落調査のためアフリカの集落に赴いている。

原自身、今回の展覧会のオーラル・ヒストリーの動画の中で述べているように、ルドフスキーの活動は知っていたし、集落に目を向けることが、世界的な関心事のひとつになっていたことも認めている。ただ、そこから見いだした教えを、どのように実践していくかという点は、それぞれの建築家に委ねられており、その中でも、原が最も熱心にそのことに取り組んだ建築家であることは、疑う余地がない。

1970年代に生じたより大きなモダニズム批判は、次第にポスト・モダニズムという言葉で表現されるようになる。ハリー・フランシス・マルグレイヴ、デヴィッド・グッドマンの共著『現代建築理論序説 1968年以降の系譜』によれば、この言葉が、いつ最初に使用されたかは明確ではないが、チャールズ・ジェンクスが1975年秋に『AA』の季刊誌に発表した小論「ポストモダン建築の黎明」の可能性が高い、と推察している¹⁸。チャールズ・ジェンクスはそれから2年とたたないうちに、『ポスト・モダニズムの建築言語』(1977年)をまとめ、ポスト・モダニズムという言葉は、一世を風靡するようになった。同書によれば、「ポスト・モダニズムの建築とは、もし手短な定義が求められるなら、一度に少なくとも二つのレベルで語りかける建築ということになるだろう。つまり、一方では、他の建築家および建築の意味に特別に関心を持つ少数の関係者に語りかけ、そして、もう一方では、快適性とか伝統建築とか生活方に注意を払う一般大衆あるいは地域住民に語り掛ける。だからポスト・モダニズムの建築は混成的(ハイブリッド)に見えるだろう」¹⁹と、「二重のコード化」(解釈のレベルの重層化)、「ハイブリッド」(混成的)という特徴を強調する。そして、当時生まれつつある建築の特性を、記号論的な視点を含めて、歴史主義、直進的復活主義、ネオ・ヴァナキュラー、アドホズム+アーバニズム=コンテクスチュアリズム、メタファー、ラジカルな折衷主義という言葉で分類整理しながら説明する。

こうした説明に対して、マルグレイヴは「同書全体を通じて再登場したテーマは、メタファー(隠喩)の問題である。例えば初期モダニズムでは、『工場』のメタ

ファー』や『機械のメタファー』を採用するのは、その類似性が産業的な堅固さを示唆する場合に限定されていた。また、『TWA ターミナル』と『シドニー・オペラハウス』が大衆からの支持を得たのは、鳥やヨット、あるいは亀をイメージしやすいからであった。しかし、こうしたメタファーによる解釈は、建築を『オブジェとしての建築』といういささか表面的レベルに限定してしまう」²⁰と批判的に振り返っている。

3.3. 考察

住居の外にある自然や都市を住居内に反射させるというメタファーを備えた方法や、意味を持たせるために細部デザインに工夫を凝らすという点では、原のデザインはポスト・モダニズムと共通しているようにも思えるが、ポスト・モダニズムの主流が、歴史的な建築要素の現代的使用を試みたのに対して、原の場合は、集落や自然の要素に目を向けた点で大きく異なっていた。

また、反射性住宅に見られる対称軸を基準としたものの配列は、対称性を否定したインターナショナル・スタイルへの対抗とも読めるし、ポストモダン・ヒストリシズムとの同調とも読める。しかし、先述の通り、対称構成は、中央の軸線上に明確な内核を作ることができるといって有用だったのであり、自然光や風の流れが室内に反射・反映されることで、対称という強い構成事態も変貌するという意図の実践の道具ともなった。

集落調査については、原研究室の成果は、集落の教えを意識的に現代建築の設計に生かすという点で、最も多産な考察と成果を挙げるようになった。

4. 1980年代 原広司独自の脱構築

4.1. 多層構造、様相、伝統的空間

展覧会は、10年ごとに区切って、原の作品の変遷をまとめているので、機械的な印象を与えたかもしれない。しかし、原の作品は、10年ごとに大きく変化しており、意図して変えた、変わったのではないかと思えるほど、見事に10年ごとにくることができる。

原の設計活動は、住宅が中心的な課題であった1970年代とは対照的に、1980年代は、美術館や公共施設の作品が多くなり、規模も大きくなる。規模のみならず、外観デザインの扱い方に大きな変化が生じる。そうした変化の契機のひとつは、1980年代前半に、町田や渋谷で、街並み活性化のデザインに携わったことにあると思われる。そこでは外観に、「フィクショナル・ファサード」という表現で、自由に多彩なデザインを施す試みがなされる。この変化の原因について、原はこう述べる。

住居を設計するとき、私は外観を目立たせないように心がけてきた。その理由は、現代の都市の、特に非西欧文化圏における現代都市の風景の荒廃を見てきたからである。[中略]少なくとも近隣とデザインについて話し合いが行われる余地がない限り、住居は外観を消すくらいの構えでないといけないと考えてきた。[中略]ところが、時代は変わってきた。近隣との話し合いが成立するような必然性が、各都市において生まれてきていたのである。私はその渦中に飛び込んでしまった。²¹

結果的に、1970年代に住宅の内部空間で試みたデザインが、外観において表現されることになり、内外の反転が生じた。そして、1980年代後半には、田崎美術館、飯田市美術博物館、ヤマトインターナショナルという、一連の新たな建築的テーマを備えた作品群が次々に完成する。この時期の代表的な著作『空間〈機能から様相へ〉』のなかで、21世紀の建築について、確信を持って、こう述べるに至る。

新しい建築は、次の二つの表現傾向をもつようになり、相対的には幻想性を帯びてくる。そのひとつは、今世紀の特徴であった「構成の理論」（機能的構成、抽象形態の構成、プリコラージュなど）が排され、たとえばオーロラ、蜃気楼、虹、星雲などの自然現象と親近性を持つ「場の理論」（誘導、グラデーション、変動する地形的曲面、呼吸、予感、生成消滅などを総合する概念で現時点ではうまく表現できない）が優越することによって。第二は、現実の生活を演劇的にとらえる傾向が強まり、建築が物語性、フィクショナルリティをもつことによって。²²

それらの作品の外観では、雲形の屋根、多彩な形態の重なり合い、山並みを連想させるような形態が特徴となる。それらの諸形態群は、明確な原理で統合されるのではなく、緩い関係のまま並置される。すなわち、あいまいな形態群が浮遊の状態に置かれる。内部空間では、反射性住居の内核がより大きくなり、柱が林立する吹き抜けに導かれる通路空間や展示空間が生まれる。変化する自然現象のような様相を建築に取り入れる試み、人間の意識に訴える手段としての多層構造という考え方が提唱された。

こうした意識の構造の考察と並行して、日本の伝統の中に、像の重なりや境界の曖昧化といった概念で全

体が組み立てられる方法を見いだしたことも、原の建築論の大きな特色となっていく。

その認識は、「〈非ず非ず〉と日本の空間的伝統」（1986）²³の中で素描された。

弁証法と〈非ず非ず〉の論理とは、ともに展開を生み出す力を持ち、状況の固定と停滞を打破しようとする。しかし、このふたつの論理は、どの方向に展開せよといった具体的な指示をしているわけではない。展開についての二つの様態あるいは原因が説明されているのであって、展開の方向はともに実践的なレベルに任されており、それ故自由であることが保証されている。[中略]私たちの時代は、相対論の時代である。私たちは、絶対的なもの、不動なるものから遠ざかっていく。この全体的な様相において、非ず非ずの論理が新鮮に浮かび上がってくる。その時、日本の中世の芸術が圧倒的な豊饒さをもって立ち現れるのである。²⁴

そして、「〈あると同時にないところの境界において生成される空間〉」²⁵という言葉を用いて、日本の空間的伝統を考察する。

加えて、弁証法と〈非ず非ず〉の論理を比較し、芸術のような表現行為においては、〈非ず非ず〉がより有効に働くことも指摘する。原はこう述べる。

弁証法は、矛盾の生成と拡大についての説明を、それ自体の中に包摂していないように思われる。「矛盾がある」というところから、弁証法が現れてくる。だから、比喩的には、弁証法は時々やってくる。これに対して〈非ず非ず〉は、と同時にという論理の装置を持っているために、途切れることなく絶えずやってくる。「矛盾がある」が建前であるからである。合理的な構えは、何が正しいかを決定しなくてはならない。それに対して、芸術のような表現行為は、何が正しいかを主張する必要は全くない。可能なる世界を暗示する展開力だけが問われる。²⁶

4.2. 1980年代の世界の建築思潮

この時期、ポスト・モダニズムという言葉は、広まっていたが、その歴史主義的な傾向に対して、また安易なメタファーの議論は、次第に下火になっていく。それに代わって、ポスト・モダニズムを批判するような思潮として登場するのが、脱構築主義と批判的地域主義である。

ニューヨーク近代美術館 (MOMA) において1988年に「脱構築主義者の建築」展²⁷が開催された。そこでは、建築が更なる発展を遂げるためには、建築を縛ってきた原理「建築性」に目を向け、それらを揺さぶることが必要であることが主張された。「建築性」として挙げられたのは、主に次の3点である。

- ・機能と表現の密接な関係
- ・純粹幾何学への愛着
- ・安定した構造の表現

そうした「建築性」を揺さぶるデザインを行っている建築家という視点で選ばれたのは、ピーター・アイゼンマン、フランク・ゲーリー、ザハ・ハディッド、コープ・ヒンメルブラウ、レム・コールハース、ダニエル・リベスキンド、バーナード・チュミである。彼らは、その後の建築界を担うことになるが、リベスキンドなどは、当時まだ実作がない建築家であった。

もうひとつの反ポスト・モダニズムの動向としての批判的地域主義は、ケネス・フランドン「批判的地域主義に向けて——抵抗の建築に関する6つの考察」(1983年、ハル・フォスター編『反美学』、勒草書房、1987年所収)によって主張された²⁸。マルグレーヴは前掲書において、フランプトンの主張について次のように述べている。

彼は、文明(道具を根拠とする理性によって支配された概念)と文化(文明の創造的な局面)を区別することから始めた。そして、最初に彼が冷笑の標的としたのはポストモダニストの前衛気取りであり、それは「解放された近代のプロジェクトの破綻」と「批判的な対立文化の衰退」の両方を示していると論じた。[中略]彼の見解では批判的地域主義は、場所／形態、地形、文脈、気候、光、触覚、テクニク・フォーム(構築的形態)の一覧表から、その目標を達成する。[中略]最も重要な点は、フランプトンが触覚とテクニクス(構築術)を新たに強調したことである。つまり触角は建築を単なる視覚的あるいは記号学的芸術以上のものであるという事実に着目させるものであり、テクニクスは建設の方法とディテールに関わり、それ故、「材料、工芸と重力の間であってそれらをまとめあげる潜在的手段」として「ファサードの表現よりも、構造の詩的な表現」に寄与するものである。このようにして、触覚とテクニクスは、彼がその性格を舞台装置のとみなすポストモダン歴史主義のみならず、当時生まれつつあったデコンストラクション建築にも対抗するものであった。²⁹

フランプトンの主張を読み込むと、重要な点は、地域的あるいは地方的であれば何でもよいということではなく、地域的であるが、その内に、普遍的なものあるいは発見的なものを備えているということであった。それゆえに、単なる地域主義ではなく、批判的地域主義という言葉が使われた所以である。

4.3. 考察

脱構築主義は、純粹形態や機能と形態の密接な関係などを、建築の自由を束縛する要因として疑問視し始めたが、原は早々にこの点に気づいており、先見の明をもって1960年代から独自の方法でモダニズムの超克に取り組んでいたのである。

また、「〈非ず非ず〉と日本の伝統的空間」の冒頭において、伝統という言葉について、原は以下のように述べる。

世界の集落を調べていて知ったのであるが、伝統なる概念は、ナショナリズムに帰属するのではなく、インターナショナリズムに帰属する概念である。こうした見解が生まれてきたのは、日本的な空間であると信じこんでいるような空間を、アフリカや中米で見出すという経験を重ねてきたからである。[中略]伝統を論じる場合、当然ながら文化の差異が重んじられる。しかし、差異性と同時に、類似性や同一性にも着目すべきであって、もし類似性や同一性に関するネットワークを描くならば、世界各地の伝統は孤立点のないネットワークを組むにちがいない。文化が伝播によって形成されるだけでなく、多発的にも形成されることを考えれば、遠く離れた地域の伝統が、ある共通項によって結びつけられることが頻繁に起こるだろう。この共有のネットワークこそ、伝統がインターナショナリズムに帰属することを明らかにするだろう。³⁰

伝統が、地域的なものや国・民族に限定される概念ではなく、むしろ、インターナショナリズムの視点から、類似性や同一性、ひいては普遍性を備える概念とする考え方は、批判的地域主義の論議との類似性を備えているということができよう。

5. 1990年代

5.1. 巨大建築の実現と空間の文法

1990年代には、原の建築作品の規模は飛躍的に大きくなり、そうした人間のスケールを超える巨大さに対し

て、いかなる建築的工夫を導入するかが新たな課題になった。

1993年の新梅田シティ・スカイビルでは、空中庭園を備えた連結超高層という世界初の試みを成功させる。JR 京都駅は、1991年に国際的に著名な7名の建築家による指名設計競技にて原広司の提案が最優秀案に選ばれ、1997年竣工に至った。その地形学的コンコースは大階段を備えた動線になり、谷のメタファーとなり、その上部は様々なタイプの屋根で内部化される。大空間の中で、人の行動を誘発するアトラクターが随所に置かれ、人々の自由な動きや偶然の出会いの場が生まれる。

1998年の宮城県図書館は、図書館を含む文化センターとしての役割を備えており、1階は公園内通路、都市内街路のような空間となり、様々な文化的アクティビティの間を散策する場となった。この通路でもアトラクターが重要な役割を果たす。札幌ドーム（2001年）は、サッカー・野球兼用のドーム型スタジアムであり、ドームの構造上、閉じた大空間を作るという点で、他の巨大建築とは異なるデザインテーマへの挑戦であった。

原は、こうした大規模建築を実現しながら、並行して、それまでに用いてきた言葉や用語を「空間の文法」として整理することを試みている。そのひとつは、『GA JAPAN』1997年1月号から、11回にわたって連載されている。まず、連載の目的について、「今までこういった言葉を使って自分の建築について語ってきたのですが、それはみんなで使える言葉を用意しようという意識が強かったからです。『様相』とか『世界風景』という言葉があるとすると、それは自分の建築を説明する言葉ではなくて、その時代の空間を説明する用語として用意したものです。それを意識的に使って建築をつくってみるというようなことだったと思う。今までいろいろな言葉で言ってきたようなことを、ここでは整理してみようと思います。ある程度はそうした言葉・概念がそろってきたかなという感じを、今僕は持っています」³¹、と語る。

その連載で提示されたキーワードやキーとなる概念は、抜粋すると、以下のように述べられている。

- 第1-2回 領域・境界 位相(トポロジー)、均質空間、多層構造
- 第3-4回 場・中心 地形、方向性、特異点、場の形成子、アトラクター
- 第5回 場所・近傍 固有な時間、歴史的コンティニウム
- 第6回 記号場 ランドマーク、局所呼応性
- 第7回 径路・トラヴァーシング 経験・シミュ

レーション、トリップ、情景図式／世界風景

第8-9回 シンタグム・パラダイム 部分と全体、配列、建築的要素、様式、構築／解体

第10回 コンティニウム(連続体)・インディヴィデュウム(孤立体) ブリコラージュ／混成系、連続／非連続

第11回 様相 様々な時間、可能体、可能世界、因果律／アクシデント

この言葉から理解されるのは、1990年代が、原にとって、主要な言葉が出そろいつつあり、それまでの建築論を「空間の文法」として取りまとめる意欲をもつに至った時期ということであった。こうした取りまとめの作業と並行して原は、人間のスケールを超える巨大さに対して、有孔体、浮遊、様相、経路などの発想を魅力的に展開するための建築的工夫について具体的に述べている。それらはたとえば、空中庭園、谷(地形)、アトラクターなどである。ただし、具体的に論じられるが、しばしば位相幾何学や記号論による抽象的な理論化もなされるため、しばしば難解な建築論ともなった時期でもあった。

一例をあげると、原は、〈アトラクター〉によって〈場〉と〈記号場〉を誘起する方法がある、と説明する。この〈アトラクター〉の配置を行う際に配慮すべきことを要約すると、下記ようになる。

たとえば、椅子と机というアトラクターは、人間行動の〈場〉を作るためのアトラクターであり、もともとは別々のものであるが、人間が椅子に座り机に向かうという〈出来事〉が導入されると、両者はひとつの連続体に転化されるという〈局所的呼応性〉が生まれる。〈記号場〉の例としては、2本の塔という〈アトラクター〉を人が同時に見ると、塔の間にある種の交通つまり〈局所的呼応性〉が発生して、そこに〈記号場〉が生じる。³²

5.2. 1990年代の世界の建築思潮

1990年代になるとは、モダニズム批判、ポスト・モダニズム、脱構築主義といった理論的な闘争が影を潜める。70年代、80年代を経て、堅固なモダニズムは姿を消し、批判する対象がなくなることが、ひとつの遠因と考えることができるだろう。その結果、何かを否定する、あるいは、何かを批判するという建築思考ではなく、多様な「希望的」建築思考、それを実現する、あるいは、理論化するための建築論が前面に出てくる。

これまでも、しばしば参照しているハリー・フランシス・マルグレイヴ共著『現代建築理論序説 1968年以

降の系譜』は、1990年代の変化について、こう述べている。

1990年代の新しい点の中で重要なものの一つは、いささか唐突で、だれも予想していなかった「プラグマティズム」への着目であり、この戦略の最高責任者は、レム・コールハースである。矢継ぎ早に発表した挑発的な建築、プロジェクト、出版を通じて、コールハースと彼の事務所 OMA は、アイゼンマンの議論の核心にあった〈形態の自律性〉という聖域に打撃を与えた。コールハースの議論の要点は、建築家は、資本主義の力にあらがって格闘や抵抗をせず、むしろ資本主義を収奪し搾取すべきだ、というものだった。³³

そして、ミニマリズムへの傾倒もひとつの大きな動きであることを指摘する。「時を同じくして1970年代に現れたもう一つの作品群の傾向は、よりいっそう静寂な方向へ向かうものだった。その方向性やアプローチは、もっと根本的な関心に焦点を合わせていた——それは新しい素材とその感覚的な効果の開発、盛期モダニズムから譲り受けた建設的形態をシンプルなディテールでまとめる術、建築経験そのものの現象学的性格への興味である。これらの同時進行していた探求を分類するには、『ミニマリズム』という範疇名を用いて緩やかにまとめるほかにないかもしれない」³⁴と述べ、代表的存在としてヘルツォーク&ド・ムーロンを挙げる。

5.3. 考察

原が、大作を実現しながら、自らの建築論の体系化に臨むという姿勢は、「プラグマティズム」的であると考えられることもできよう。つまり、あれだけの大作が実現していくという現実を基にしつつ、自らの建築論をより明瞭な形に整理しようという姿勢はプラグマテックであるということができよう。

一方、原には、形態主義や空間主義からの撤退を見ることはできない。むしろ、形態や空間の論拠を発見して、その様相の可能性を広げ続けた。多様性や曖昧さを肯定するのであるから、ミニマリズムに傾倒することもなかった。このように大雑把な整理をしてみると、1990年代には、原の建築論は大きくは世界の建築思潮と連関を持ちつつ、一方では、大きく異なってきたということが出来る。そもそも、建築思潮の多様化が進んだために、原に限らず、それぞれの建築論の連関の有無自体が判断しにくくなったというのが1990年代であったということもできるだろう。

6. まとめ

原は、1997年に東京大学を定年退官して、アトリエ・ファイとの協働設計を継続する。2000年代になると、1990年代に比べると、作品の規模はやや小さくなるものの、それまでの建築論に基づく実践はますます充実する。

その中で、モンテヴィデオの実験住宅(2003年)は、ウルグアイの首都の市庁舎広場において、仮設の住宅博物館のような施設として実現した作品であり、他のラテンアメリカの2都市において、新たな現代の集落をつくるという計画に発展する。この計画において、原は、ディスクリート(離散的)に住むという考え方によって、集落の教え、デザインを論理化するための位相幾何学などを統合する空間化を試みた。

「ディスクリート」は仮に訳語が「離散」でなくとも、ばらばらである状態を想起しがちである。それゆえ、〈一人都市〉のような状態を想起しそうなのであるが、そうではなく「離散性」はこれまで述べてきた通り、人々が良好に「離合集散」する状態を指示している。〈ディスクリート〉な社会は、可能性として、自立した個人と最も多様な集団が成立する仕組みをもつ社会を指していると考えてよいだろう。³⁵

この原の引用に示されているように、ディスクリートは単に状態を示すのではなく、かつて原が「浮遊」という言葉で表現しようとした、自由な人間関係、自立した個人と多様な集団が成立する仕組みを持った社会が意図されている。ここにおいて、『建築に何が可能か』の円環のひとつが元に戻ったように思われる。しかし、元に戻るという概念は、原の建築論には相応しくない。むしろ、自由、個人と社会の関係、多様性、曖昧さなどの価値がより高次の次元で、再考されるようになったと考えるべきであろう。

こうした原の建築論を、世界の建築思潮との関係の中に位置づけようとする、大きな戸惑いを感じざるを得ない。というのも、世界の建築思潮自体が、2000年代になると、さらに多様化し、曖昧化し、個人化し、感覚化し、簡潔に述べることができないものになったからである。それまでの建築理論の枠組みでは概説できないものになったということもできるだろう。まさに、建築論の状況自体が離散的になったのである。

マルグレーヴは、次のような言葉で、建築理論が直面している状況を説明する。

芸術は主題の複雑さや曖昧さのようなことによって豊かになっているのだ。曖昧さとは複数の解釈の可能性があり、それらが等しく魅力的であることと定義できる。[中略] 建築は——建築理論が、しばしばそうあるべきだとしてきたように高度に概念的な営みとは程遠く——おそらく際立って感情と多感覚に基づく経験であり、組織化された生命体が自らに刺激を与える周辺世界に対して示す反応であると考えられる。音楽と同様、建築には感情的な反応を即座に引き出す能力があり、設計者がこのプロセスを深く理解できていればいるほど、より優れた（長く維持される）デザインとなる。[中略] 間違いなく私たちは、いま全く新しい建築理論の段階に入りつつある。³⁶

まったく新しい建築理論がいかなるものかを述べることはできないが、概念的というより身体的、形態自律主義というより人間波及主義なものになろう。それは、原の建築論に見られたいくつかの概念——曖昧さ、浮遊、多様さ、意識にとっての快適さ、「非ず非ず」、等々——と無縁ではない何かになっていくと推察される。そう考えると、原広司の一連の建築論の展開は、来るべき建築論への序奏の役割を担っているのではないだろうか。

注

- 1 原広司『建築に何が可能か』学芸書林、1967年
- 2 前掲書、9-10頁
- 3 ジャン・ポール・サルトル著、平井啓之訳「サルトル全集第25巻 方法の問題 弁証法的理性批判序説」人文書院、1962年（原著1960年）、104-5頁
- 4 前田忠直『ルイス・カーン研究 建築へのオデュッセイア』鹿島出版会、1994年、15頁
- 5 前掲書、183頁
- 6 ロバート・ヴンチューリ著、伊藤公文訳『建築の多様性と対立性』鹿島出版会、1982年（原著1966年）
- 7 前掲書、33頁
- 8 前掲書、46頁
- 9 原広司「現代建築の実践的課題」、『建築文化』1968年4月号、59-90頁
- 10 レイナー・バンハム著、石原達二／増成隆士訳、原広司校閲『第一機械時代の理論とデザイン』鹿島出版会、1972年（原著1960年）
- 11 原広司『住まい学体系／030 住居に都市を埋蔵する』住まいの図書館出版局、1990年、13頁
- 12 原広司「形式へのチチェローネ——新しい住居形式を求めて」、『建築文化』1979年12月号、110-124頁
- 13 原広司『集落への旅』岩波新書、1987年
- 14 原広司『集落の教え100』、彰国社、1998年
- 15 原広司「集落への旅」、2-3頁
- 16 原広司「集落への旅」、213頁
- 17 バーナード・ルドフスキー著、渡辺武信訳『建築家なしの建築』鹿島出版会、1975年（原著は、ニューヨーク近代美術館、1964年）
- 18 ハリー・フランシス・マルグレイヴ、デヴィッド・グッドマン共著、澤岡清秀訳『現代建築理論序説 1968年以降の系譜』鹿島出版会、2018年（原著2011年）、88頁
- 19 チャールズ・ジェンクス著、竹山実訳『ポスト・モダン主義の建築言語』（a+u1978年10月臨時増刊）、エー・アンド・ユー、1978年、7頁（原著1977年）
- 20 ハリー・フランシス・マルグレイヴ前掲書、91、92頁
- 21 原広司「都市——まちづくりの新局面」『建築文化』1982年9月、107頁
- 22 原広司『空間〈機能から様相へ〉』1987年、岩波書店、12-13頁
- 23 原広司「〈非ず非ず〉と日本の空間的伝統」1986年（原広司『空間〈機能から様相へ〉』岩波書店、1987年所収、241-280頁）
- 24 前掲書、244頁
- 25 前掲書、274頁
- 26 前掲書、14-15頁
- 27 フィリップ・ジョンソン、マーク・ウィグリー『脱構築主義者の建築』ニューヨーク近代美術館、1988年
- 28 ケネス・フランドン「批判的地域主義に向けて——抵抗の建築に関する6つの考察」1983年（ハル・フォスター編「反美学」勒草書房、1987年所収）
- 29 ハリー・フランシス・マルグレイヴ前掲書、164-165頁
- 30 前掲書、原広司「〈非ず非ず〉と日本の空間的伝統」、『空間〈機能から様相へ〉』1986年、245、246頁
- 31 原広司「空間の文法」、『GAJAPAN』1997年1月号、117頁
- 32 原広司「建築の都市化、〈場〉と〈記号場〉を重ね合わせる〈アトラクター〉——京都駅と宮城県図書館の論理——」、『新建築』1998年5月号、101-106頁、を要約した。
- 33 ハリー・フランシス・マルグレイヴ前掲書、286-287頁
- 34 前掲書、314頁
- 35 HIROSHI HARA『DISCRETE CUTY Vol.1』ギャラリー・間、2004年、25頁
- 36 ハリー・フランシス・マルグレイヴ前掲書、370頁

（2023年5月8日原稿受理）

近現代建築に関わる構造資料の承継とデジタル資料管理について

[論文]

浜田 英明*、藤本 貴子**、竹内 徹***

Succession and Digital Record Management of Structural Design Records in Modern and Contemporary Architecture

HAMADA Hideaki, FUJIMOTO Takako, TAKEUCHI Toru

Structural design records are as important as architectural design records, especially when discussing modern and contemporary architecture in Japan. It is necessary to properly inherit these records so that they will not be lost or scattered. On the other hand, structural design is more digitalized than architectural design, and because these born-digital records come in a variety of formats, they need to be managed properly. Therefore, we have studied specific methods and issues for constructing digital archives of structural design records from technical and legal aspects. This paper presents an overview of the study.

キーワード：近現代建築、構造家、構造資料、デジタル資料、承継

modern and contemporary architecture, structural designers, structural design records, born-digital records, succession

1. はじめに

18世紀後半から19世紀初頭にかけてイギリスを中心に起きた産業革命により、鋼鉄やポルトランドセメントという新しい構造材料が工業化されると、20世紀初頭には鉄骨構造や鉄筋コンクリート構造のラーメンやトラス、アーチ、シェルなどといった多様な形態の建造物が登場し、これまでの建築様式が一変することとなった。その大きな牽引役となったのは、材料の特性を活かしながら、従来の経験主義に捉われずに建造物を科学的、客観的につくり出す専門技術者である構造エンジニアたちであった。彼らは建築家と協働しながら、技術の発展に沿って新しい構法を編み出し、これまでにない新しい建築空間を生み出していき、その職能を確立させていった。

わが国における構造技術分野の専門化は、1923年の関東大震災を契機として、まずは耐震構造分野を中心に進んでいったが、第2次世界大戦後には、さまざまな材料を駆使し多様な構造デザインを実現する欧米型の構造エンジニアも活躍するようになり、独自の進展を遂げてきた。次第に、社会に良質な建築を提供する構造エンジニアは、建築家と対等な立場として、尊称の意味も込めて「構造家」と呼称されるようになる。世界的にもわが国の構造デザインの独自性については、アーキテクチャ教育とエンジニアリング教育が融合された日本の建築教育の特殊性とともにクローズアップされている⁽¹⁾。

このように、構造家に関する資料は、特にわが国の近現代建築を語る上では、建築家に関する資料と同等以上にその重要性は大きいと考えられる。しかしわが国の近現代建築に関わる構造資料は、これまでに概要把握のための網羅的な調査が行われたことがなく、散逸や滅失の危機にさらされているものもあると推定される。日本構造家倶楽部では文化庁国立近現代建築資料館からの依頼を受け、平成29(2017)年度より法政大学浜田研究室と協力しながら、主要な構造家が残した資料の所在概要の把握調査とその資料承継のための論点整理を行ってきた。

平成29(2017)年度～31(2020)年度には功績の顕著であった戦後～1990代に活躍した22名の構造家を抽出して各人に関する本格的な調査および資料の整理を実施し、その調査結果を「わが国の近現代建築に関わる構造資料の概要把握調査」として取りまとめた⁽³⁾。この調査を通じて、構造家本人の逝去後一定期間が経過すると、資料を承継して管理する組織がない場合、その大部分が破棄されてしまい、組織が残されている場合であっても、設計図書として法的保管義務がある文書以外の、個人のスケッチやその思想を示す知的財産の対象となる重要な資料などが保存されるケースは少ないことが判明した。

一方、1990年以降の構造資料においてはデジタル化が、建築家の資料と比較して一段と進んでいる上、そのデジタル資料には、画像データやCADデータにとどま

*法政大学教授、博士(工学) **法政大学教務助手、修士(文学) ***東京工業大学教授、博士(工学)

らず、解析・実験データなど多様な種類で大容量の資料が含まれることが多く、後年のデジタルアーカイブ構築やデジタル資料承継の際に大きな障害となりにかねない。特に知的財産権の運用厳格化やデジタルデータのインターネットを通じた拡散性の増大により、構造家がまだ存命のうちに没後の所有権及び著作権の移管や公開の是非についての意思を記録しておくこと、また、デジタル化を視野に入れた残すべき資料の種類や移管書式の整備等について、当該構造家や法律家を交えてまとめていくことが早急に求められる。構造資料以外でも21世紀以降、設計情報のデジタル化が進んでおり、これらの情報をいかにアーカイブとして構築し、保存していくか、その方策を見いだすことは近現代建築資料館の喫緊の課題でもある。したがって、電子化が先行する構造資料の調査は、今後、近現代建築資料館が建築にかかわる他の電子情報の収集保存方針策定においても貴重な参考資料となると考えられる。

以上の観点から、令和2(2020)年度～4(2022)年度には、平成29(2017)年度～31(2020)年度の調査に引き続くかたちで、複数の存命構造家の資料について調査を進めるとともに、デジタル資料アーカイブ構築のための具体的な手法および課題を技術的側面、法的側面より検討し、ネットワーク化を含む構造資料の電子化継承にかかわる方法論についての具体的検討を行い、「わが国の近現代建築に関わる構造資料およびその電子化継承に関する調査」として取りまとめた⁽⁴⁾。本稿では、その概要について紹介する。

なお、調査を実施したWG委員は次のとおりである。主査：竹内徹、委員：伊藤潤一郎、金田勝徳、金箱温春、佐々木睦朗、多田脩二、原田公明、満田衛資、森部康司(以上、日本構造家倶楽部)、小澤雄樹(芝浦工大)、川口健一(東大)、安藤顕祐(日建設計)、浜田英明、藤本貴子(以上、法政大学)、顧問：難波和彦。

2. 調査および検討の概要

令和2(2020)年度～4(2022)年度の3カ年にわたって行われた調査および検討の概要ならびに得られた知見等について簡単に記す。

2.1. 令和2年度の調査概要

令和2(2020)年度の調査においては、1) 複数の存命もしくは逝去後間もない構造家の資料保存状況(アナログおよびデジタル資料の双方)の概要把握と、2) 組織設計事務所におけるデジタル資料の管理法の調査、の2点に焦点をあてて調査を行った。

いわゆるアトリエ系構造設計事務所と呼ばれる小規模設計事務所では、必ずしも資料のデジタル化や分類、権利関係の整理されていない事例が散見され、権利関係が整理・委譲されないまま構造家個人が逝去したり事務所が解散したりした場合、構造資料の利用自体ができなくなることが危惧された。

調査した組織設計事務所においては、専門の職員により、デジタル化した構造資料をプロジェクト段階より分類整理して共有データとして管理し、担当者以外の者もアクセスできる状態で、設計資産として保存されていた。また、画像や映像データなどはアセットバンクにおいて管理され、版權関係も整理されていた。

以上より、資料管理組織や専門の資料管理者を配置できない、アトリエ系構造設計事務所における資料管理と資料承継に伴う法的整理が喫緊の課題であることが明確化された。

なお、1) で調査された構造家もしくはその構造設計事務所は、次の11名(社)である。斎藤公男氏、SDG 構造設計集団、中田捷夫研究室、オーク構造設計、構造計画プラス・ワン、佐々木睦朗構造計画研究所、TIS & Partners、金箱構造設計事務所、KAP、多田脩二構造設計事務所、満田衛資構造計画研究所。また、2) において調査した組織設計事務所はARUPと日建設計の2社である。

2.2. 令和3年度の調査概要

令和3(2021)年度の調査においては、前年度調査結果をもとに、1) アトリエ系構造設計事務所において日常業務と並行しつつ後年のアーカイブ化が容易に行える体系的かつ簡易的なデジタルデータ管理手法の検討、と、2) 構造資料における著作権法の実態把握および資料承継に伴う法的問題点の整理、の2点に焦点をあて、それぞれについて専門家(計3名)を交え検討を行った。

1) のデジタルデータ管理手法に関して、齋藤柳子氏(記録の森研究所)からは、レコードマネジメントの観点から、具体的方策として、フォルダ名やファイル名の標準化(日付/固有名詞/内容・形態)、業務フローに基づくシリーズ別フォルダにデータを格納することの重要性について啓蒙を受けた。千葉太郎氏(株式会社日建設計)からは、設計部門統括室が保管対象とする書類の内容、社内システムの概要、設計図書の収集・保存・公開の流れ、保管している設計図書のフォルダ構成について解説いただいた。

2) の構造資料の著作権の考え方、資料承継に関わる法的問題点に関しては、弁護士の桑野雄一郎氏(高樹町

法律事務所) から、承継資料のその後の利用方法とそれに該当する著作権ならびに資料承継に関する契約について解説いただいた。承継資料を扱う際には、著作物に該当するという前提で取り組むべきこと、著作権には独立した複数の権利が含まれるため、資料の利用方法を具体的に想定して該当する権利を考える必要があることなどが注意点として挙げられた。

2.3. 令和4年度の調査概要

令和4(2022)年度の調査においては、前2ヵ年度の調査検討結果を踏まえ、1) 存命もしくは逝去後間もない構造家の資料保存状況(デジタルデータの保管状況含む)の概要調査、と、2) デジタル資料管理マニュアルの策定とその実践、3) 構造資料承継のための具体的な契約法および資料承継方針の伝達法、の策定に取り組んだ。

1) で調査した構造家は、川口衛氏、渡辺邦夫氏、新谷真人氏、斎藤公男氏、佐々木睦朗氏の5名で、川口氏、渡辺氏、新谷氏の3名はいずれも調査時点において逝去後3年以内、斎藤氏、佐々木氏は存命の構造家である。構造家本人が逝去した場合はもちろんのこと、存命の場合でも長年にわたり蓄積されたプロジェクト資料を後年整理するのは容易ではなく、普段からデジタル資料を体系的に分類し、プロジェクト終了後はそのままアーカイブ化できるようなシステム構築の必要性が痛感させられた。

そのため、2) として比較的良好にデジタル資料が管理されている佐々木氏の資料を用いて、その内容を整理しつつ専門職員を配置できないアトリエ系構造設計事務所においても実践可能なデジタル資料管理マニュアルを策定し、実際にその運用を試みた。その詳細については本稿第3節において述べる。

3) に関しては、先述の弁護士・桑野氏の監修のもと、構造資料に関する「譲渡契約書(案)」、資料譲渡後の資料の利用法について、構造家が意思表示できる「継承方針シート」、それらの具体的な運用方法について提案した。その詳細については本稿第4節において述べる。

3. 構造家のデジタル資料管理マニュアルの提案

3.1. 目的

デジタル資料は、その保管のために物理的な空間を必要としないため、アナログ資料と比較して適度な選別整理作業が行われることが必然的に少なく、雑多なデジタルデータが保存されやすい。特に近年では、数TB(テラバイト)以上の非常に大きな記憶容量を持つ記憶装置が一般的となり、その傾向はいっそう強まって

いる。このようなデータが蓄積されていけば、後年のデジタルアーカイブ構築やデジタル資料承継の際に大きな障害となりかねない。また、構造家のデジタル資料においては、その種類が画像データやCADデータに止まらず、解析・実験データなど、一般的な建築家のデジタル資料にはない多様な種類の資料が含まれることも多い。これらのデジタル資料を、日常の業務に影響を与えることなく(反対に効率化をも図りながら)、後年のアーカイブ構築に資するべく管理していくためには、ある統一的で一貫した形のデジタル資料管理を行うことが必要であると考えられる。

ここでは、上記の観点から、構造家のデジタル資料管理マニュアルを策定する。後年のアーカイブ構築に資するためには、1) 保存すべき資料の明確な選別基準の整備と長期保存方法の確立、2) データとメタデータを一体化させた管理、の2点が重要となる。また、構造家のデジタル資料を承継する際には、3) 知的財産としての著作権帰属の明確化も重要になってくる。以下、上記3点について詳述していくとともに、具体的な作業手順について示す。

3.2. 保存すべき資料の選別基準と長期保存方法

保存すべきデジタル資料としては、建築士法上15年間の保存が義務付けられている設計図書等(構造物、構造計算書、工事監理報告書等)はもちろんのこと、構想・エスキス段階のスケッチや、基本設計図書や設計上重要な分岐点となった検討案に関する資料、論文書籍等の草稿などが考えられる。選別基準は、アナログ資料と基本的には同じ、もしくは、より拡大したものでよいと思われる。

デジタルデータの長期保存については、記憶メディアとドライブ装置、ソフトウェアそれぞれに対して留意していく必要があり、保存期間が30年を超えてくると、その方法を確立・運用していくにはかなりハードルが高い部分もある。しかしながらデータが消失しないようなバックアップ体制を構築しておくことは比較的容易であるので、長期保存に対する最低限の基本的な対策として、バックアップシステムを構築しておくことは重要である。

3.3. データとメタデータの一体化管理

データとメタデータを一体化して管理するためには、フォルダ構成とファイル命名規則について統一的な方針を採用することが最も簡易的であろう。その推奨案を図1に示す。

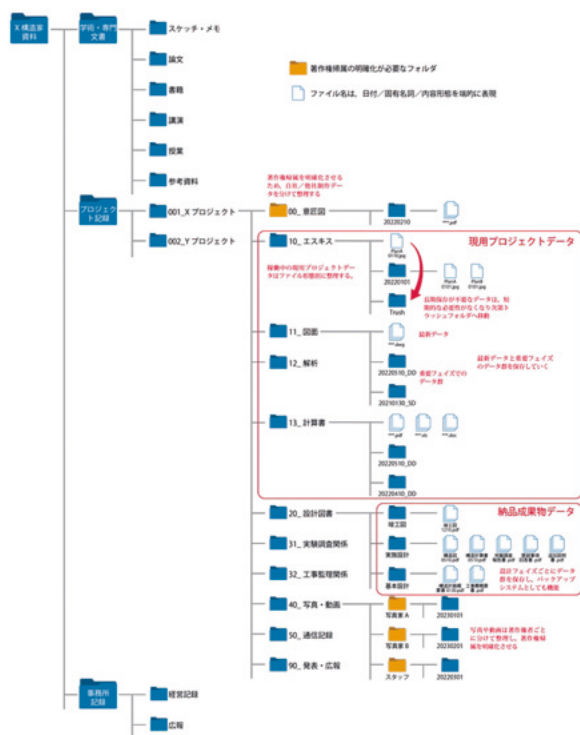


図1 構造家デジタル資料のフォルダ構成案

ファイル名については、日付／固有名詞／内容形態の3要素を端的に表現するように命名しておくことが推奨される。

フォルダ構成については、稼働中の現用プロジェクトデータは、ファイルの形態別にフォルダを分けて整理し、あまり階層を深くしないことが日常業務の効率化のためにはよいであろう。最新のデータと、後日変遷を追うのに必要な程度長期的な保存に価値があると考えられる各フェイズでのデータ群は、浅い階層に保管しておき、トラッシュフォルダには、日々更新されていくデータのうち、長期的に保存する必要性のないものを短期的な必要性がなくなった段階で移動させるようにしておけば、のちの選別作業がしやすくなる。設計図書フォルダは、現用データではなく、記録として保存されるデータの側面が強いもので、設計フェイズごとに提出されたデータ群をひとまとまりとして整理保存していくほうがよい。業務が一区切りついた段階で、形態によらず一つのフォルダとして保存していくようにしておけば、デジタル資料として時系列整理もしやすく、またデータのバックアップシステムとしても機能させることができる。

3.4. 著作権帰属の明確化

著作権帰属の明確化のためには、まずは、制作者ご

と、著作権者ごとに、データをフォルダ分けしていくことが肝要である。写真や動画データは、著作者と著作権者が異なる場合も考えられるが、撮影者ごとにフォルダ整理していき、できれば撮影資金提供者も明記していくとよい。

また、設計業務を法人化した事務所で行っている場合、その著作物は法人著作となり、著作者と著作権者が異なる場合も考えられ、同一事務所で作成されたものでも、法人代表者としての構造家の個人著作と法人著作が混在する可能性もありうる。一括して法人著作とするか、もしくは個人著作と法人著作を明確に区別して整理していく必要があるだろう。

3.5. 具体的なデジタル資料管理手順

図1に示すフォルダ構成推奨案に沿って、具体的な管理手順について詳述していく。

3.5.1. 学術・専門文書

このフォルダ内には、個別のプロジェクトとは直結しないが、構造家の設計活動の基礎となるものと考えられる、スケッチやメモ、論文・書籍、講演・授業資料などのデジタル資料を格納する。

- 1) スケッチ・メモ：設計創作活動の基盤となるスケッチやメモ（手書き資料のスキャナデータも含む）。
- 2) 論文：構造家が関与する論文および周辺資料。
- 3) 書籍：構造家が関与する書籍の原稿や図版、校正刷りおよび周辺資料。
- 4) 講演：構造家が関与する講演の原稿やスライドおよび周辺資料。
- 5) 授業：構造家が関与する授業の原稿やスライド、教科書、ノート、演習課題および周辺資料。
- 6) 参考資料：構造家の設計活動等のために参考資料として収集した各種資料。

3.5.2. プロジェクト記録

このフォルダ内には、個別のプロジェクトごとにフォルダを作成し、関連デジタル資料を格納する。フォルダ名としては、「001_Xプロジェクト」等のように、プロジェクト通し番号とプロジェクト名称を組み合わせたものが推奨される。このフォルダ階層の下、以下の資料群を格納することとし、プロジェクト記録フォルダを通して統一的なフォルダ構成としておくのが望ましい。その際、フォルダ名称にも検索のしやすさに配慮して、プロジェクトフォルダごとに先頭に通し番号を付与するとよい。以下にその構成例および命名例を示す。

- 1) 00_ 意匠図：意匠図を受け取った日付ごとにフォルダを構成して格納する。意匠図のように他者に著作権が帰属する設計図書については、その著作権帰属先ごとにフォルダを作成し管理するべきである。
- 2) 10_ エスキス：プロジェクトのアイデアやコンセプトを表現したスケッチやメモ、スタディ過程の簡易計算書等を格納する。
- 3) 11_ 図面：各種構造図（PDF データ、CAD データ等）および関連資料を格納する。最新データ以外は重要フェイズごとにフォルダ作成し保存しておくのが望ましい。
- 4) 12_ 解析：各種構造解析データ（解析モデルデータ、結果出力データ等）および関連資料を格納する。最新データ以外は重要フェイズごとにフォルダ作成し保存しておくのが望ましい。
- 5) 13_ 計算書：構造計算書および関連データを格納する。最新データ以外は重要フェイズごとにフォルダ作成し保存しておくのが望ましい。
- 6) 20_ 設計図書：基本設計図書や実施設計図書、竣工図等の納品成果物や法定保存義務のある設計図書を格納する。
- 7) 31_ 実験調査関係：地盤調査報告書や耐震診断結果報告書、安全性確保のための特別な調査または研究、技術資料、モックアップ等の関連資料を格納する。
- 8) 32_ 工事監理関係：設計意図伝達仕様書（質疑回答書、現場説明書等）、工事監理記録および関連資料を格納する。
- 9) 40_ 写真・動画：著作権帰属の明確化が必要なため、著作権帰属先ごとにフォルダ作成し、その下で設計フェイズや日付、内容、資料形態ごとに保存する。
- 10) 50_ 通信記録：各所との通信記録を格納する。
- 11) 90_ 発表・広報：書籍や雑誌、論文、web 媒体、展覧会等で発表・広報した資料を格納する。

上の例では、フォルダ名称の先頭に2桁の数字を付与することによって、適宜プロジェクトごとの特徴に応じて、個別のフォルダ構成がしやすいように配慮している。例えば、00 番台として、00 を意匠図に、01 を他の協力事務所が作成した構造図、02 を設備図、03 を外構図などのように順次追加していけばよい。

また、10 番台のフォルダ群は現用プロジェクトデータ（プロジェクト稼働に作成中、作業用の資料）群をまとめて

あり、ファイル形態別にフォルダ管理するとよい。各フォルダ内では、最新データ以外のものは、作成した日付ごとや重要フェイズごとにフォルダを構成し格納する。長期保存が不要なデータは、短期的な必要性がなくなり次第、トラッシュフォルダへ移動させておくことで、後々の記憶容量確保の際には便利である。

3.5.3. 事務所記録

このフォルダ内には、構造家個人の設計活動の記録やプロジェクト記録には分類されない、事務所としての活動記録、例えば、経営記録や事務所の広報資料など、構造家の設計活動の実際を知る上では重要な資料となりうる間接な関連資料を格納しておくことを想定している。

4. 構造家資料の承継方法の提案

4.1. 目的

これまでの調査から、構造家本人の逝去後一定期間が過ぎると、構造家の著作者人格権の尊重は当然として、資料を引き続き管理できる組織がない場合、貴重な資料の大部分が破棄されてしまうことが多く、管理組織があったとしても設計図書として法的に保管義務がある文書以外の、知的財産の対象となる個人の思想感情を表現するスケッチやメモなどが残されるケースは少ないことがわかっている。また、資料承継がなされたとしても、その資料を公開（展示、web 掲載等）する場合、承継者の同意を得ることが困難であり、貴重な資料が保存されていても適切に利用することができない事例も考えられる。

そこで、上記の課題を解決すべく、構造資料承継のための具体的な契約方法および資料承継方針の伝達法の策定に取り組んだ。弁護士・桑野雄一郎氏の監修のもと、構造資料に関する「譲渡契約書（案）」ならびに譲渡後の資料の取り扱い方法について構造家自らが意思表示できる「継承方針シート」と、それらの具体的な運用方法を策定するに至ったので、ここでその詳細について述べる。

4.2. 構造資料の承継のための譲渡契約書案

図2に弁護士・桑野雄一郎氏の監修のもと策定した構造資料の承継のための譲渡契約書案を示す。ここで、「贈与」ではなく「譲渡」となっているのは、有償の場合があることも考慮している。

譲渡目的として、「構造資料の承継のため」という点が強調された形になっている。これは財産的価値があ

る遺産を無償あるいは低価で奪ったという形で揉め事になることを防ぐためである。甲（構造家本人または遺族）が構造資料の承継を願っているため、無償あるいは低価で譲渡したのであるから、乙（承継者）は次節で示す継承方針を守る旨が第1条3項で記されている。

著作権譲渡を受けた場合は文化庁への登録が可能で、不動産譲渡の場合の登記と同様の効果がある。この著作権譲渡の登録手続きは原則譲渡の当事者である甲（甲が死亡したらその遺族）と乙が共同で手続きを行う必要がある。この件に関して、第1条6項において「乙が当該登録手続きを単独で行うことを承諾します」と、共同登録手続きの原則の例外が適用可能な内容となっている。これは、次のような事態を未然に防ぐことを可能とするための文言である。例えば甲が乙に著作権譲渡をしたが、その後甲の遺族が同じ著作権を丙に譲渡した場合、法律上はどちらも有効で優先権はどちらが先に登録手続きするかで決まる状態となる。丙に著作権譲渡する遺族の場合、丙の登録手続きに協力する可能性が高く、登録が認められれば、甲→乙の譲渡は効力を失ってしまうことになる。このような事態を未然に防ぐ処置を講じられるように、第1条6項が加えられている。

る。また、甲の不安を招かないよう括弧書きで登録後は通知する旨を併せて記載している。

4.3. 譲渡資料の取り扱いを定める継承方針シート

譲渡された構造資料の、その後の取り扱い方法について構造家自らが意思表示でき、承継者がその意思を尊重して適切に取り扱うことができるようにするため、図3に示す継承方針シートを策定した。

この継承方針シートでは、著作財産権のうち、構造資料に関係する「複製権」「展示権」「譲渡権」「公衆送信権」の4つについて、その許可範囲を1) 制限なく認める、もしくはそれぞれについて、2) 非営利目的の場合のみ認める、3) 教育利用の場合のみ認める、の3つの条件を選択できるように整理している。さらに自由記述条件欄も設け、より詳細に意思伝達することも可能なようにしてある¹⁾。これにより、構造家は資料譲渡の際

近現代構造資料繼承方針

※「継承方針」の「条件」は譲渡の際の条件となる
目付；

番号	資料類別																
1	所有権現状	☐ 個人 ☐ 事務所 ☐ 第三者 () ☐ その他 ()															
	著作権現状	☐ 個人 ☐ 事務所 ☐ 第三者 () ☐ その他 ()															
3	所有権譲渡先																
4	著作権譲渡先																
5	継承方針	<table border="1"> <thead> <tr> <th>☐制限なし</th><th>条件（選択） ↓</th><th>条件（自由記述） ↓</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>-複製</td><td>☐非営利のみ ☐教育利用のみ</td><td></td></tr> <tr> <td>-展示</td><td>☐非営利のみ ☐教育利用のみ</td><td></td></tr> <tr> <td>-譲渡 (複製したものを頒布)</td><td>☐非営利のみ ☐教育利用のみ</td><td></td></tr> <tr> <td>-公衆送信 (web掲載など)</td><td>☐非営利のみ ☐教育利用のみ</td><td></td></tr> </tbody> </table>	☐ 制限なし	条件（選択） ↓	条件（自由記述） ↓	-複製	☐ 非営利のみ ☐ 教育利用のみ		-展示	☐ 非営利のみ ☐ 教育利用のみ		-譲渡 (複製したものを頒布)	☐ 非営利のみ ☐ 教育利用のみ		-公衆送信 (web掲載など)	☐ 非営利のみ ☐ 教育利用のみ	
☐ 制限なし	条件（選択） ↓	条件（自由記述） ↓															
-複製	☐ 非営利のみ ☐ 教育利用のみ																
-展示	☐ 非営利のみ ☐ 教育利用のみ																
-譲渡 (複製したものを頒布)	☐ 非営利のみ ☐ 教育利用のみ																
-公衆送信 (web掲載など)	☐ 非営利のみ ☐ 教育利用のみ																

※著作権者人格権の尊重を前提とする。

図3 構造資料の継承方針シート

構造資料の譲渡について（案）

〇〇〇（以下「甲」という。）及び〇〇〇（以下「乙」という。）は、甲の構造資料の譲渡について、次のとおり本契約を締結します。

第1条 甲は、甲の構造資料の承継のため、別紙記載の資料（以下「本件資料」という。）の所有権及び著作権（著作権法第27条及び第28条の権利を含む。以下同じ。）を乙に譲渡します。

2 前項の譲渡の対価は無償〔有償の場合 x x x x 円〕とします。

3 乙は、第1項の譲渡が甲の構造資料の承継のためであることを認識し、甲の希望する別紙記載の承継方針を尊重して本件資料を取扱います。

4 本契約は、本契約締結日において本件資料に対して第三者が保有している所有権及び著作権に影響を及ぼすものではありません。

5 甲及び乙は、本件資料の所有権及び著作権について、第三者から権利主張があった場合には、協力して解決にあたるものとします。

6 甲は、第1項に基づく本件資料に関する著作権の譲渡について、乙がその事実を文化庁に登録をすることを希望する場合、乙が当該登録手続を単独で行うことを承諾します（乙が登録をした場合にはそのことを甲に通知します。）。

第2条 甲は、乙に対し、本件資料を現状有姿の状態で引き渡すものとします。

第3条 この契約について、当事者間に紛争を生じたときは、双方協議し、これを解決するものとする。

上記契約の証として、本書面を2通作成し、甲及び乙記名押印の上、各1通を保有するものとします。

令和 年 月 日

（甲）住所
氏名〇〇〇

印

（乙）住所
氏名〇〇〇

印

図2 構造資料の承継の譲渡契約書案

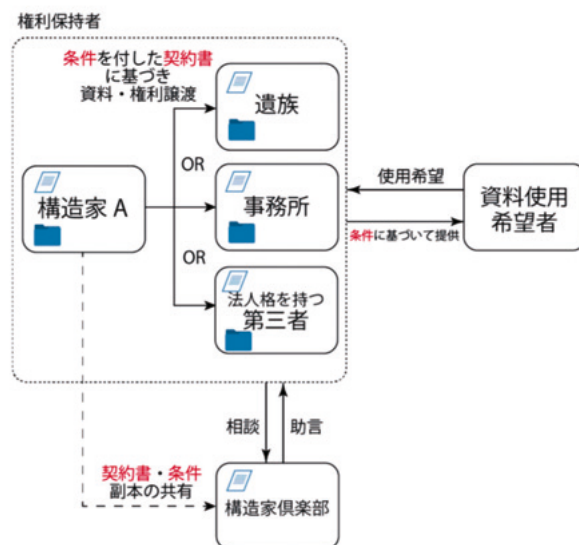


図4 構造資料の使用申請と提供までの流れのイメージ

に自らの意思を容易にかつ詳細に伝達可能であり、承継者も他者の求めに応じて、構造家の意思を反映した資料の取り扱いができるようになる。承継者がその判断に迷う場合においても、あらかじめ日本構造家倶楽部など信頼できる団体に契約書および継承方針シートの副本を送付し条件を共有しておけば、必要に応じて助言を行うことができ、より適切な取り扱いが可能となる。図4にはその際の具体的な対応の流れのイメージを示している。

5. まとめ

本稿では、令和2(2020)年度～4(2022)年度において実施され取りまとめられた「わが国の近現代建築に関わる構造資料およびその電子化継承に関する調査」⁽⁴⁾について、その概要を紹介した。調査によって得られた課題と、提案した具体的な対策案について、以下にまとめる。

3カ年にわたって行われた調査によって得られた課題は以下のようにまとめられる。

- 1) 構造家本人が逝去したのちはもちろんのこと、存命中でも永年にわたり蓄積された各プロジェクトのデジタルデータを体系的に整理するのは容易ではなく、普段からデジタルデータを体系的に管理し、アーカイブ化しやすいシステム構築が求められる。
- 2) 構造家本人の逝去後一定期間が過ぎると、資料を引き続き管理できる組織がない場合、貴重な資料の大部分が破棄されてしまうことが多く、管理組織があったとしても設計図書として法的に保管義務がある文書以外の、知的財産の対象となるような個人の思想感情を表現するスケッチやメモなどが残されるケースは少ない。
- 3) 資料承継がなされたとしても、その資料を公開(展示、web掲載等)する場合、承継者の同意を得ることが困難であり、貴重な資料が保存されていたとしても適切に利用することができない事例が発生しやすい。

これらの課題に対して提案した具体的な対策案は以下のようにまとめられる。

- 1) デジタルアーカイブの専門職員を配置できないアトリエ系構造事務所においても実践可能なデジタル資料管理マニュアルを策定した。
- 2) 構造資料に関する「譲渡契約書(案)」、資料譲渡後の資料の利用法について構造家が意思表示でき

る「継承方針シート」、それらの具体的な運用方法について提案した。

注

- 1 著作者人格権については、その尊重は前提条件であるため、欄外に記載するに留めている。

参考文献

- (1) Guy Nordenson et al., Structured Lineages: Learning from Japanese Structural Design, The Museum of Modern Art, 2019.7
- (2) 竹内徹、浜田英明：日本の近代建築を支えた構造家たち、国立近現代建築資料館紀要第1号、pp.17-27、2021
- (3) 文化庁国立近現代建築資料館：我が国の近現代建築に関わる構造資料の概要把握調査、平成29年度、平成30年度、平成31年度報告書、2017～2020
- (4) 文化庁国立近現代建築資料館：我が国の近現代建築に関わる構造資料およびその電子化継承に関する調査、令和2年度、令和3年度、令和4年度、2020～2023
- (5) NATSPEC TECHnotes GEN 030, https://www.natspec.com/images/PDF/NTN_GEN030_Digital_archiving_Introduction.pdf (Access: May 30th, 2022)
- (6) NATSPEC TECHnotes GEN 032, https://www.natspec.com/images/PDF/NTN_GEN032_Digital_archiving_Introduction.pdf (Access: May 30th, 2022)
- (7) 壺阪龍哉ほか：文書と記録：日本のレコード・マネジメントとアーカイブズへの道、樹村房、2018
- (8) 桑野雄一郎：出版・マンガビジネスの著作権(エンタテインメントと著作権——初歩から実践まで4)、著作権情報センター、2009

(2023年7月25日原稿受理)

樋口清旧蔵吉田鉄郎蔵書 LE CORBUSIER-SAUGNIER, *Vers une architecture* (初版) について

[論文]

加藤 道夫*、寺内 朋子**、青山 (高瀬) 道乃***

On LE CORBUSIER-SAUGNIER, *Vers une architecture* (1^{ère} édition), originally
owned by YOSHIDA Tetsuro

KATO Michio, TERAUCHI Tomoko, AOYAMA TAKASE Michino

This document: LE CORBUSIER-SAUGNIER, *Vers une architecture* (1^{ère} édition), was given to HIGUCHI Kiyoshi by YOSHIDA Tetsuro. It is valuable from the following points. 1) The 1st edition has several differences from both the original texts in *L'esprit nouveau* and the book; *Vers une architecture* currently in circulation. It bridges these differences. 2) This copy is rare for its publication period is limited. 3) This copy had been originally owned by YOSHIDA Tetsuro.

キーワード：樋口清、吉田鉄郎、ル・コルビュジエ、『建築へ』、『新精神』誌

HIGUCHI Kiyoshi, YOSHIDA Tetsuro, Le Corbusier, *Toward a New Architecture*, *L'esprit nouveau*

1. はじめに

本稿は、令和4(2022)年に贈与契約を締結した「樋口清旧蔵吉田鉄郎蔵書 LE CORBUSIER-SAUGNIER, *Vers une architecture* (初版) (以下「樋口清旧蔵 *Vers une architecture* (初版)」)、ただし書籍としての記述においては「*Vers une architecture* (初版)」)について、同資料の外形的特性と来歴に加えてその内容¹を紹介し、その資料的価値を詳らかにすることを目的とする。

2. 樋口清旧蔵 *Vers une architecture* (初版)の外形的特性

同資料は、樋口清(1918–2018)が吉田鉄郎(1894–1956)から譲られた書籍である。同資料の外形的特性(体裁)は以下のものである。皮表紙、サイズは243mm × 169mm × 23mm(後年の皮製本により、出版当時より少し大きくなっている)。

次にその構成順は以下のものである。1) 表題と献辞のみが印刷された見返し。2) 著者、表題、出版社が印刷された中表紙。3) ローマ数字によるページ番号が付された(VII–XIに相当、VIII、IX、X、XIのみにページ付あり)論旨概要[ARGUMENT](以下、「論旨概要」)。4) アラビア数字のページ番号が付された本文230ページ。5) 直後の印刷所を記したページ(裏白)。

そして中表紙には、著者名：ル・コルビュジエーソーニエ[Le Corbusier-Saugnier]、表題：Vers une architecture、出版社：クレ社[Les Éditions G. Crès et C^{ie}]が記載されて

いる(図1)。そして、書名が印刷された見返し上部には「アメデ・オザンファンへ[A Amédée Ozenfant]」(以下「オザンファンへの献辞」)が刻印されている(図2)。

ただし出版当時にはあったはずの表紙が損失しており、その状態で皮表紙により再製本されている。また、同資料には平成17年4月2日付けの製本業者から樋口に於てた再製本に関する手紙が挟まれている。この手紙から判断して、再製本は樋口の依頼によってなされたと考えられる。

その他、本資料のページの余白部分には鉛筆による仏語辞典からの写しとみられる書き込みが複数見られる。これについて遺族に尋ね、「樋口の筆跡である」という証言を得た。邦訳に際して辞書に当たった結果を書き留めたものと考えられる。

3. 樋口清旧蔵 *Vers une architecture* (初版)の来歴

次に同資料の来歴について記す²。同資料が吉田から樋口へ渡った時期については二種の記述が存在する。まず、樋口が邦訳した『建築へ』(中央公論美術出版、2003)の「あと書き」には、「戦後、1940年代の末、私が鹿島建設の建築設計部に入ったとき、そこに吉田さんは顧問としておいでになり、私たちがベレやエスベリなど建築の話を伺っていたとき、この本を下さったのである」³との記載がある。しかし、樋口清旧蔵 *Vers une architecture* (初版)の冒頭のページ上部に「病床にあ

*国立近現代建築資料館 元主任建築資料調査官、工学博士 **国立近現代建築資料館 元研究補佐員、修士(工学)

***国立近現代建築資料館 研究補佐員、早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻 博士後期課程

る吉田鉄郎先生よりいただく」との樋口による書き込みがある(図3)。これが事実であるとする、邦訳の「あと書き」にある吉田による建築の話は、同資料を用いたものであるものの、叢書が実際に樋口の手に渡ったのは、吉田が病床にいる時期に下ることになる。

残念ながら、吉田がどのような経緯でこの樋口清旧蔵 *Vers une architecture* (初版) を入手したかは不明である。吉田が欧米へ出張(フランス、ドイツ、スウェーデン、カナダ、アメリカを来訪)したのは昭和6(1931)年から7(1932)年である。後述するように、この時点で *Vers une architecture* はすでに第3版が刊行されており、通常の書店で初版本を購入することはかなわなかったはずである。したがって、吉田が樋口清旧蔵 *Vers une architecture* (初版) を手に入れたのは別の機会だったと推察される。

次に同資料の旧蔵者である樋口について簡単に略歴を紹介しておこう。同氏は、1941年に東京工業大学建築学科を卒業、1943年に東京帝国大学文学部フランス文学科を卒業、第2次世界大戦後には鹿島建設設計部で勤務、工学院大学建築学科を経て、1962年に東京大学教養学部国文学教室に助教授として赴任した。その後、教授に昇進し、1979年に東京大学を退官。退官後は東京理科大学で教鞭をとった。彼は生涯にわたって、フランク・ロイド・ライトなどの多くの書籍を翻訳する傍ら、北欧など海外の建築の紹介に努めた。ル・コルビュジエの邦訳についていえば、生田勉との共訳である『伽藍が白かったとき』(岩波書店, 1957)を始めとして、『ユルバニスム』(鹿島出版会, 1967)、『建築へ』(中央公論美術出版, 2003)がある。同翻訳の底本となったのが樋口清旧蔵 *Vers une architecture* (初版) である。

4. *Vers une architecture* (初版) の意義

Vers une architecture (初版) の意義は何といってもその希少性にある。出版は1923年秋、おそらく1925年までに改定第2版が刊行されたため⁴、同書が流通していた時期に限られるからである。しかし、その資料的価値は希少な初版本であることに留まらない。伊從勉(1987)は次のように記している。「多くの論者は、初版を知らずに、あるいは初版を確認せずに、第二版の姿と内容を初版『建築書』と同一と見做している。そうではない。ル・コルビュジエ著の『建築』書は、第二版で初めて誕生したのである」(p. 204)⁵。

そこで本章では、同書初版に内在する意義を以下の5つの観点から明らかにする。1) *Vers une architecture* (初版) における構成の変化、2) *Vers une architecture* (初版) の著者名、3) *Vers une architecture* (初版) の改訂、4)

Vers une architecture (初版) の出版の経緯、5) *Vers une architecture* (初版) の邦訳。

4.1. *Vers une architecture* (初版) における構成の変化

Vers une architecture (初版) は『L'esprit nouveau [新精神]』(以下『新精神』誌)の第1号(1920年10月)から第16号(1922年3月)に掲載されたル・コルビュジエ・ソーニエによる論考13編がベースになっている。*Vers une architecture* (初版) における『新精神』誌の論考群からの変化は、以下の3つに整理できる。1) 掲載順序の変更、2) 「建築か、革命か」の追加、3) 論旨概要の追加。

4.1.1. 掲載順序の変更

『新精神』誌に掲載された論考群と *Vers une architecture* (初版) を比較するとその掲載順が変わっている。まず、『新精神』誌では8番目の論考である「工学技師の美学、建築」が、*Vers une architecture* (初版) では冒頭に据えられている。工学技師による建物を建築として捉え直して、そこに内在する美学を顕在化するという、ル・コルビュジエの意図を前景化しているという点で重要な変更といえる。補足するなら、他の論考は9番目の論考である「量産住宅」を除いて『新精神』誌における掲載順に並んでいる。そして「量産住宅」が、書籍化にあたって末尾に追加された最終章「建築か、革命か」の直前に移された。

4.1.2. 「建築か、革命か」の追加

「量産住宅」の移動は、「建築か、革命か」の追加と連動している。『新精神』誌における「量産住宅」の末尾の文は「建築か、革命か」という選択肢の提示で終わっており、その解答が保留されたままになっていた。末尾に追加された「建築か、革命か」の章は、その解答に当たる。そして、規格化の推進に基づいて建築することで「(建築によって)革命は避けることができる」と結ばれる。

「量産住宅」と「建築か、革命か」という二つの章が、本書の末尾に配置されることは、それらが合わさって本書の結論となるだけにとどまらない。それらは、新時代の兆候を要約する「工学技師の美学、建築」の冒頭への移動と呼応関係にあり、それらだけで兆候——選択肢の提示——解答という完結した文脈を構成する。その結果、この文脈で他の論考を読み直すことが可能になった。

つまり、*Vers une architecture* (初版) は、「工学技師の美学、建築」を出発点とし、「建築か、革命か」という選択肢の提示を経て、「(建築によって)革命は避けることが

できる」という解答に至るという文脈の下に再編することで、『新精神』誌に掲載された論考群に体系的な再解釈を促すという意義を持っている。

4.1.3. 論旨概要の追加

Vers une architecture (初版) では各章の内容をまとめた論旨概要が冒頭に追加され、それらが各章の冒頭にも反復された。そこでは「住宅は住むための機械」が「見えない目 I 商船」の項ではなく、「見えない目 II 飛行機」の項に記載されている。対して、本文では「見えない目 I 商船」の章に記載され、「見えない目 II 飛行機」には記載されていない。

しかも「住む」に相当するフランス語が異なっている。論旨概要における「住む」は「habiter」と記されている。対して、本文では『新精神』誌から *Vers une architecture* (初版) に至るまで、「住む」に相当するフランス語は「demeurer」が用いられている。

続いて *Vers une architecture* の第2版以降を見る。ここでは「住宅は住むための機械」という記載が、「見えない目 I 商船」本文と論旨概要の「見えない目 II 飛行機」の項に記されており、「住む」に相当するフランス語は一貫して「habiter」が用いられている。

以上の変化を整理すると以下ようになる。1) 『新精神』誌では「住宅は住むための機械」における「住む」に相当するフランス語は「demeurer」が使用されていた。2) 「住む」に相当するフランス語「habiter」が使用されるのは、*Vers une architecture* (初版) の刊行の際に付け加えられた論旨概要が最初である。3) 論旨概要における「habiter」を用いた「住むための機械」という記載は「見えない目 II 飛行機」の項に限られる。4) *Vers une architecture* (初版) まで、本文では「住む」に相当するフランス語は「demeurer」が使用され、「habiter」は使用されない。

要約するなら、「住むための機械」[une machine à demeurer] から「住むための機械」[une machine à habiter] への変化は、「見えない目 I 商船」内で完結しない。*Vers une architecture* (初版) に挿入された論旨概要の「見えない目 II 飛行機」の項を経由した変化である。そして、*Vers une architecture* (第2版) 以降では、本文においても論旨概要においても「住むための機械」に一貫して「habiter」が使用されるにいたった。

以上の事実は、ル・コルビュジエの「住むための機械」に関するこれまでの理解の変容を促す。その変容を要約すると以下ようになる。

1) *Vers une architecture* (初版) における「住むための

機械」[une machine à habiter] の唐突な挿入は、ル・コルビュジエが(「商船」ではなく)「飛行機」に嗅ぎ取った過渡的な潜在的兆候の「しるし」の反映である。

2) その後、第2版刊行までに「しるし」が現勢化され、商船においても「住むための機械」[une machine à demeurer] から「住むための機械」[une machine à habiter] への転移を促した。

4.2. *Vers une architecture* の著者名

同書初版の著者名は『新精神』誌に掲載された論考群と同じく「ル・コルビュジエーソーニエ」[Le Corbusier-Saugnier] である。「ル・コルビュジエ」[Le Corbusier] はシャルル＝エドゥアール・ジャンヌレ [Charles-Édouard Jeanneret]、ソーニエ [Saugnier] はアメデ・オザンファン [Amédée Ozenfant] のペンネームである(以下、著者名は日本語のみで表記)。オザンファンの提案でそれぞれのペンネームが考案され、同誌に建築評論を書く際にはそれらを合わせた「ル・コルビュジエーソーニエ」が用いられた。補足するなら、「造形芸術について」(1号, 1920年10月)に始まる美術に関する論考群は、後に近代絵画 [La peinture moderne] (1925) として書籍化される論考群も含めて、一貫して「オザンファン」と「ジャンヌレ」の連名で発表された。絵画作品には1928年頃まで「ジャンヌレ」と署名している。さらに付け加えるなら、後にユルバニスム [Urbanisme]、今日の装飾芸術 [L'art décoratif d'aujourd'hui] と題して書籍化されることになる論考群は、前者の冒頭に配された「ロバの道、人間の道」(同誌17号, 1922年6月)が「ル・コルビュジエーソーニエ」であることを除いて、一貫して「ル・コルビュジエ」単著で発表されている。要約するなら、ル・コルビュジエことジャンヌレは、建築家と建築評論家としてはペンネームの「ル・コルビュジエ」を用い、画家と美術評論家としては本名の「ジャンヌレ」を使い分けていた。

しかし、*Vers une architecture* (初版) 刊行に際して同書の帰属性にかかわる重要な変化が生じた。アメデ・オザンファンへの献辞が挿入されたのである。その結果、「ル・コルビュジエーソーニエ」がオザンファンから切り離され、オザンファンとは独立した人格であると誤解されるように仕組まれた可能性がある(伊従, 1997, p. 202)。すなわち、同書(初版)は、ル・コルビュジエーソーニエ著の『新精神』誌における論考群からル・コルビュジエ単著である *Vers une architecture* (第2版) へ至る過渡的状态を示す重要なエヴィデンスである。

4.3. *Vers une architecture* (初版) 出版の経緯

Vers une architecture (初版) 出版の経緯については、伊従 (1997) に詳しく記されている。

そこで伊従は同書について、1) 1923年秋の出版であること、2) 著者は「ル・コルビュジエーソニエ (ママ)」であったことに加えて、3) 「レスプリ・ヌヴォー (ママ)」叢書の著作1号と考えられているが、出版当時、叢書はまだ成立していないことを指摘している。その上で、4) 「同書がジャンヌレの (以降の) 著作のモデルとなり、パリでの執筆活動の出発点になった」と指摘している。

出版時期に関連して補足するなら、同書の新刊広告 [VIENT DE PARAÎTRE] が『新精神』誌の第18号 (1923年11月) から第22号 (1924年6月) にかけて連続して掲載されている。

4.4. *Vers une architecture* の改訂

Vers une architecture (初版) はいくつかの変更が加えられ、ル・コルビュジエ単著で刊行されることになる。その際に「第2版に際しての序」が加えられた。それに伴うル・コルビュジエとオザンファンとのやり取りの経緯を要約すると以下ようになる。まず、ル・コルビュジエとジャンヌレが *Vers une architecture* の単著化をオザンファンに要求 (1924年8月8日の手紙) (Ducros, 2001, p. 93)。オザンファンが同書の単著化を了承 (1924年8月13日の手紙) (同上)。しかし、第2版出版の過程で著者の特定にかかわる重大な変更が生じた。初版に記載されていたオザンファンへの献辞の削除である。この件についてのオザンファンからの問い合わせに対し、ル・コルビュジエは出版担当者からの手紙 (1926年3月11日) のコピーを添えて、出版社による手違いで自分の指示によるものではないと説明している (1926年3月12日の手紙)⁶。

その後、第2版に図版を追加し、若干の本文の修正を加えた改訂第3版が1928年に刊行された。その冒頭には「第2版に際しての序」に代わって1928年1月1日付の「時候3版に際して」が加えられた。その後、クレス社の倒産による絶版を挟んで1958年に復刻再版された (3回目の改訂にあたる)。

4.5. *Vers une architecture* の邦訳

Vers une architecture (初版) の抄訳を初めて公表したのは、中村順平である。彼は1920年から1923年にかけての渡欧時に入手した同書の冒頭部分にあたる「論旨概要」の一部を「仏蘭西現代都市研究について」 (『建築思潮』1924) に紹介している⁷。その後、様々な人物に

より複数の抄訳が試みられた。蔵田周忠がそれらをまとめたリストを『国際建築』の1929年8月号に発表している (佐々木, 2011, p. 228)。そして、それらの抄訳群とは独立して、宮崎謙三訳による同書の全訳『ル・コルビュジエ 建築芸術へ』 (構成社) が1929年に刊行された (図4)。宮崎が底本としたのは、今井兼次が丸善書店で購入し、友人の小池新二に貸した *Vers une architecture* (初版) である。ただし、邦訳刊行に際して著者名が「ル・コルビュジエーソニエ (ママ)」から「ル・コルビュジエ」に改められた (佐々木, 2000, pp. 155–157)⁸。

訳者序文 (原文の旧字体を新字体に変更) によると、邦訳は1928年春に完了していたようだ。また、独訳を参考にしていると記されている。「訳は原著によったものだが、多少独逸訳を参照した」 (原文の旧字体を新字体に変更)。加えて、挿図について下記のように記している。「挿図は鮮明なる理由から独逸訳のものを複写した」 (宮崎訳, 1929, p. 1)。参照したと考えられる独訳版も仏語版 (初版) を底本としている⁹。補足するなら、同翻訳は Frederic Etchells による英訳 *Towards a New Architecture* (John Rodker Publisher, London, 1931) に先行する。

続いて吉阪隆正訳の『建築をめざして』が1967年に刊行された。いずれも第3版で初めて付け加えられた「時候」を含んでいることから、いずれも第3版以降の改訂版を底本にしていることがわかる¹⁰。

そして、樋口清による邦訳が2003年に刊行されるに至る。同翻訳の初版は、仏語版初版当時の表紙を復元し、日本語による著者名と表題の表記は、透明なカヴァーに印刷することで透明なカヴァーを外すと当初の表紙がどのようなものであったかがわかるような工夫がされている¹¹。また、ページ割も可能な限り *Vers une architecture* (初版) を保存するようになっている。具体的には本文のページ数が *Vers une architecture* (初版) と同じ230ページであり、*Vers une architecture* (初版) と1対1の対応関係が可能な限り保存されている¹²。

5. 結び

本資料がもたらす価値は二つに分類できる。第1は本資料の書籍としての内容にかかわる。すなわち、*Vers une architecture* (初版) は、ル・コルビュジエーソニエの著者名で『新精神』誌に発表された一連の建築に関する論考と *Vers une architecture* (第2版) 以降のル・コルビュジエ 単著の改訂版の間にあって、その間を埋めるミッシング・リンクを埋める。したがって、同書を介在させてそれらの間にある差異を読み解くなら、その間に潜在するル・コルビュジエの建築観の変化の理解を

深めることが期待できる。

本資料のもう一つの価値は、資料の来歴、すなわち同資料が吉田鉄郎の蔵書であったことに由来する。吉田がオーギュスト・ペレを信奉していたことはよく知られている。しかし、吉田が希少な *Vers une architecture* (初版) を所有していたこと、さらに晩年の吉田が同書を用いて鹿島建設の若い設計部社員にむけて話をしたという事実にもとづくル・コルビュジエへの関心は、これまでの吉田研究においてあまり触れられてこなかった。同資料によって、たとえば逓信省における吉田の規格化の推進にル・コルビュジエとの関係という新たな視座を加えることが可能となる。

さらにいえば、国立近現代建築資料館は、本資料以外に吉田鉄郎に関する資料群を所蔵している。両者を連携させることで、より広範な視点から吉田の建築を検証することができるだろう。本資料が吉田研究に新たなエヴィデンスを提供することで吉田研究の進展を促し、その成果によって我が国の近現代建築の理解が進むことを期待したい。

注

- 1 *Vers une architecture* (初版) については以下の先行研究がある。1) 伊従 (1997)、2) Ducros (2001)、3) 加藤 (2012)。本稿では必要に応じてこれらを参照している。本稿の執筆にあたっては、可能な限りエヴィデンスを示すように心がけた。
- 2 加藤は、樋口による邦訳『建築へ』のあとがきの記載から樋口清が *Vers une architecture* (初版) を所有していると推察していた。しかし、確認できないまま時が過ぎた。その後の国立近現代建築資料館における打診の経緯を要約すると以下ようになる。2019–2020年に開催した「吉田鉄郎の近代 モダニズムと伝統の架け橋」展において、樋口清先生と近しい橋本久道氏に樋口清訳『建築へ』の底本となった *Vers une architecture* (初版) の現況について、お尋ねした。その後、当館の元主任建築資料調査官の山名善之の連絡がきっかけとなり、2022年5月になってご遺族が同書を当館へ預けたいという意思を示されたという連絡が橋本氏からあった。その際、館内で同書の扱いに向けた検討を開始すること、その結果を運営委員会等にはかり、寄贈資料として受け入れる可能性を検討する旨を伝えた。これを受けて、2022年5月30日にご遺族が橋本氏とともに当館に同書を持参された。
- 3 同書の「あと書き」に記された「ペレ」とはフランスの建築家オーギュスト・ペレ (1874–1954) であり、「エストベリ」とはスウェーデンの建築家ラグナール・エストベリ (1866–1945) である。いずれも吉田が昭和6 (1931) 年から昭和7 (1932) 年にかけての渡欧時に直接その作

品をみた建築家であり、吉田の話は渡欧における実体験を踏まえたものであったと思われる。ペレは吉田がとりわけ心酔した建築家であり、ペレの特集号である *L'ARCHITECTURE D'AUJOURD'HUI* (no. 1, Novembre 1930) などを通じて、ペレの作品を参照していた。代表作に『フランクリン街のアパート』(1903)『ランシーの教会』(1923) などがある。エストベリの代表作は何といても『ストックホルム市庁舎』(1909–1923) であろう。

- 4 第2版の出版時期を正確に特定することは難しい。Lucan (1987) は (おそらく同書に付された「第2版への序」に記された1924年11月の日付をもとに) 1924年としている (p. 483)。吉阪訳の『建築をめざして』の扉裏に記されたcopyrightも1924出版の書籍の存在を示唆している。しかし、その正確な出版時期は1925年まで下る可能性が高い。詳細は、加藤 (2012, pp. 151–153) を参照。付け加えるなら、伊従 (1987) は『現代建築年鑑』(1926) の「新精神館が建設されている間に『建築書』が再版され……」(p. 210) という記述に基づき、『新精神館』の1925年の7月10日の開館に向けて出版されたと記している。
- 5 それらの差異については、すでに加藤 (2012) が多くを指摘している (pp. 53–57)。関連して、同書において第3版で挿入されたと記した (p. 57) 「アクロポリスの遠望スケッチ」は、第2版においてすでに挿入されていた (p. 186)。この場を借りて訂正する。
- 6 伊従 (1987, p. 210)。加藤 (2012, pp. 50–52)。1926年3月12日付のオザンファンへの手紙は下記に掲載されている (Jornod, 2005, pp. 1028–29)。オザンファンへの献辞は第3版で復活する。
- 7 佐々木 (2000) によれば、日本でル・コルビュジエを始めて紹介したのは薬師寺主計である。彼は1921年から1923年まで渡欧、帰国後の『建築世界』(1923年8月号) にル・コルビュジエとの会見を寄稿している。
- 8 同翻訳書の近刊広告が存在し、そこでは著者名が「ル・コルビュジエ・ソオニエ著」と記されている (佐々木, 2000, p. 156)。
- 9 参照したと記される独訳については、*Le Corbusier Kommende Baukunst* (Entwurf des Einbands von Richard Herre, Stuttgart, 1925) に加えて、追いかけるように翌年の1926年に刊行された同書の第2版にあたる *Le Corbusier Kommende Baukunst* (Deutsche Verlags Anstalt, Stuttgart Berlin und Leipzig, 1926) の可能性がある。独訳第2版の底本はル・コルビュジエによる「第2版への序」が含まれるほか、挿図に「アクロポリスの遠望スケッチ」が存在することから、仏語第2版である。独訳初版を確認できないため、宮崎がいずれを参照したかは不明であるが、独語第1版の可能性が高い。
- 10 吉阪訳の扉裏面には「Copyright© 1924 by Les Éditions G. Cres et Cie Published 1967 in Japan (ママ)」と記され、これを受けてだろうか、佐々木 (2005) も同翻訳の底本を「1924年のクレ社版」としている (p. 203)。しかし、1924

- 年の版ではありえない。底本は、1928年刊行の3版以降、おそらく1958年の復刻再版後の版と推定される。
- 11 邦訳普及版(2011)以降では、表紙に日本語の著者名と書名が合わせて印刷されるように変更された。
- 12 『建築へ』の論旨概要のページはV-X(V相当のページはページ付けなし)であり、仏語版のⅦ-Ⅺ(Ⅶ相当のページにはページ付けなし)と若干相違している。

参考文献

- (1) Ducros, F.: “Amédée Ozenfant, ‘Purist Brother’: An Essay on His Contribution”, Eliel, C. S., *L’esprit Nouveau Purism in Paris, 1918–25*, Harry N. Abrams, Inc., 2001, pp. 71–99.
- (2) Jornod, N. et Jornod J.-P.: *Le Corbusier catalogue raisonné de l’œuvre peint Tome II*, Skira, 2005.
- (3) Lucan, J. (éd.): *Corbusier une encyclopédie*, Éditions du Centre Pompidou/CCI, Paris, 1987.
- (4) 伊從勉:「ル・コルビュジエ著『建築をめざして』初版本の謎について」,『10 + 1』, No.11, 1987年11月, pp. 199–220.
- (5) 加藤道夫:『総合芸術家 ル・コルビュジエの誕生 評論家・画家・建築家』, 丸善出版, 2012.
- (6) Le Corbusier-Saugnier: *Vers une architecture* (1^{ère} édition), Les Éditions G. Crès et Cie, 1923.
- (7) ル・コルビュジエーソーニエ(樋口清訳):『建築へ』, 中央公論美術出版, 2003.
- (8) Le Corbusier: *Vers une architecture* (2^e édition), Les Éditions G. Crès et Cie, c. 1924.

- (9) Le Corbusier: *Le Corbusier Kommende Baukunst*, Deutsche Verlags Anstalt, Stuttgart Berlin und Leipzig, 1926.
- (10) ル・コルビュジエ(宮崎謙三訳):『建築芸術へ』, 構成社, 1929.
- (11) Le Corbusier (Frederic Etchells Tr.): *Towards a New Architecture*, John Rodker Publisher, 1931.
- (12) ル・コルビュジエ(吉阪隆正訳):『建築をめざして』, 鹿島出版会, 1967.
- (13) Le Corbusier: *Almanach d’architecture moderne*, Éditions Connivences, 1987 (original published, Les Éditions G. Crès et Cie, 1926).
- (14) 佐々木宏:『巨匠への憧憬』, 相模書房, 2000.
- (15) 佐々木宏:『知られざるル・コルビュジエを求めて』, 王国社, 2005.
- (16) 佐々木宏:「ル・コルビュジエの活動の軌跡が分かる日本語版文献リスト」,『ル・コルビュジエ 建築・家具・人間・旅の全記録』, エクスナレッジ, 2011, pp. 228–233.

追記

本資料の収集業務は、青山道乃に加えて、加藤道夫と寺内朋子が行われた。

(2023年5月9日原稿受理)

表1 『新精神』誌と *Vers une architecture* (初版) の対応

『新精神』誌での表題*	<i>Vers une architecture</i> (初版) での表題*	『新精神』誌における号	刊行年月	<i>Vers une architecture</i> (初版) での掲載順	備考
—	論旨概要 [ARGUMENT]	—			<i>Vers une architecture</i> (初版) で冒頭に追加
三つの呼びかけ 建築家諸氏に	三つの呼びかけ 建築家諸氏に I 立体	第1号	1920年10月	2	<i>Vers une architecture</i> (初版) では「立体」が表題に明記
三つの呼びかけ 建築家諸氏に 第2稿	三つの呼びかけ 建築家諸氏に II 面	第2号	1920年11月	3	<i>Vers une architecture</i> (初版) では「面」が表題に明記
三つの呼びかけ 建築家諸氏に 第3稿	三つの呼びかけ 建築家諸氏に III プラン	第4号	1921年1月	4	<i>Vers une architecture</i> (初版) では「プラン」が表題に明記
規整線(トラセ・レギュラツール)	同左	第5号	1921年2月	5	<i>Vers une architecture</i> (初版) において作品引用の注の主語が「LC-S」から「私」に変更
見えない目… 商船	見えない目… I 商船	第8号	1921年5月	6	『新精神』誌の表紙では「工学技師の美学」の項に記載
見えない目… II 飛行機	同左	第9号	1921年6月	7	同上
見えない目… III: 自動車	見えない目… III 自動車	第10号	記載なし	8	同上
工学技師の美学、建築	同左	第11–12合併号	1921年11月	1	『新精神』誌の表紙目次では「1920–21年のレビュー」の項に記載
量産住宅	同左	第13号	1921年12月	12	『新精神』誌の表紙目次で「工学技師の美学」の項に記載
建築 I ローマの教え	同左	第14号	1922年1月	9	同誌表紙目次で「美術」の項に記載
建築 II プランの幻覚	同左	第15号	1922年2月	10	同誌表紙目次で「建築」の項に記載
建築 III 精神の純粋な創造	同左	第16号	1922年5月	11	同上
—	建築か、革命か	なし		13	

*表題の邦訳は一部を除いて樋口清訳『建築へ』(2003) になっている。

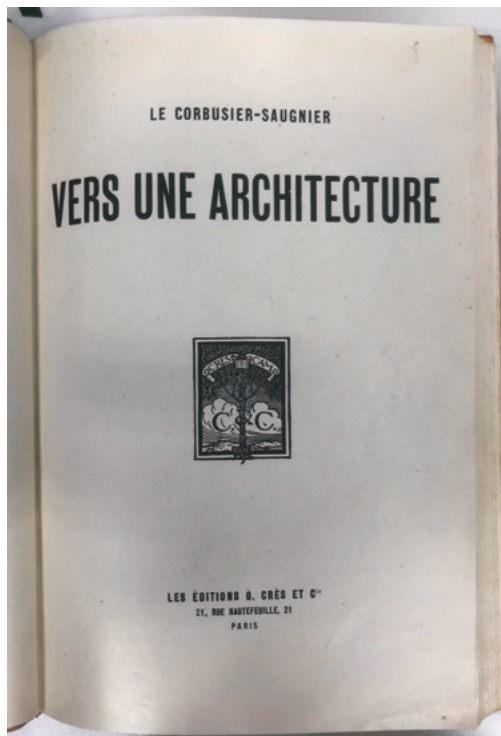


図1 中表紙（著者名が LE CORBUSIER-SAUGNIER）



図2 アメデ・オザンファン [Amédée Ozenfant] への献辞



図3 樋口清による書き込み
「病床にある吉田鉄郎先生よりいただく」



図4 宮崎謙三訳『建築芸術へ』（構成社、1929）、
函（個人蔵）

こどもの国建築関連資料整理及び展覧会開催報告

[論文]

小池 周子*

Report of Kodomonokuni Papers and Records and the Exhibition

KOIKE Shuko

Kodomonokuni (Children's Land) was a valuable place where many Metabolist buildings were constructed; NAMA confirmed the master plan and 14 facilities, including unbuilt projects, in our fond. Kodomonokuni items haven't been researched well, but we finished it with our exhibition. It covered the Master plan by ASADA Takashi, committee history, many architects and architecture stories, and admin's reality. This collection conveys the validity of the Metabolist architecture in Japan that underpinned and materialized Japan's rapid postwar economic growth. It will be new research items of Metabolism architecture history.

キーワード：こどもの国、メタボリズム、建築資料、展覧会

Kodomonokuni-Children's Land, Metabolism, Archival Items, Exhibition

1. はじめに

国立近現代建築資料館（以下、当館）には、2013年の開館以降、数多くの資料が収蔵され、現在は資料群の数も30を超えた。これまで外部からの資料を借用しての企画展等も行っていたが、収蔵品増に伴い、近年では積極的に収蔵品展を開催してゆく意向にある。

令和4年度（2021年）収蔵品展として、こどもの国建築関連資料をあらためて整理し、「こどもの国のデザイン——自然・未来・メタボリズム建築」の開催となった。この「こどもの国」におけるメタボリストたちの饗宴は、メタボリズム研究において、これまで言及できるほど資料整理ができておらず、数々のメタボリズム関連の出版や展覧会では、軽く触れられるに止まっていた。今回の展示に際し、本資料を改めて整理することでメタボリズムにおける「こどもの国」の成果をまとめることとなった。本稿では、展覧会では伝えきれなかった資料群の特性などを紹介することで、こどもの国資料整理の総括としたい。

2. 資料収集経緯

この資料群は、財団法人こどもの国建設協力会にて作成された後、運営組織の中心となっていた朝日新聞東京本社内に保管されることとなる。1974年の財団法人こどもの国協力会への改組、2008年のこどもの国協力会解散により、資料の一部が、保管先の朝日新聞社より現在の社会福祉法人こどもの国協会へ移管された。2016年、こどもの国園長であった三國治氏が当館へ資

料寄贈の意思を伝えたことにより、調査が始まり、2017年5月に当館への寄贈手続きが完了している。

これら資料は、1965年の開園時から1974年の間に作成されたもので、1970年の万国博覧会を跨いでおり、まさにメタボリズム運動の実作の始まりから、各々がそれぞれの活動へと突き進んでゆく時期を網羅した記録といえる。ここには1970年の万国博覧会へと昇華されて行く前の、メタボリストたちの試行錯誤が垣間見える。

3. 資料の構成

本資料群は、こどもの国の施設建設にあたって作成された事業記録に関する書類、工事契約書、寄付金関係書類などからなり、1959年～1974年の間にこどもの国建設協力会においてまとめられ、保管されていた。施設の設計を担当した建築事務所が作成した青焼図面も含まれ、それらは竣工した物の他に、多数提案された未完のプロジェクトも存在する。資料は、案件や内容に沿って47点のファイル分けがされており、これらはいわゆる「施主」側の資料である。そのため、議事録や工事中の週報といった資料が多く含まれ、施設誕生までのドキュメントとなっている。

もっとも多数を占める資料は、予算関係の管理資料である。寄付金捻出の足跡がしっかりと見て取れるこれら書類は、これまでの閲覧では公表不可としていた。しかし、今回の展覧会を機に、こどもの国協会館長、副館長、事務局長と相談の上、個人住所の情報以外は50

*国立近現代建築資料館 研究補佐員、修士（工学）

年以上経過しているので開示可とし、当時の貴重な契約書なども公開することとなった。今後の資料閲覧の対応策にもつながる確認を得ることができた。

4. 「こどもの国」施設概要

1959年4月の皇太子殿下（現・上皇陛下）の御結婚に際して全国からお祝い金が寄せられていた。「子供のための施設をつくりたい」という殿下夫妻の御意思により、本施設の検討が進められることとなる。本計画は、厚生省（現・厚生労働省）主導のもと、子供のための施設を作りたいというニュースを最初に報道した朝日新聞¹が協力して組織化され、1960年に有識者ら19名による「中央児童厚生施設特別委員会」が発足し、骨格が検討された。当初ディズニーランドのようなレジャー施設の案もあったが²、横浜の雄大な自然を活かして、子供たちが自ら遊びを生み出しながら成長してゆけるような施設として計画されることとなる。当時公害問題が深刻化していたこともあり、自然派な施設づくりも後押しされていたという。

その後1961年6月には「こどもの国建設推進委員会」が誕生し、委員会には1960年に発足したメタボリズムメンバーである浅田孝（1921-1990）が参加することとなる。浅田によって、前述の方針に則り、各委員らの意見を取り入れながら、マスタープランがまとめられた。一方、浅田個人としては、多くの諸施設を建設するよりも、何もない真の自然の中で子供たちが自由に遊びを生み出せる場にしたいと再三口にしていたという。³

1963年に関連施設の設計を担う「設計集団」が発足され、浅田が中心となり、数多くのメタボリズムメンバーが一同に会することとなる。浅田のほか、大高正人、黒川紀章、菊竹清訓というメタボリズムグループの中核メンバーに加え、大谷幸夫、鈴木彰といった当時若手の建築家、さらにイサム・ノグチの特別参加により、9つのプロジェクトが竣工する。また設計連合には、柳宗理や栗津潔といったデザイナーも参加しており、議事録には彼らの言動の記録が残っている。こどもの国の施設設計は、常にこの設計集団の打ち合わせのもとに担当者が決められていたことがうかがえる。同時に、浅田の葛藤がうかがえる言付けの記録もあり、激変する時代の中でリーダーとしての重圧を感じさせるものがある。

1,260万円（1960年時点）のお祝い金で始められた計画は、計画全容がまとめられた際には20億円もの巨大プロジェクトになっていた⁴。国費および諸団体や個人の多大な寄付と協力を得て、1965年に開園した。その

後、全国各地に誕生する類似のこども施設に、大きな影響を与えることとなる。

現存しているのは、皇太子記念館（現・平成記念館）とフラワーシェルター、イサム・ノグチの遊具、オクテトラ、ゲートなどである。それ以外はいずれも老朽化、実用性の向上等の理由により取り壊されている。皇太子記念館は、開館50周年を前に2021年に大規模な改修を行い、現在の大屋根大空間になった。当初白色だったフラワーシェルターも、現在は黄色に塗り替えられている。

【主な建築物の名称/設計者/竣工年/取壊し年】

野外劇場 / 浅田孝 / 1962 ※計画のみ
自然プール / 浅田孝 / 1964 / 使用中止
フラワーシェルター / 黒川紀章 / 1964
修学旅行記念館 / 大高正人 / 1964 ※計画のみ
セントラルロッジ / 黒川紀章 / 1965 / 1986
アンデルセン記念の家 / 黒川紀章 / 1965 / 1985
交通訓練センター / 鈴木彰 / 1965 / 1992
A地区児童遊園・児童館 / イサム・ノグチ、大谷幸夫 / 1966 / 1985
屋外スケート場 A / イサム・ノグチ / 1966 / 1976
公衆便所計画 / 黒川紀章 / 1966 ※計画のみ
林間学校 / 菊竹清訓 / 1967 / 1981
屋外スケート場 B / イサム・ノグチ / 1968 / 1976
皇太子記念館（現・平成記念館） / 浅田孝 / 1972
サッカー場クラブハウス / 浅田孝 / 1972 / 2011年改修

上記のほか、イサム・ノグチによる遊具、作成者不明だがキャンプ場計画、プロダクトデザイナーらによるベンチやゴミ箱といった園内プロダクトの企画も進められており、実現には至らなかった計画案も多数資料が残されている。

各作品解説は、展覧会図録を参照いただきたい。

5. 展覧会概要

展覧会は、浅田孝によるマスタープランのゾーニングをもとに資料を展開した。（なお、現在このゾーニング計画は園内地図等でも使用されていない）

A地区：やや手を加えた広大な緑地と、対比される人工的な施設を中心とするスケールのある空間
皇太子記念館（現・平成記念館） / 浅田孝 / 1972
A地区児童遊園・児童館 / イサム・ノグチ、大谷幸夫 / 1966

B地区：水を中心とする地域。魅力ある活動と静かな風景との対比

自然プール / 浅田孝 / 1964

セントラルロッジ / 黒川紀章 / 1965

アンデルセン記念の家 / 黒川紀章 / 1965

C 地区：現存の状況を保存した野趣ある自然。荒々しい活動のできる地域

フラワーシェルター / 黒川紀章 / 1964

修学旅行記念館 / 大高正人 / 1964 ※計画のみ

D 地区：A・B・Cの3地帯をわける静かな休息の空間
交通訓練センター / 鈴木彰 / 1965

林間学校 / 菊竹清訓 / 1967

会場では、当時のA～D地区に沿ってプロジェクト展示を行い、会場中央では、現在のこどもの国の様子を交え、現在とかつての姿が見えるような動画放映を行った。また開園同時に制作された広報物や、大々的に取り上げられた雑誌原本（『approach 1966年秋号』竹中工務店、『World Architecture 4』1967年、STUDIO VISTA LONDON）を展示した。

本資料群は多くが青焼図面となっており、資料保護の観点から、年間展示最大30日間の資料にあたるため、会期中に複製との入れ替えを行っている。同時に、こどもの国資料群に青焼図面がある菊竹清訓の林間学校、大高正人の修学旅行記念館については、菊竹資料群、大高資料群でこれらプロジェクトの原図やスケッチ資料も収蔵されていたため、展覧会では原資料を展示することができた。当館の資料群を跨いだ展覧会計画は本展が初めてのケースとなり、今後ますます同様の試みへの期待につながる機会となった。

展覧会に際して制作された図録は、全40頁で、各プロジェクト解説並びに図版、論考が掲載され、執筆は当館企画主任建築資料調査官・小林克弘と筆者が担当した。（なお、図録には「併設」新規収蔵資料紹介の解説及び図版4頁も含まれる。）

6. 「設計集団」資料

今回の展示では一部しか出せなかった資料について少しまとめておきたい。繰り返しになるが、本資料群は施主側が保管していた資料であり、建築家から預かる資料とは毛色が異なる。かつ、行政も絡んだプロジェクトのため、多様な書面が含まれている。なかでも興味深かったのが、「設計集団」と書かれたファイルである。事務方（朝日新聞と入った便箋による記録）による議事録は、まずこどもの国がどう施設と自然を守っていくのかなど、当時の関係者による各々の意見が取り交わされており、息遣いを感じるものである。

また、建築家の職能に対する言及は貴重である。日本建築学会（1886年発足）は明治時代に設立され、日本の建築学を牽引し、世界に羽ばたく建築家の輩出を促しているが、わが国における職能としての「建築家」確立は、日本の大工文化の中で確立するのに時間を要していた。日本建築家協会は、日本建築設計監理協会として1947年設立し、1955年の国際建築家連合（UIA）への加盟に伴い、現・日本建築家協会と改組する。建築家の職能を社会に認めてもらわなければ、という時流の矢先の大プロジェクトがこの「こどもの国」でもあったといえよう。また発足間もない頃の「設計集団」の進行方向などが、模索しながら形となっていた様相がよく見て取れる。本ファイルには、日本建築家協会、四会連合会共通の工事請負約款が含まれており、当時の厚生省基準だった2.7%に対し、日本建築家協会の主張する5%との折り合いについて、度々議論が展開されている。結果、建築家を擁護する立場として、安い設計料での契約は道義に反するという姿勢を守り、事務方は費用工面に繰り出すこととなる。また提案案件（資料での記述は「委図設計料」）についても単価が取り決められ、大高の修学旅行記念館など、実現しなかった案件のプレゼン資料の精度の高さにも納得がいく。

7. 結びにかえて

先にも述べたが、本資料群は「施主側」が保管していた資料であり、図面のみならず書類が多数を占めるものであった。図面は基本的に青焼で、議事録、最も多いのは予算にかかる資料である。そのため紙資料が展示の9割を占め、なおかつ建築関係者の間でもそこまで認知度が高くない、隠れたメタボリズムストーリーに関する、かなりニッチな展示となった。

資料調査を行いながら、メタボリストたちの壮大な夢と事務方の努力がひしひしと伝わるばかりであった。メタボリストたちの作品と言え、70年の万博が真っ先に思い浮かび、戦後の近代建築を華々しく飾ったイメージがある。一方、このこどもの国施設建設には「現実におけるメタボリズム」、建築家が社会とどう対峙してゆくのか、どう現実を生み出すかを模索し続けた質朴なメタボリズムの歴史がある。メタボリストたちが、日々協会側と議論を交わし、自身が考えるメタボリズム建築をいかに着地させようか、と切磋琢磨する姿がここにある。やはり展示となると絵や写真が主となってしまう、この肝となるところを見せきれなかった点はやや悔やまれるが、本稿にてその補完となることを願う。

収蔵後、あまり日の目を当てられていなかった貴重

な資料の公開と、それらに伴う追加整理をしたことで、本資料群はアーカイブズとして作業を完了した。本展後に本資料の資料閲覧は微増したが、今後のメタボリズム研究への大きな一隊となることに期待したい。

注

- 1 國治編『こどもの国50年史』社会福祉法人こどもの国協会、朝日新聞出版、2016年、42-43頁
- 2 同上、46-47頁
- 3 同上、58頁
- 4 同上、44頁

なお、こどもの国の経緯については、同書を参照した。

【展覧会】

「こどもの国」のデザイン——自然・未来・メタボリズム建築

〔併設〕新規収蔵資料紹介

会期：2022年6月21日（火）～8月28日（日）

主催：文化庁

協力：公益財団法人東京都公園協会

会場：文化庁国立近現代建築資料館

休館日：毎週月曜日（但し、7月18日〔月・祝〕は開館し、7月19日〔火〕休館）

企画：文化庁国立近現代建築資料館

小林克弘（主任建築資料調査官）

加藤道夫（主任建築資料調査官）

小池周子（研究補佐員）

寺内朋子（研究補佐員）

木下紗耶子（研究補佐員）

高瀬道乃（研究補佐員）

門間光（研究補佐員）

会場展示

翻訳：坂本 和子（英語）、朴 玉順（韓国語）、Eric Yu（中国語）

アートディレクション：吉田 貴久（合同会社胡桃ヶ谷デザイン室）

会場制作・設営：株式会社芸宣、株式会社ブランチ、大額株式会社、竹下誠司（合同会社サムサラ）

来館者：3,563人（開館日60日）

【図録】

発行・監修：文化庁

編集：文化庁国立近現代建築資料館

デザイン：吉田 貴久（合同会社胡桃ヶ谷デザイン室）

翻訳：坂本 和子

印刷・製本：株式会社リーフ

https://nama.bunka.go.jp/wp-content/uploads/2023/02/exhibition2022_kodomonokuni.pdf



図1 「こどもの国」のデザイン展の展示風景



図2 菊竹清訓による「林間学校」スケッチ並びに外観写真スライド



図3 設計集団資料の紹介

（2023年6月15日原稿受理）

令和4年度収蔵品展「こどもの国」のデザイン ― 自然・未来・メタボリズム建築 出品リスト
 Kodomonokuni : Children's Land -Nature, Future and Metabolism Architecture

A地区 皇太子記念館 設計：浅田孝	Area A Memorial Hall ASADA Takashi
平面配置図 1:300 1966 青焼 778×1074 複製	Plot Plan Blue Print Reproduction
断面図 - - プリント 255×360	Section Print
立面図(1968年案) 1:100 プリント 210×297	Elevation, Scheme of 1968 Print
立面図(最終案) - プリント 255×360	Elevation, Final Scheme Print
1階平面図(1968年案) 1:100 - 青焼 850×700	First Floor Plan, Scheme of 1968 Blue Print
パース(1968年案) - - インク、スクリーントーン 256×358	Perspective Drawing, Scheme of 1968 Ink, Screen Tone
1階平面図(科学館と一体整備案) 1:500 1962 青焼 426×613	First Floor Plan, Scheme of 1962 Blue Print Integrated Plan with the Science Hall
正面図 A-A' 縦断面図(科学館と一体整備案) 1:500 1962 青焼 430×622	Elevation and A-A' Longitudinal Section, Scheme of 1962 Blue Print Integrated Plan with the Science Hall
1・2階平面図、屋根伏図、南立面図、A-A' 断面図(1965年12月、五角形平面案) 1:500 1965 青焼 423×594	First Floor, Second Floor and Roof Plan, South Elevation, A-A' Section Scheme of 1965 Blue Print Scheme with Pentagon Plan
雪をまとった記念館 撮影：石橋三夫 2014	Memorial Hall Covered with snow Photo by ISHIBASHI Mitsuo
A地区 児童遊園・児童館 設計：大谷幸夫、イサム・ノグチ	Area A Children's Playground and Pavilion OTANI Sachio, NOGUCHI Isamu
配置図 1:300 1966 青焼 841×1189	Plot Plan Blue Print
野外スケート場 撮影：朝日新聞社 1966	Outdoor Skating Rink Photo by the Asahi Shimbun
平面詳細図 1:100 - 青焼 780×1080	Detailed Plan Drawing Blue Print
矩計図 詳細図 1:20, 1:30, 1:5 - 青焼 545×790	Detailed Section Drawing Blue Print
「公衆便所」、平面図 立面図 断面図 展開図 詳細図 天井伏図 1:50, 1:20 - 青焼 594×841	Drawings of Public Toilet - Plan, Elevation, Section, Interior Elevation, Detail, Ceiling Plan Blue Print
イサム・ノグチの遊具「ピラミッド」、詳細図 1:50 - 青焼 594×841	Pyramid Designed by NOGUCHI Isamu Blue Print
イサム・ノグチの遊具「原始部落」、詳細図 1:50 - 青焼 594×841	Primitive Village Designed by NOGUCHI Isamu Blue Print
雪化粧のアプローチ通路 撮影：石橋三夫 2014	Approach Maked up by Snow Photo by ISHIBASHI Mitsuo
A地区 児童館初期案 設計：大谷幸夫	Area A Children's Playground and Pavilion (Early Scheme) OTANI Sachio
鳥瞰図 - - 青焼 593×448 複製	Bird's Eye View Blue Print Reproduction
立面図・断面図 1:500 - 青焼 421×616 複製	Elevation and Section Blue Print Reproduction
配置図・平面図 1:500 - 青焼 421×621	Plot Plan and Floor Plan Blue Print
A地区 関連資料	Area A Materials
パース - - プリント 255×360	Perspective Drawing Print
『プロジェクトジャパン メタボリズムは語る』 2012 平凡社	"Project Japan, Metabolism Talks ..." 2012 Heibon-sha
児童館・児童遊園工事写真 - スクラップブック 300×230	Public Toilet under Construction Photo by NAMA
"Anthologie: Aires de jeux au Japon" 2019 Vincent Romany Tombolo Presses	"Anthologie: Aires de jeux au Japon" 2019 Vincent Romany Tombolo Presses
『建築』 1966年8月号 青銅社	"Kenchiku" August, 1966 Seido-sha
B地区 自然プール 設計：浅田孝	Area B Natural Swimming Pool ASADA Takashi
第2次案略設計図 1:500, 1:300 1962 青焼 436×592	Second Scheme of Natural Swimming Pool Blue Print
自然プール、奥に人造湖を見る 提供：社会福祉法人こどもの国協会	Natural Swimming Pool Looking toward Artificial Lake Courtesy of Social Welfare Corporation Kodomo no Kuni Association
契約書 1963 書類 260×365	Contract Document Document
B地区 セントラルロッジ 設計：黒川紀章	Area B Central Loage KUROKAWA Kisho
野外劇場工事写真 40年6月20日撮影 1965 アルバム 180×250	Exterior View
週間工程表及び工程写真 1965 ファイル 305×230	Under Construction
立面図 1:100 - 青焼 594×841	Elevation Blue Print
断面図 1:100 - 青焼 594×841	Section Blue Print
平面図 1:100 1964 青焼 393×810 複製	Plan Blue Print Reproduction
平面図 1:100 1964 青焼 394×808	Plan Blue Print
配置図 1:300 1964 青焼 395×790	Plot Plan Blue Print
『METABOLISM 1960』 1960 川添登編集 美術出版社	"METABOLISM 1960" KAWAZOE Noboru ed. BIJYUTSU SHUPPAN-SHA
B地区 アンデルセン記念の家 設計：黒川紀章	Area B Andersen Memorial KUROKAWA Kisho
外観 絵ハガキ 140×100	Exterior View Postcard
詳細図 1:20 - 青焼 442×800 複製	Detailed Section Blue Print Reproduction
平面図 1:50 - 青焼 393×780	Plan Blue Print
立面図・断面図 1:50 - 青焼 390×790 複製	Elevation and Section Blue Print Reproduction
建設中の様子 ネガベタ焼 180×260	In Construction Contact Print
起工式ご案内 1965 書類 260×397	Announcement of Groundbreaking Ceremony Document
『黒川紀章の世界』 1975 毎日新聞社	"Kurokawa Kisho no Sekai" (The world of KUROKAWA Kisho) Mainichi Shinbunsha
C地区 フラワーシェルター 設計：黒川紀章	Area C Flower Shelter KUROKAWA Kisho
「閉じた花」の内観 撮影：文化庁国立近現代建築資料館 2021	Interior Space of Closed Flower Photo by NAMA
「開いた花」の外観 撮影：文化庁国立近現代建築資料館 2021	Exterior View of Blooming Flower Photo by NAMA
『建築』 1964年9月号 青銅社	"Kenchiku" September, 1964 Seido-sha

C地区 修学旅行会館 設計：大高正人	Area C Children's Hostel OTAKA Masato
配置図 1:500 1964 裏焼 420×591	Plot Plan Reversal Print
鳥瞰ドローイング - - 裏焼 420×591	Bird's Eye Drawing Reversal Print
1, 2, 3, 4階平面図 1:500 1964 裏焼 420×591	Plan of First, Second, Third and Forth Floor Reversal Print
南立面図、東立面図、断面図 1:500 1964 裏焼 420×591	South and East Elevation、Section Reversal Print
修学旅行会館ファイル 書類 290×220	File of Children's Hostel Document
D地区 交通訓練センター 設計：鈴木彰	Area D Traffic Training Center SUZUKI Akira
交通訓練施設写真[撮影：40年7月] 1965 アルバム 180×250	Traffic Training Center Photos [Photo by 1965 . May 16th] Album
立面図 1:200 - 青焼 545×817	Elevation Blue Print
配置図 1:500 - 青焼 546×819	Plot Plan Blue Print
1階平面図 1:200 - 青焼 542×821	First Floor Plan Blue Print
2階平面図 1:200 - 青焼 549×820	Second Floor Plan Blue Print
『建築文化』 1965年10月号 彰国社	"Kenchiku Bunka" October 1965 Shokoku-sha
D地区 林間学校 設計：菊竹清訓	Area D Summer Camp KIKUTAKE Kiyonori
初期のイメージ・ドローイング - - 鉛筆、絵具、トレーシングペーパー 454×720	Drawing of Early Image Pencil and Paints on Tracing Paper
配置・立面の比較検討図 1:3000, 1:1000 - 鉛筆、インク、トレーシングペーパー 556×795	Comparative Study Drawing on Plot Plan and Elevation Pencil and Ink on Tracing Paper
鳥瞰図 - - 青焼 423×595	Bird's Eye View Blue Print
立面図、平面図、断面図 1:100, 1:50 - 鉛筆、インク、トレーシングペーパー 510×719	Elevation, Plan, Section Pencil and Ink on Tracing Paper
南立面図、平面図、断面図 1:100, 1:500 - 鉛筆、インク、トレーシングペーパー 515×733	South Elevation, Plan, Section Pencil and Ink on Tracing Paper
立面断面スケッチ - - 鉛筆、色鉛筆、インク、トレーシングペーパー 387×794	Sketch of Elevation and Section Pencil, Color Pencil and Ink on Tracing Paper
初期のエスキス - - 鉛筆、色鉛筆、インク、トレーシングペーパー 500×610	Early Scheme Pencil, Color Pencil, Ink on Tracing Paper
『菊竹清訓作品集1「型」の展開』 1990 求龍堂	"Work by KIKUTAKE 1 Prototype Developments" Kyuryudo
『新建築』 1967年9月号 新建築社	"Shinkenchiku" September, 1967 Shinkenchiku-sha
一般図 1:1000, 1:100, 1:200 1965 鉛筆、インク、トレーシングペーパー 536×790	General Drawings Pencil and Ink on Tracing Paper
M矩計図 1:50 1965 鉛筆、インク、トレーシングペーパー 572×1038	M Sectional Detail Pencil and Ink on Tracing Paper
関連資料	Related Materials
「設計集団」出席者 1964 書類 260×180	"Design Team" List Document
出席者返信はがき 書類 140×90	Reply Postcards Document
設計集団ファイル 書類 275×205	File of Design Team Document
募金計画表 1967 書類 250×360	Fundraising Plan Document
募金趣意書 書類 170×710	Donation Prospectus Document
マスタープラン 1:3000 1962 青焼、色鉛筆 590×442	Master Plan Blue Print, Color Pencil
『こどもの国三十年史』 1996 池田邦二編、社会福祉法人こどもの国協会	"Kodomonokuni's 30-year History" IKEDA Kuniji (ed.), Kodomonokuni Kyokai
『こどもの国50年史』 2016 三國治編、社会福祉法人こどもの国協会、朝日新聞出版	"Kodomonokuni's 50-year History" MIKUNI Osamu (ed.), Kodomonokuni Kyokai, Asahi Shimbun Publications
アンビルト計画案	Unbuilt Projects
野外劇場、第二次案略設計図 1:500 1962 青焼 434×593	The Second Scheme Design for Open-air Theater Blue Print
キャンプ場配置図 1:1000 - 青焼 595×438 複製	Plan for Camping Site Blue Print Reproduction
児童館(初期案)計画 1965 プリント 提供：大谷研究室	Children's Pavilion (Early Scheme) Print Courtesy of Sachio Otani + OTANI ASSOCIATES
公衆便所、平面図 標準詳細図 1:100, 1:20 1966 青焼 528×772	Public Toilet, Plan and Standard Detail Blue Print
公衆便所、平面図 立面図 1:100 1966 青焼 527×774 複製	Public Toilet, Plan and Elevation Blue Print Reproduction
中央円形台	Cebter Display
太陽と緑の100万平方メートルこどもの国 パンフレット 260×180	Kodomonokuni [Children's Land] Pamphlet
こどもの国 チラシ 260×180	Kodomonokuni [Children's Land] Brochure
恵まれた自然環境で楽しい遊びのくふうしよう こどもの国 パンフレット 260×180	Kodomonokuni [Children's Land] Pamphlet
こどもの国 自然と創意の新しい遊び場 パンフレット 260×180	Kodomonokuni [Children's Land] Pamphlet
こどもの国 パンフレット 200×730	Kodomonokuni [Children's Land] Pamphlet
こどもの国案内図 1:300 青焼 516×420 児童遊園徒歩池建設予定資料図面を加工	Guide Map Blue Print Edited Version of Drawing of Children's Playground and Walking Pond Construction Site
『World Architecture 4』 1967 STUDIO VISTA LONDON	(英語のみ)
季刊誌『approach』 1966年秋号 竹中工務店	Quarterly Magazine "approach" Autumn 1966 TAKENAKA CORPORATION
こどもの国デザインスライドショー 制作・編集：文化庁国立近現代建築資料館 8' 50"	Slide show of KODOMONOKUNI [Children's Land] Produced by NAMA
ロビー動画	Movies at the Lobby
1部：こどもの国の歴史(冒頭) DVD こどもの国より 2017 制作：社会福祉法人 こどもの国協会	Chap.1 The history of KODOMONOKUNI [Children's Land] (Bigining Part) From DVD of KODOMONOKUNI
2部：「こどもの国」の建築家・デザイナー 制作・編集：文化庁国立近現代建築資料館 10' 25"	Produced by Social Welfare Corpration the Kodomonokuni Association Chap.2 "Design Team" of the KODOMONOKUNI Produced by NAMA

国立近現代建築資料館における資料収集の手法について

—令和4年度アーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会）短期コースに参加して—

青山(高瀬)道乃*

Methods of Collecting Materials at the NAMA:

From the experience of short course in "Archives College" by National Institute of Japanese Literature

AOYAMA TAKASE Michino

This report is based on a short course at the Archives College held by the Institute of Japanese Literature in 2022, and discusses the methods used to collect materials at NAMA. We have organized our research methods and rules for archives management in the collection of materials at NAMA. We also compared these with previous research in archives studies and discussed the issues involved. The activities of the NAMA should be disseminated and further improved for those who are engaged in the preservation of architectural materials in Japan.

キーワード：建築アーカイブズ、アーキビスト、資料収集、資料管理規程

Architectural Archives, Archivist, collecting materials, document management regulations

はじめに

2021年度の飛田氏¹に引き続き、今年度は筆者が国文学研究所主催のアーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会）へ研修として参加する機会を得た。短期コースでは『令和4年度アーカイブズ・カレッジ テキスト（史料管理学研修会）』²に従い、アーキビストへの入門となる解説を受けた。2021年度当館紀要の報告では「建築アーカイブズのあり方」として本研修全体を通した報告を行った。本報告では「Ⅲ資料館理論」の「2. 民間アーカイブズ・コントロール論」³および「6. アーカイブズの保存環境と劣化損傷の予防」⁴の講義の内容に従い、資料受け入れ検討から受け入れまで⁵の当館の活動体制の整備状況を示し、これにおける課題を整理する。

また、「アーカイブズ管理の実際」⁶として、福島県双葉郡富岡町にある「とみおかアーカイブ・ミュージアム」関係者による講義受講と施設見学を行った。これについても報告をする。

1. 当館が資料(群)を受け入れるまで

「Ⅲ資料整理論 2. 民間アーカイブズ・コントロール論」では、公文書ではなく民間の個人および組織により作成される資料の性格と、これをアーカイブズとして受け入れる機関の受け入れ方法について解説があった。また、以下の内容が示された。民間アーカイブズのう

ち、特に国文学研究所が扱う地域の歴史資料は、その資料がかかわる地域の文化保存の資料となるだけでなく、その資料自体の情報を補足するものであるため、現地保存が理想とされる⁷。また、現地保存を実現するためには公的サポートが必要とされる⁸。民間アーカイブズによる概要調査は、文書群の保存の現状を記録すること、整理全体の計画を立案するための文書群の全体像の把握を行うことが求められる⁹。

当館でも資料(群)の収集を検討するにあたり、「受入資料概要」を作成している。この作成にあたり、原資料秩序の記録、資料種類についての調査と関係者への聞き取り、資料種類の調査集計など事前調査を行う。「受入資料概要」は以下の項目に従い作成している。

〈I 基礎情報 1〉

■資料(群)の名称

当館は基本的に建築家ごとに資料群を組織した収蔵を理想としている。そのため、同じ建築家が作成したが出所の異なる資料については「旧蔵」という語を用い区別を行っている（例として、当館所蔵の吉田鉄郎資料と篠井家旧蔵吉田鉄郎城端郵便局資料がある）。また、「建築設計資料」という語により、特に当館が重視する建築を設計するための図面資料を主とする資料群か否かを表現している。

*国立近現代建築資料館 研究補佐員、早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻 博士後期課程

■所有・管理・権利の所在に関する事項

資料の移動と公開にあたっては、所有権および著作権の確認が必要となる。そのため、寄贈契約に当たり現状権利を持つ立場を明確にしておく必要がある。ただし、資料整理を進めると協働した設計者や写真家などの著作物が含まれることが判明することがある。これらについては寄贈後資料公開の段階で権利確認を行っている。

■打診に関する事項

打診の経緯と寄贈理由をまとめ、現所有者による保管が困難である場合、もしくは資料の散逸、海外流出の可能性があるかどうかを確認する。これは当館で保存すべきか¹⁰について検討を行う際の根拠となる。また、これまでの整理状況についても記述を行う。特に近代初期の建築家資料は研究者が所蔵者となり、資料整理を行い継承がなされている場合がある。このような場合は、所蔵者による資料収集の方法や整理のための分類作業について具体的に記述する。

〈II 基礎情報 2〉

■総量に関する事項

総量および様態の記述と定量表示を行う。総量および様態については総量調査に基づき、資料の様態ごとにその量と合計資料件数を表記する。例えば、図面は図面筒や図面ケースの個数、設計図書やアルバムなどは冊数、その他個数での表記が難しいものについては什器の単位（引き出し段数など）で示す。また、定量表示は総量を立米または書類の量を書棚一段に収納する際の長さ[m]に換算した値¹¹によって示す。

■作成・来歴に関する事項

資料(群)に係る建築家名、資料(群)作成年代の上限と下限、来歴および所有者の変遷について表記する。特に来歴および所有者の変遷については、資料(群)が作成されてから現在に至るまでの所有者の変遷について明記する。資料(群)としての価値は作成者が同じだったとしても来歴によって異なる。これらの情報は残された資料のみでは判断がつかない場合もあるため、関係者への聞き取りや文献調査が必要となる。

■属性に関する事項

資料(群)における原資料秩序と資料(群)の属性について表記する。資料(群)における原資料秩序は資料(群)の外見上の構成と分類について記載する。例えば、建築家事務所に資料がある場合は、室および棚ごとにどのように分類¹²されて資料が保管されていたかを記録する。資料群の属性は建築家、構造技術者について

は「個人文書／専門文書／教員文書／会社記録／プロジェクト記録／美術品・工芸品／追加寄贈資料」にわけ、それぞれの有無と具体例を記載することが多い。この分類によって、設計資料としての情報の網羅性を確認することができる。

〈III 資料内容〉

■資料(群)の内容に関する事項

調査方針に基づき、当該資料における主な内容と特徴を記述する。設計資料であれば下記のような資料分類が考えられる。これらの資料の内容の分類と原資料秩序について場合によっては樹形図等に図示し説明を行う。

図面：計画図面、設計図面、施工図面、竣工図面、スケッチなど／写真：調査写真、施工写真、竣工写真、出版のための版下など／文書類：事務所運営資料、報告書、出版原稿など。

〈IV その他の情報〉

■複製及び公開の可能性

現所有者の意向を明記する。原則として、資料の公開については資料作成者の意思が尊重される。現所有者が資料作成者の意向を継承する場合、これを参考とする。

■備考

資料(群)の状態（保存状態、コンディション）、類例資料群（同一出所資料が他機関にて収蔵されている場合、その状況を明記する）、関連図書などを記述する。資料(群)の状態は、環境的・技術的に適切な寄贈先の検討に役立つ。また、類例資料群は内容的に適切な寄贈先の検討に役立つ。資料群は公開されているものに限られないため、関連図書等において扱われるものについても調査をする必要がある。

〈V 建築家（構造技術者）情報〉

●氏名又は組織名

●主な作品、活動、その他

当館は資料の対象となる建築および建築家の評価によって収集方針を定めているため、建築家としての業績が評価基準の材料となる。また、主な作品や活動歴はその後の資料調査に対し基本情報となる。

以上のような内容を整理し、館内および外部委員会にて議論を行い、収蔵を決定する。ただし、建築資料の保存に関する公的サポートは極めて少ないため、当館への寄贈以外、現状は大学・関連する博物館への寄贈が主な選択肢である。筆頭の建築家が亡くなった後も

設計事務所が存続し資料を継承するが、継続業務がひと段落した段階で設計事務所は縮小され、先述の機関へ寄贈を検討し始める事例¹³が多い。建築資料に関しても地域歴史資料における現地保存に相当するような、その資料をアイデンティティとする立場（元所員・所属大学等）と密接な保存方法を考慮していく必要があるのではないかと考える。

2. 当館の資料受け入れ体制の整備状況

「Ⅲ資料整理論 6. アーカイブズの保存環境と劣化損傷の予防」では、プリザベーション・アドミニストレーター（保存担当者）としてのアーキビストの職能への理解及び基本的な考え方を身に着けることを目的とし、資料の物理的な継承の手法について解説があった。アーカイブズは資料を「群」として保存することが重要であり、これを前提とした保存処置と保存計画が求められる。また、これらの原則として、公文書については「公文書管理法」「特定歴史公文書等の保存、利用及び廃棄に関するガイドライン」、自治体の条例や各文書館の文書館規則、関連する保存関連政策などが整備されている。「特定歴史公文書等の保存、利用及び廃棄に関するガイドライン」では、各国立文書館の適切な運営のための、資料の受け入れから運用に至る参考とすべき基準が示され、資料の保存処置や収蔵庫内の環境についても言及がある。特定歴史公文書を扱う各文書館、公立の大学等では利用等規則として、上記ガイドラインをもとに作成し公開している¹⁴。具体例としては、国立公文書館の「特定歴史公文書等の保存対策方針」¹⁵には書庫の環境や保存処置について（書庫の温度を22℃、相対湿度を55%とする、など）具体的な記載がある。

当館は2017年に「歴史資料等保有施設（公文書管理法第2条第4項第3号及び公文書管理法施行令第3条第1項の規定に基づく施設）」に指定された。資料管理については「文化庁国立近現代建築資料館の建築関係資料の管理、保存及び利用等に関する規程」（平成29年度10月13日）として、資料の公開の基準については昨年度に「国立近現代建築資料館における建築資料公開に関する方針と基準」（令和5年2月20日）として公開され、運用している。

当館では建築事務所で作成される図面・写真・文書等様々な媒体の資料を扱うが、ほぼすべての資料群で図面資料を最優先の資料種類として整理や保存活動を行っている。中性紙の封筒にフラットの状態で差し、それらをマップケースと呼ばれるA0サイズの什器またはA1、A2の中性紙箱にまとめ、棚に積み上げ収蔵している。これらは基本的に原資料秩序である図面筒のまと

まりを保ち収蔵される。一部の資料群ではデータベース公開の際にプロジェクト単位での編成した資料順で資料を紹介しているが、基本的には原資料秩序から物理的に並び替えず収蔵している。また、毎年一定量の高精細なデジタル化を行っており¹⁶、閲覧希望により順番に優先度はあるものの、基本的に建築家やプロジェクトによらず網羅的な作成を目指している。

一方、写真および文書類は中性紙包材や廉価なファイルボックスを使用し整理を行っている。これらの資料のデジタル化については着手しておらず、資料利用の要請があった場合に限られる。ただし、これらの資料の中には図面資料に比べ、劣化しやすい素材の資料が存在する。これらについては保存環境を当館内でより適すると思われる場所へ配置はしているものの、直接的な劣化防止処置を行うことができる環境ではない。そのため、場合によってはデジタル化により少なくともこれらの資料が持つ情報を保持しておくという対応も必要になってくると考えられる。

近現代の資料は保存に関して研究が途上であり、また建築資料に関してはどのような情報を継承することが今後のアーカイブズとしての価値を高めるかについても未定の部分が多い。この点において、他公文書館等の対応を参考にしつつ、限られた資源の中で有効と思われる対処を一つずつ行っていくしかないだろう。

3. アーカイブズ管理の実際：

とみおかアーカイブ・ミュージアムを見学して「とみおかアーカイブ・ミュージアム」（以下、本施設とする）は、東日本大震災及び原子力災害による被災に関する記録と継承のみでなく、富岡町の歴史、民俗、震災遺産に関するアーカイブズを収集、整理、保管および展示等を行う施設である¹⁷。1980年代以降町史編纂が行われておらず、震災により町の歴史を伝える資料が消失する可能性が高まった。また、震災により公文書も「歴史的公文書」に該当する可能性が高いことから、本施設への移管も視野に公文書管理をするようになった。このような特徴をもつ本施設に関連し、町役場の公文書管理と本施設の運営について講義を受け、見学を行った。これらの情報から、特に当館と関連すると筆者が感じた内容を2点紹介する。

1点目は、本施設が展示機能に力を入れていることである。本施設は歴史資料を展示する空間に加え、収蔵庫や資料の整理作業の様子を観覧することができる。この機能は、収集時に関わる対象への情報提供や震災遺産というなじみのない分類に対する社会からの理解に

役立っている。当館は国内唯一の公共の建築資料館として建築業界および社会に認知を必要とする立場である。運営や発信の方法について参考となるのではないかと考える。

2点目は、空間的な資料の記録を行い展示に生かしていることである。富岡市は震災対策本部の空間を記録し、ミュージアムでの部分再現展示を行っている。当館が扱う建築家資料は建築家が事務所等で資料を作成し、当館に寄贈される際は事務所に残されたままの場合がある。特に建築事務所は設計、施工、竣工後記録の業務の流れに沿って系統的に作成される資料だけではなく、アイデアの検討のためのメモやスケッチが含まれる。これらは時間的、空間的な秩序により事務所内に存在する。このような場合は、すべての資料の寄贈移管に関わらず、まずは空間的な関係性を記録・保存することに重点をおくべきではないだろうか。また、このような原資料秩序を考慮した資料整理方法を念頭に置くべきではないだろうか。



図1 臨時に設置された町災害対策本部の再現展示
(とみおかアーカイブズ・ミュージアム蔵、筆者撮影)

注

- 1 飛田ちづる「建築アーカイブズのあり方—令和3年度アーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会）短期コースに参加して—」『国立近現代建築資料館紀要』第2号、文化庁国立近現代建築資料館、2022年
- 2 アーカイブズ・カレッジ終了論文指導教員編集『令和4年度年度アーカイブズ・カレッジ テキスト（史料管理学研修会講義要綱）』人間文化研究機構国文学研究資料館、2022年
- 3 同上、pp.29-33
- 4 同上、pp.47-53
- 5 前掲注1、p.59図1における「受け入れ決定の場合」以前に相当。
- 6 前掲注2、pp.75-80
- 7 前掲注2、pp.30-31
- 8 具体的な事例として、東京都立北区行政資料センターによる巡回燻蒸、新潟県立文書館の出張燻蒸、栃木県立公文書館の古文書保存の相談習慣などがある。これらは、個人で資料を所蔵する所有者には難しい保存処理を代行する補助制度である。（国文学研究資料館編『社会変容と民間アーカイブズ—地域の持続へ向けて—』勉誠出版、2017年、pp.191-263）
- 9 前掲注2、p.32
- 10 当館の収集方針については以下参照。「収集方針」『文化庁国立近現代建築資料館HP』<https://nama.bunka.go.jp/overview/houshin.html>（2023年9月9日閲覧）
- 11 オフィス設計等の業界では一般的にファイルメーター（fm）と呼ばれる。
- 12 資料分類の方法の例としては、図面は設計図・施工図・竣工図などの設計段階やプロジェクトの開始時期ごとなどがある。そのほかにも写真や事務所類も作成時期や利用目的によって分類・保管されることが多い。
- 13 坂倉準三が設立した坂倉建築研究所、前川國男が設立した前川建築設計事務所、大谷幸夫が設立した（株）大谷研究室など。これらはいずれも一部の資料を当館に寄贈または寄贈に向け当館が資料を借用している。
- 14 「特定歴史公文書等の保存、利用及び廃棄に関する定め（利用等規則）一覧」『公文書管理制度—内閣府』https://www.8.cao.go.jp/chosei/koubun/about/kikan/kantou/riyoutoukisoku_ichiran.html（2023年9月19日閲覧）
- 15 「特定歴史公文書等の保存対策方針」2015年、国立公文書館、<https://www.archives.go.jp/information/pdf/hozontaisaku.pdf>（2023年9月19日閲覧）
- 16 藤本貴子、橋本陽「文化庁国立近現代建築資料館における資料デジタル化の取り組みとArchivematicaによるデジタル・データ保存について」『日本写真学会誌82巻1号』日本写真学会、2019年
- 17 とみおかアーカイブ・ミュージアム条例（令和3年3月19日条例第3号）

参考文献

- (1) 飛田ちづる「建築アーカイブズのあり方—令和3年度アーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会）短期コースに参加して—」『国立近現代建築資料館紀要』第2号、文化庁国立近現代建築資料館、2022年
- (2) アーカイブズ・カレッジ終了論文指導教員編集『令和4年度年度アーカイブズ・カレッジ テキスト（史料管理学研修会講義要綱）』人間文化研究機構国文学研究資料館、2022年、https://www.nijl.ac.jp/event/img/R4text_short.pdf（2023年9月9日閲覧）
- (3) 国文学研究資料館編『社会変容と民間アーカイブズ—地域の持続へ向けて—』勉誠出版、2017年

（2023年9月20日原稿受理）

建築アーカイブズ研修映像教材の制作（令和 3、4 年度）

田良島 哲*

Production of Visual Education Materials for Learning Archives of Architecture (2021, 2022)

TARASHIMA Satoshi

Due to the pandemic of COVID-19, it became impossible to hold a training course for archivists organized by the National Archives of Modern Architecture(NAMA) in 2021. Instead, NAMA produced two video programs of specialists' lectures streamed on the Internet. Streaming video programs can be not only an alternative way to face-to-face lectures for specialists, but also an effective measure to spread basic knowledge about archives of architecture to non-specialists who are interested in the management of materials related to architecture. NAMA has created another program in 2022 and is planning to continue this project.

キーワード：建築アーカイブズ、映像教育、新型コロナウイルス感染症
Archives of Architecture, Visual Education, COVID-19

1. 制作のきっかけ

国立近現代建築資料館（以下「当館」という）では、令和元年度（2019）から、近現代建築資料の保存と活用に関する知見を広めるため、博物館・美術館や大学など建築資料を取り扱う機会のある機関を主な対象として、建築アーカイブズ講習会の開催を始めていた。ところが、令和2年度になって、新型コロナウイルス感染症（以下「感染症」）の流行により、開催に関する事務の執行や参加者の集合は著しく困難となった。同年度の講習会はかろうじてオンラインと対面を併用する形で10月に開催したものの、それ以降、感染症流行状況の見通しはたてづらかった。対面での開催を計画していても流行が盛んとなり、勤務や参加者の移動に制限がかかれば、短期間で大幅な内容の見直しを迫られる。また館職員の体制も感染症の影響を受けて、数少ない職員の中から講習会を開催するための人手を割く余裕に乏しい状況が続いた。

とは言え、建築資料の保存活用を標榜する国立の組織として、何らの情報発信も行えないのでは面目がない、ということで代替案となったのが、インターネットで配信する映像教材の制作である。

映像教材を制作、配信するメリットとしては、人数や場所の制限なく、教材を配布すること、技術的な工夫によって、よりわかりやすい内容や構成の教材を作れる

こと、などがあげられる。また感染症流行の収束以降であっても、配信を継続することで、当館からの情報として普及できるので、単なる緊急時の対応以上の情報資産となることが期待された。

この点について、当館には有効な過去の経験があった。開館以来、図面や書類の収集と並行して、建築家自身をはじめとする建築関係者の肉声を収録し、保存するオーラルヒストリーの事業を蓄積していたのである。

映像・音声機器が広く普及し、誰でもがデジタル映像や音声を作成することのできるようになった現代ではあるが、正確な情報が記録され、一般に見やすく、聞きやすいデータを作成するためには、専門的な知識、技術と経験が必要である。当館では過去10年間にわたり、すぐれた映像制作者の助力を得て、高品質の映像記録を制作してきた。また令和3年度に開催された「丹下健三」展では、感染症対応もあって展示やシンポジウムなどの映像収録も行っていたので、映像による教材作成の発想は、館内で違和感なく受け入れられるものであった。幸い、講習会に見込んでいた経費を、映像制作に振り替えることも問題なく認められたので、令和3年度夏から、制作の準備にかかることになった。

2. 令和3年度の事業

最初の教材として世に出すものとしては、予備知識

*東京国立博物館特任研究員、前国立近現代建築資料館主任建築資料調査官

の少ない視聴者でも理解しやすい内容であることを、まず考慮した。「アーカイブズ」という言葉が、必ずしも社会的に適切な理解をされているわけではない現状から、まず(A)「アーカイブズ」の概念を解説するものと、そこから(B)「建築アーカイブズ」の概念、意義を解説するものの2本の教材が必要と考えた。

(A)については、アーカイブズ学の専門家が最適任であり、この分野の第一人者で日本アーカイブズ学会会長でもある、保坂裕興(ほさかひろおき)学習院大学大学院人文科学研究科教授にプレゼンテーション形式での講義をお願いし、快諾を得た。

(B)建築アーカイブズについての講義は、建築の専門家に依頼することも検討したが、現在のところ、建築資料を専門的に取り扱う組織は少なく、しばらくの間、建築資料に取り組むのは、もっぱら博物館や美術館の学芸員であることが予想されるので、美術館等の業務に理解のある講師が望ましいと考えられた。そこで候補として国立西洋美術館の田中正之(たなかまさゆき)館長に打診したところ、こちらも快諾をいただいた。

田中館長は、西洋美術史の専門家であるが、前任の武蔵野美術大学で芦原義信建築アーカイブの構築に携わった経験があり、企画の趣旨をご説明したところ、すぐに理解をいただいたばかりでなく、参考資料として、芦原義信建築アーカイブの所蔵資料の取材と撮影を行うことについて、武蔵野美術大学へ紹介の労をお取りいただいた。さらに、国立西洋美術館の所蔵するル・コルビュジェ設計の本館建築関係資料の撮影も許可されたのである。映像の撮影と編集に当たったのは、映画監督の青山真也氏である。

保坂教授の教材は、プレゼンテーションソフト利用の講義形式であったので、撮影場所として学習院大学の会議室を確保いただき、1月20日に下見を行った後、同月24日に撮影を行った。

芦原義信建築アーカイブを所蔵する武蔵野美術大学美術館・図書館には令和3年12月に、まず下見にうかがい、田中館長も立ち会いのもと、撮影候補とする資料の確認を行った。その上で、令和4年1月20日に図面や模型など、さまざまなタイプの資料とその保存形態についての撮影を行った。撮影に当たっては同大学の北澤智豊氏・沢田雄一氏・本岡耕平氏をはじめスタッフの方々からご助力をいただいた。

次いで、2月4日には国立西洋美術館に下見にうかがい、同8日に田中館長のプレゼンテーションを撮影するとともに、同館が所蔵する本館の設計・施工に関係する資料類の撮影を行った。資料の取り扱いや来歴につ

いては田中館長とともに、同館の福田京氏からご助力とご教示をいただいた。

撮影された素材は、編集作業を経て完成した2本の映像教材として納品された。完成した映像は、令和4年8月に文化庁のYouTubeチャンネルに登録し、公開した。それぞれ、以下のような構成となっている。

■「アーカイブズの基礎」(図1)

(講師：保坂裕興 学習院大学大学院人文科学研究科 教授)

- アーカイブズ — 語源から
- アーカイブズ — 定義と関連語
- アーキビストの誕生 — 16～18世紀
- 記録のライフサイクル論
- 資料管理 — 整理の二大原則
- まとめ — 二大原則が意味すること

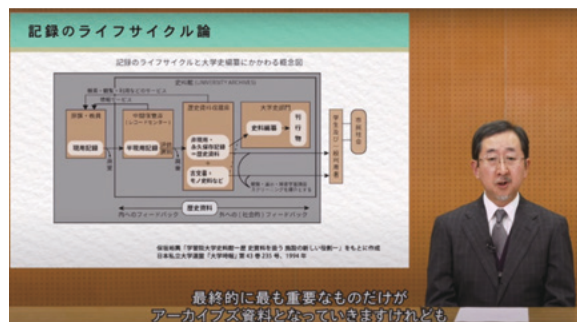


図1 「アーカイブズの基礎」
(保坂裕興氏)

■「造形芸術としての近現代建築：

その資料保存の意義と実践」(図2)

(講師：田中正之 国立西洋美術館長)

- 造形芸術としてのモダニズム(近代主義)建築
 - ▷ 建築とは
 - ▷ 近代建築の5つの要点
 - ▷ モダニズム(近代主義)建築の造形的特徴
- 図面等資料の持つ意味
- 建築アーカイブの実例：芦原義信建築アーカイブ(武蔵野美術大学美術館・図書館)
 - ▷ アーカイブ化に当たっての作業
 - ▷ 諸資料の種類と分類
 - ▷ おもな資料の取り扱い
 - ▷ 建築図面のデジタル化の理由
 - ▷ 図面デジタル化手法選択に当たっての検討事項
 - ▷ 実際に図面デジタル化した画像の仕様
- 建築資料の保存の実例：ル・コルビュジェ関連資料(国立西洋美術館)

▷建設に当たっての資料

- その後の収集資料
- 最後に

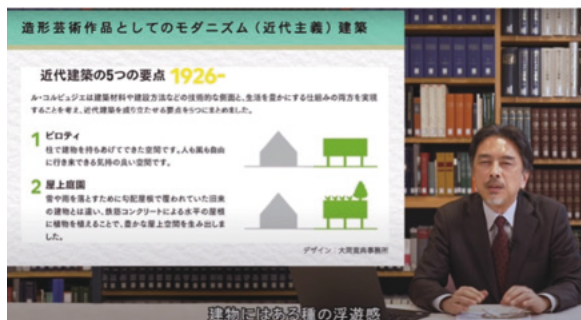


図2 「造形芸術としての近現代建築：
その資料保存の意義と実践」(田中正之氏)

3. 令和4年度の事業

その後もしばらく感染症の流行が続いたことと、館内において映像教材制作の長期的な意義が認められたことの両面から、令和4年度も映像教材の制作を行うこととし、他業務とのかねあひも考慮して教材1本の制作となった。

前年度の教材が、基礎的な知識の理解を主な目的としていたので、4年度は具体的な建築資料に即した内容にしたいと考えた。館内で資料を取り扱う職員の間で、図面をはじめとする資料の損傷状態について話題となることが多く、素材である紙の損傷について、情報を集約して紹介することは意義があるのではないかということになり、紙を中心とした資料の損傷に関する教材の企画に着手した。

できるだけ資料の実態を紹介することが必要であるので、今回は講義形式ではなく、当館の所蔵する資料の実際の損傷状況を映像で示し、損傷に対してどのように対応するべきかについて、専門家のコメントを求めるという形式を選択した。そこで、各資料取り扱い担当職員から、さまざまな形態の建築資料の損傷に関する情報を求め、ある程度の類型化を行って映像で紹介するシナリオの案を準備し、これに対して、紙資料の保存を専門とする東京藝術大学大学院美術研究科の貴田啓子(きただけいこ)准教授にコメンテーターをお願いした。

前年度に続いて青山真也氏が撮影と編集を担当し、あらかじめ全体のシナリオ案を館側と協議した上で、資料自体の撮影とコメンテーターへのインタビュー撮影とを日を分けて実施した。また今回は、資料の映像に対して説明が必要となったため、ナレーターを依頼した。

令和5年2月7日、貴田准教授にも立ち会っていただき、紹介する資料の撮影を行った。撮影をした結果、シナリオの構成を多少見直し、続いて2月16日に貴田准教授のインタビューと、ナレーションの収録を行った。その後、若干資料の追加撮影を行った上で編集作業に入り、3月末に完成した映像の納品を受けて、6月に文化庁 YouTube チャンネルで公開した。全体の構成は以下のとおりである。

■建築資料の損傷と保存(図3、4)

(コメンテーター：貴田啓子 東京藝術大学大学院美術研究科 准教授)

- 建築資料に使われる紙
 - ▷感光紙
 - ▷和紙
- 建築資料はどのように傷むか
 - ▷保存環境
 - ▷光
 - ▷取り扱いによる損傷
 - ▷紙のしわや折れ
 - ▷断裂
 - ▷錆

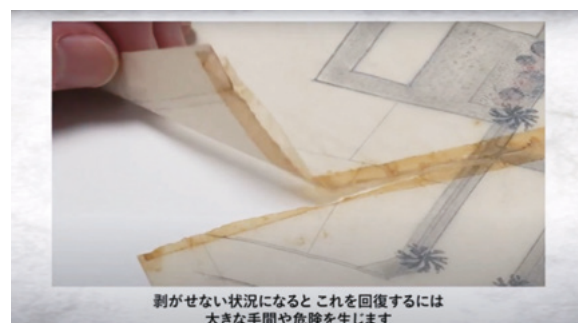


図3 建築資料の損傷と保存
(損傷状況の説明)



図4 建築資料の損傷と保存
(貴田准教授コメント)

▷補修が原因となる傷み

- 傷みの発生と拡大を防ぐには

▷貴田准教授コメント

- まとめ

4. 成果と留意点

感染症流行をきっかけとする、いわば追い込まれた形で始めた事業であったが、着手してみると、多面的な有効性があることを確認できた。

第一には、当初予想したように、映像教材として制作することにより、長期的に活用できる館の情報資産となったことである。今後は、対面の研修と蓄積した映像教材による個人学習とを住み分けることで、より効果的な専門的研修のプログラムを作ることができるのではないかと考えている。

第二には、令和4年度の教材制作過程で示したように、職員が館内の業務で得た知見を教材の中で映像化することで、職員自身の経験に留まらず、広くアーカイブズ業務での共有できる課題として蓄積する場となりえる点があげられる。

第三に、講師、コメンテーターや取材先と意見交換し、協力する中で、当館の活動に対して理解をいただくとともに、相手方の皆様からも、ご自分の専門について得るところがあったというお言葉をいただく機会があった点である。建築資料の保存活用は、多分野にわたる連携が必要であり、少しでも関係者の相互理解が進む場を設けるのは、望まれることである。

以下、制作に携わってみて留意すべきと考えた点を、いくつか述べておきたい。

感染症流行以後、リモート会議の利用環境が急速に発達し、この種の講演や会合の記録として、リモート会議のプラットフォームが提供する映像保存の機能を使ってデータを保存し、これを公開することが多くなっている。無論、内容の迅速で正確な記録を目的とするのであれば、これで実用には耐える。

しかし、教材として多くの人に視聴を促し、興味を持続してもらうためには、可能なかぎり映像コンテンツ全体の品質を高めるよう配慮することが望まれる。映像にせよ、音声にせよ、見づらい、聞きづらいというのは、視聴する人が関心を維持して、知識を取得する妨げとなる。資料撮影に当たっての写角や照明、編集に際しての画像の切り替えや解説の入れ方といった細かい点の差が、円滑な理解に影響することは、2年間、撮影と編集の過程を共有して、強く感じたところである。またそのような配慮がなされた映像は、長期にわたって知

的資産として役立てることができる。

当館ではオーラル・ヒストリーの作成を通じて、良質な映像を得るノウハウを継承しており、今回の事業でも活かされたものと思う。

建築資料を扱う映像を制作する場合、利用する図面や写真は著作権の保護期間内である場合が多い。当館の場合、館に寄贈された資料については著作権の譲渡を受けているため、さしつかえを生じることは少ないが、往々にして著作権者(特に写真)の許諾を必要とする場合がある。シナリオ内で利用する図や画像については、個別に確認しながら、制作を進めなければならない。

また、いずれの教材も講義、コメント、ナレーションの全体にわたって文字起こしによるテロップを入れている。さまざまな視聴環境にいる利用者の立場を考えると、不可欠だと強く感じた。

各教材URL

「アーカイブズの基礎」

<https://youtu.be/7mCj4hKK8-s?feature=shared>



「造形芸術としての近現代建築」

https://youtu.be/r1kx_atdcpE?feature=shared



「建築資料の損傷と保存」

<https://youtu.be/NclPMavDHao?feature=shared>



(2023年8月9日原稿受理)

令和4年度 国立近現代建築資料館 活動報告

Annual Activity Report of NAMA, 2022 (Reiwa 4) fiscal year

文化庁国立近現代建築資料館

I. 資料の調査・保管等

(カッコ番号は各資料のフォンド番号)

1. 各資料の作業

各資料について、次のとおり調査から保管までの業務(資料調査、資料受入、契約解約、返却、資料整理・研究、目録作成、デジタル撮影、燻蒸、修理、資料利用等)を行った。

(1) 坂倉準三建築設計資料

■ 概要

資料整理については、昨年度からの継続作業として、これまで作成した目録データの公開に向けて順次整備、書式の変更等作業を行った。

■ 資料整理・目録作成

寄贈資料の内容を反映した階層構造に従い、公開用目録の作成手順を更新し、写真資料の目録整備及びデジタル化を進めた。

(2) 丹下都市建築設計所蔵マイクロフィルム

■ 資料調査

資料閲覧にともない、目録と画像データの不一致の確認、閲覧における被覆の必要性の確認(日南文化センター、墨会館等)を行った。令和5年度には特例による画像の大量提供のために、同様の作業を継続して進める予定である。

(3) 藤森照信旧蔵東京大学生産技術研究所建築史研究資料

■ 概要

借用中の資料について収蔵に向け概要の調査を行った。

■ 資料整理・目録作成

資料についてファイル単位の日録を作成し、資料作成者の調査と分類を行った。これをもとに令和5年度以降は収蔵に向けた資料群の整理を行う予定である。

(7) 村田豊建築設計資料

■ デジタル化

図面資料ファイル1~48について資料番号と画像番

号の対応表を作成した。

(8) 吉阪隆正+U研究室建築設計資料

■ 資料整理・目録作成

前年度に不備が判明した2ファイル分のアイテムレベルの日録を追加作成した。

■ 保存管理

東京都現代美術館「吉阪隆正展 ひげから地球へ、パノラミル」展貸し出し資料の返却を受け、点検と所定アドレスへの保管を行った。

■ 公開

建築文化に関する検討会議第1回(2023年3月9日)の開催に際し、「近藤邸(ヴィラ・クウクウ)」の一部資料の限定公開を実施した。

(10) 大高正人建築設計資料

■ 収集(第2回・第3回寄贈契約分)

昨年11月に寄付申し込みを受領した。第2回・第3回寄贈契約に向けて、準備を進めている。

■ 資料整理・目録作成(=第1回寄贈契約済み分)

約60ファイルのアイテムレベルの日録を作成した。次年度に向けて一部図面資料のフラットニングと採番を行った。

■ 保存管理

前年度のデジタル化作業を経て返却を受けた資料を所定アドレスに保管した。目録作成の進んだ一部図面のアドレスを変更し、調査作業スペースの効率化を図った。

(13) 渡辺仁資料

■ 概要

適切な環境で資料を保管し、資料利用に込えている。

(15) 菊竹清訓建築設計資料

■ 概要

令和2年度に借用した1970年代前半の図面資料について寄贈手続きに向けた資料の確認作業を継続し、完

了した。

■ 委託事業等

当該資料の整理をより効率的かつ適切に行うため、1970年代図面資料の整理を、斎藤信吾建築設計事務所へ委託した。

さらに、今後の菊竹清訓資料の収集計画策定のため、現状調査業務を早稲田大学理工学術院古谷誠章研究室に委託した。

■ 資料整理

寄贈済み資料については、閲覧等利用の申請があったものから目録を作成し、デジタル化作業を実施した。借用資料については、令和3年度に引き続きフラットニング及び資料番号の付与を中心に整理作業を進め、すべての資料についてこれを完了した。

■ 菊竹清訓建築設計資料のアーカイブズ構築のためのアドバイザー・コミッティー

3月23日にアドバイザー・コミッティーを対面（一部 Zoom）で開催した。菊竹資料の総量やこれまでの資料整理の状況、今年度の資料整理内容と資料の活用状況の報告を行い、今後の菊竹資料の継承に向けた意見交換を行った。

出席者：スミス睦子（情報建築）、菊竹雪・菊竹三訓（菊竹家）、原田鎮郎・塚本二郎・内藤廣・原田敬美・伊藤豊雄・仙田満*（菊竹事務所元所員）、古谷誠章・小岩正樹・池田理哲（早稲田大学）、斎藤信吾（東京理科大学・菊竹資料委託作業総括）、松隈洋*（京都工芸繊維大学）、戸田譲*（昭和女子大学）、吉野孝行・大宮司勝弘・高瀬道乃（国立近現代建築資料館）

*：オンライン参加

■ デジタル化

寄贈された資料のうち、約2,000点の図面資料の基本画像（400dpi）と閲覧用画像（200dpi）を作成した。

(16) 川添登資料

■ 資料確認・整理

贈与契約に向けて資料の整理、数量確定、概要目録作成等を進めた。

(17) こどもの国建築関係資料

■ 資料整理・目録作成・デジタル化

本年度の展示企画にあわせ、本資料群の中でも特に図面情報を含む資料について抽出し、アイテム目録の作成とデジタル化を行った。当該資料はすべて複写資料のため、同一資料の複写なのかについても情報を整理し、目録に記載を行った。

(19) 平田重雄資料

■ 資料整理・目録作成

寄贈契約に含まれない書誌についての点検及び館内図書登録を完了した。

■ 保存管理

図面、写真等の資料の点検と所在確認を行った。

(20) 岸田日出刀資料

■ 資料整理・目録作成

図面資料（20-1-1～81）と、個人資料（20-2-1～82）からなる。目録未作成であった個人資料のうち1ファイルのアイテム目録を追加作成した。

(23) 高橋訃一・第一工房資料

■ 資料調査

第3期の贈与契約に向け、アイテム番号の付与及びファイル目録作成を進めた。

■ 資料整理・目録作成

第1期第2期贈与契約分資料について、アイテム目録の作成、デジタル化を進めた。

■ 保存・保管

資料の形態、大きさを考慮し、包材及び容器に入れ替えた。

(24) 前川國男建築設計資料

■ 資料整理・デジタル化

閲覧希望があった図面資料及び写真資料について、目録の作成及びデジタル化を行った。

(25) 原広司+アトリエ・ファイ建築設計資料

■ 資料調査・目録作成

目録作成を6,700件（図面資料）+2,600件（スケッチ資料）程度進めた。デジタル化は4,200件程度行った。令和4年12月からの原広司展に関する資料を優先的に作業対象とした。

■ 第2次寄贈に向けた手続き

令和5年度中の第2回寄贈契約に向けて、主にスケッチ資料の資料調査及び員数確認を行い、員数確認はほぼ完了した。

(26) シュパイデル旧蔵ブルーノ・タウト関連資料

■ 資料調査

贈与契約に向け、アイテム番号の付与及びファイル目録作成を進めた。

■ 資料整理・目録作成

アイテム目録の作成、デジタル化を進めた。

■ 保存・保管

資料の形態、大きさを考慮し、包材及び容器に入れ替えた。

(27) ヴァスマート社旧蔵吉田鉄郎関連資料

■ 資料調査・目録作成

アイテム目録作成とりまとめ作業を進めた。また、一部資料のデジタル化を進めた。

(28) 安藤忠雄初期建築資料

■ 資料調査

第1期の贈与契約に向け、アイテム番号の付与及びファイル目録作成を進めた。

■ 資料整理・目録作成

ファイル目録・アイテム目録の作成、デジタル化を進めた。

■ 保存・保管

資料の形態、大きさを考慮し、包材及び容器に入れ替えた。

■ 資料搬送

令和4年3月に第1期寄贈分の当館への搬送を完了した。

■ 寄贈契約

9月10日に第1回寄贈契約を締結した。引きつづき公開準備を行う。

(29) 篠井家旧蔵吉田鉄郎城端郵便局資料

■ 資料調査

贈与契約に向け、ファイル目録・アイテム目録を作成した。

■ 寄贈契約

8月10日に寄贈契約を締結した。引きつづき公開準備を行う。

(30) 堀口捨己資料

■ 資料運搬

令和4年3月に東京工業大学及び明治大学に所在する資料について調査を行い、当館への借用、移送を行った。

■ 資料調査・目録作成

堀口アーカイブズの研究成果をもとに、資料のファイル及びアイテム単位の目録の概要を作成した。寄贈契約に向け、これをもとに令和5年度に員数確認を行う予定である。

(32) 大谷幸夫建築設計資料

■ 資料の概要調査

資料の内容及び数量の調査・確認をした。大谷研究室及び施主の希望により一部作品は移送から除外された。

■ 資料受入れに向けた手続き

設計事務所退去という緊急性を鑑み、令和5年2月開催の第21回運営委員会メール審議で資料の詳細を説明し、全会一致で収集相当の承認を得た。これを受けて資料を借用し、令和5年3月23・24日に資料館に移送した。今後収蔵契約に向けて整理作業を進める。

■ 資料調査

寄贈契約に向けて、まず資料の全体像を把握することと、資料全体の体積を減らすことを目的として簡易目録の作成を行っており、図面ファイル資料に関してはおおむね完了した。

2. 新規受入資料の概要

(26) シュバイデル旧蔵ブルーノ・タウト関連資料

ブルーノ・タウト(1880–1938)は1933年5月3日に来日、各地を歴訪し、桂離宮はじめとした日本建築を高く評価し、日本建築や日本の文化に関する書籍を著すとともに、旧日向氏別邸のインテリアデザインなどの活動を行った。1934年からは高崎に移住し、井上工業研究所の顧問として工芸製品のデザイン、制作指導を行っている。

マンフレッド・シュバイデル氏から寄贈された当資料は、タウトが高崎に在住した時の活動に関わるものである。タウトは工芸製品のスケッチを描き、水原徳言氏ら井上工業研究所の日本人スタッフが実施制作のために図面を書き起こした。図面にはタウトのサインや印鑑があるものもある。1986年に庄子晃子氏がこれらの図面239点の写真を撮影し、リストを作成した。1986–88年頃、シュバイデル氏は水原氏より、一部の青焼図面126枚と、前述の庄子氏作成の写真の紙焼とそのリストを譲り受けた。シュバイデル氏が譲り受けた青図126枚は水原氏所有の図面の一部であり、庄子氏が作成した写真紙焼資料239枚及びそのリストは、水原氏所有図面の全貌を示している。また、タウトがこれらの家具・日用品をデザインした折の日記・忘備録のコピー及びそれを水原徳言氏の兄・徳恒氏が日本語訳したもののコピー、シュバイデル氏作成のドイツ語目録4冊も併せて寄贈を受けている。

(28) 安藤忠雄初期建築資料

安藤忠雄(1941-)は、国内では1979年の日本建築学会賞をはじめとする数多くの受賞歴を持ち、2010年には文化勲章を受章、海外では1885年のアルヴァ・アアルト賞、1995年のプリツカー賞、2005年のUIAゴールドメダルの受賞など、国内外で高い評価を得ている建築家である。

収集対象資料の全体は、安藤忠雄設計の作品群の図面から構成され、1990年代までの安藤忠雄作品の包括的資料となっている。本年度は、第1期として、住吉の長屋、水の教会などを含む初期作品、31ファイル1,364点の寄贈を受けた。

(29) 篠井家旧蔵吉田鉄郎城端郵便局資料

吉田鉄郎(1894-1956)は、富山県東礪波郡福野町に生まれ、大正8(1919)年に東京帝国大学を卒業後、逓信省営繕課に入省、昭和20(1945)年の退職まで多くの逓信省の建築を設計した。代表作に東京中央郵便局、大阪中央郵便局などがある。

当資料は、城端郵便局第四代局長篠井多喜雄が同郷である吉田鉄郎に設計を依頼し、その関連資料が篠井家に伝承されたものである。城端郵便局に関する吉田鉄郎の設計資料は、当館が吉田鉄郎資料として保有する(青図が当該資料に含まれる)原図1枚を除いて、当該資料以外に発見されていなかった。篠井家には、現存時の同郵便局に関する写真や手紙が伝承されている。写真については、寄贈者の意向により現物は寄贈対象とはならなかったが、参考資料として同資料のデジタルデータを当館と情報共有し、公開する許可を得ている。したがって、総量としては青焼図面5点、吉田鉄郎からの手紙(指示)、写真(データ)の寄贈を受けた。

(31) 樋口清旧蔵吉田鉄郎蔵書LE CORBUSIER-SAUGNIER, *Vers une architecture* (初版)

本書は、東京中央郵便局などの設計で知られる吉田鉄郎の蔵書を、樋口清が譲り受けたものである。吉田鉄郎に関する資料は、吉田鉄郎が当館の収集方針にかなう建築家であることから受け入れ相当と判断された。

加えて本書は日本の近代建築の展開に大きな影響を与えたル・コルビュジエの著作「Vers une architecture」の初版としても大変貴重な資料である。本書の初版は出版期間が短く刊行数が少ないだけでなく、初版出版後、第2版出版に際して多くの変更が加えられていることから、その間のル・コルビュジエの思想を知る上でも貴重な資料となる。

樋口清氏は2018年に逝去され、散逸の恐れがあり、当館が所蔵することとした。

II. 展示・教育普及

1. 展覧会

令和4年度は、「『こどもの国』のデザイン——自然・未来・メタボリズム建築 [併設] 新規収蔵資料紹介」展、並びに「原広司 建築に何が可能か—有孔体と浮遊の思想の55年—」展を開催した。並行して、令和5年度の10周年を記念する展覧会の企画立案を行い、運営委員会及び企画小委員会の手承を得た。

(1) 「こどもの国」のデザイン

——自然・未来・メタボリズム建築

[併設] 新規収蔵資料紹介

■ 開催概要

タイトル

「こどもの国」のデザイン——自然・未来・メタボリズム建築

Kodomonokuni Children's Land-Nature, Future and Metabolism Architecture

趣旨

「こどもの国」(横浜市青葉区)は、1965年5月5日に開園した児童厚生施設。多摩丘陵に広がる約100haの自然豊かな土地を生かして子供の遊び場をつくるという発想は、その後の類似施設の先駆的モデルとなった。「こどもの国」の設計者の多くは、メタボリズム(新陳代謝という意味)という建築家・芸術家グループの結成にかかわり、生物が新陳代謝するように成長するという建築思想を掲げ未来都市像を発展させていった。こどもの国は、その後の日本の建築界を担うことになる建築家たちが若々しい発想力を発揮し、子供の未来のための施設デザインに取り組んだ場所である。

本展では、当資料館が近年収蔵した資料群7件を紹介展示するコーナーを設けて、収蔵資料の公開も行った。

[主催] 文化庁

[協力] 公益財団法人東京都公園協会

[会場] 文化庁国立近現代建築資料館

(東京都文京区湯島4-6-15湯島地方合同庁舎内)

[会期] 2022年6月21日(火)~8月28日(日)

10:00-16:30

休館日: 毎週月曜日(但し、7月18日[月・祝]は開館し、7月19日[火]休館)

■ 会場構成

1) 「こどもの国」のデザイン

浅田孝が計画した当時のゾーニングに準じて作品展示を行った。

【A 地区】

皇太子記念館 | 浅田孝 1972

A 地区児童遊園・児童館 | イサム・ノグチ、大谷幸夫 1968

【B 地区】

自然プール | 浅田孝 1964

セントラルロッジ | 黒川紀章 1965

アンデルセン記念の家 | 黒川紀章 1965

【C 地区】

フラワーシェルトー | 黒川紀章 1964

修学旅行宿舎 | 大高正人 1964

【D 地区】

交通訓練センター | 鈴木彰 1965

林間学校 | 菊竹清訓 1967

【アンビルト計画】

野外劇場 | 浅田孝 1962

キャンプ場 | —

公衆便所 | 黒川紀章 1966

会場内では現状の様子を挟んだスライドショー、ロビーでは登場する建築家の他の代表作を合わせて紹介する動画を放映。上記資料のほか、収蔵資料のパンフレットやこどもの国が特集された本などを展示した。

2) 併設：新規収蔵資料紹介

- ・岸田日出刀建築資料
- ・駒田知彦旧蔵坂倉準三関連資料
- ・村田豊建築設計資料
- ・木村俊彦構造設計資料
- ・角田栄資料
- ・ヴァスマート社旧蔵吉田鉄郎著作資料
- ・篠井家旧蔵吉田鉄郎城端郵便局資料

■ メディア掲載

新聞

- ・毎日新聞 2022年6月30日 夕刊
- ・東京新聞 2022年7月8日

雑誌

- ・ディテール 2022年7月号 PR3
- ・日経アーキテクチュア 2022年8月11日号 p.96
- ・新建築 住宅特集 2022年8月号 p.151
- ・建築技術 2022年9月号 p.183

・ブレーン 2022年9月号 p.123

WEB

BUNGA NET Fashion Press JDN KENCHIKU
Tokyo Art Beat (前編 後編) 新建築 ONLINE
THE HERITAGE TIMES YOKOHAMA KANAGAWA
(前編 後編)

■ グラフィックサイン図・フライヤー・図録のデザイン 体裁・部数：ポスター /B2縦 500部

チラシ /A4縦両面 30,000部

ハガキ /長3縦 1,000部

図録 /B5横 3,000部

■ 来場者数

日数	正門	岩崎邸	計
60日	38日 / 60日	60日 / 60日	—
—	808人	2755人	3563人
—	23%	77%	—

(2) 原広司 建築に何が可能か

—有孔体と浮遊の思想の55年—

■ 開催概要

タイトル

原広司 建築に何が可能か —有孔体と浮遊の思想の55年—

What is Possible in Architecture? 55years of Ideas
About Yukotai(Porous Bodies) and Floating

趣旨

建築家・原広司は、東京大学で28年に渡り教鞭をとりながら、個人住宅から美術館、教育施設、駅舎、超高層建築、ドーム建築などの大規模建築に至るまで幅広い建築作品を創り出してきた。また原による数学、哲学、芸術をはじめとした多様な視点からの建築に関する思索は、日本の現代建築の発展を大きく牽引した。1967年の著書『建築に何が可能か』における「有孔体」と「浮遊」の思想に始まる原の思想は、その後、反射性住居、多層構造、機能から様相へ、集落の教え、離散的空間など多彩な建築概念に発展し、現代建築に計り知れない影響を与えた。

本展覧会では、近年、原広司+アトリエ・ファイ建築研究所から国立近現代建築資料館に寄贈された建築資料群の中から、「有孔体」と「浮遊」というテーマの展開を示す図面とスケッチを、年代を追いながら展示した。原の作品の根源であるこのふたつの発想が、住宅から

大規模建築、都市に至るまで、いかに具現化し発展したかを「思想：オブジェ、イメージ図、著作物」、「構想：スケッチ」、「実想：設計図面」という3つの「想」による展示を通して構成した。

[主催] 文化庁

[協力] 公益財団法人東京都公園協会

[会場] 文化庁国立近現代建築資料館

(東京都文京区湯島4-6-15湯島地方合同庁舎内)

[会期] 2022年12月13日(火)～2023年3月5日(日)

10:00～16:30

休館日：毎週月曜日 *ただし1月9日(月・祝)

は開館し1月10日(火)は休館(2022年12月26

日(月)～2022年1月4日(水)は年末年始休館)

■ 会場構成

1. 有孔体と浮遊の思想の誕生 1960年代
伊藤邸(1967)、慶松幼稚園(1967)
2. 反射性住居と世界の集落調査 1970年代
原邸(1974)、ニラム邸(1978)、工藤山荘(1976)
3. 公共建築と様相論 1980年代
田崎美術館(1986)、飯田市美術博物館(1988)、ヤマトインターナショナル(1986)、那覇市立城西小学校(1987)、内子町立大瀬中学校(1992)
4. 巨大建築での有孔体と浮遊の実現 1990年代
新梅田シティ・スカイビル(1993)、JR京都駅ビル(1997)、宮城県図書館(1998)、札幌ドーム(2001)
- X. コンペティションとイマジナリー
500M×500M×500M(1992)、ピエモンテ州新庁舎設計競技(2000)、実験住宅モンテビデオ(2003)

現物展示しないスケッチ及び図面約100点をスライドショー形式で展示した。

アトリエ・ファイ(原広司の事務所)新規作成の模型を展示：2021年に取り壊された伊藤邸(1967)の壁面に飾られていた有孔体レリーフを中心に据え、原広司の代表作の主要空間や建築概念を抽出・混在させて、混成系の光景を創出したコンセプト・モデルを原自らが作成し、それを展示した。

原広司オーラルヒストリー：動画映像により原広司本人に対する聞き取りを行った映像コンテンツを、展示室及びロビーの2か所で展示した。

ロビーにおける柱展示：ロビーでは一部作品の写真を柱に展示し、あわせて平易な言葉で原の思想を紹介することで、原広司をはじめて知る観覧者に対して

理解を促進させることを目指した。

ガイドツアー：原の建築理念や各作品の位置づけ、さらにはスケッチの描かれた意図等を解説する展示を補強するガイドツアーを行った(週2回、各回50分、15名程度)。参加希望者が多い場合(20～30名)は、建築関係者とそれ以外の2班に分かれてツアーを行っている。最大で60名の参加があった。

ギャラリートーク：展覧会イベントとして、原広司本人と、原研究室出身の宇野求(昭和29年(1954)–)竹山聖(昭和29年(1954)–)を交えて、展示模型を囲んでディスカッションを行い、その様子を撮影し、館内にてオーラルヒストリーと併せて放映した。

オンラインコンテンツ：オーラルヒストリー動画を再編集し、関係者メッセージや会場の様子を挿し込んだ動画コンテンツとして文化庁 Youtube にアップロードした。

■ メディア掲載

雑誌

- ・美術の窓 2022年12月号 p.101
- ・建築画報 2022年12月号 p.130
- ・日経アーキテクチュア 2023年1月12日号 p.88
- ・建築技術 2023年3月号 p.159
- ・ブレーン 2023年3月号 p.123
- ・新建築 2023年2月号 p.21
- ・毎日新聞 2023年2月22日 夕刊
- ・読売新聞 2023年3月1日 朝刊
- ・新建築 住宅特集 2022年10月号 pp.80–89
- ・朝日新聞 連載「語る——人生の贈りもの 原広司」、1月30日、31日、2月1日、2日、3日、6日、7日、8日、9日、10日、14日、15日、16日、17日付 いずれも朝刊

WEB

FASHION PRESS Padograph TECTURE MAG
architecture photo 新建築オンライン
BUNGA NET JDN COMFORT TOKYO
ART BEAT This is Media

■ 関連業務：資料のデジタル化

図面及びスケッチ資料 どちらも2,000枚程度、計約4,000枚

主に今回展示した作品を選定したが、ほかに相鉄文化会館、武蔵野女子大学グリーンホール、秋田県営住宅新屋団地、鳥羽海の博物館、森工房など、今回未展示の作品もデジタル化を行った。

■ グラフィックサイン図・フライヤー・図録のデザイン
体裁・部数：ポスター /B2縦 400部

チラシ /A4両面 20,000部

図録 /B5横 3,000部+1,000部(増刷)：
増刷分含め、保管用除き全て頒布

■ 来場者数

日数	正門	岩崎邸	計
64日	41日／64日	64日／64日	—
—	2,840人	8,361人	11,201人
—	25%	75%	—

(3) 展覧会準備

令和5年度に向け、展覧会の企画立案を進めた。令和5年度は、設立10周年を迎えるにあたり、記念特別展として2部構成の展覧会を開催する。以下、現時点での企画概要を掲載する。

文化庁国立近現代建築資料館 [NAMA] 10周年記念
アーカイブズ特別展 日本の近現代建築家たち(仮)

■ 趣旨

文化庁国立近現代建築資料館 (National Archives of Modern Architecture [略称 NAMA]) は、平成24(2012)年11月に設置が決定され、平成25(2013)年5月に開館し、設立10周年を迎える。NAMAは、収集、展示、情報公開という3つの柱で活動を行ってきた。これまでの収集資料群は30を超え、手書き図面を中心として20万点以上の建築資料を収蔵した。設立10周年に際して、NAMAがこれまでに収集した日本の名作近現代建築に関する「生の資料」の大公開を行う。併せて、近現代建築資料館の10年の活動の軌跡を紹介し、建築資料館の活動内容、社会的役割や存在意義を、社会に広めることを目指す。特に、一般の方々(中高生含む)向けの内容を充実させ、社会的認知度を広める。

■ 開催時期

前半：2023年7月下旬～10月中旬、後半：2023年11月上旬～2024年2月上旬

■ 展示対象候補建築家(カッコ番号はフォンド番号)

1. 坂倉準三(1)：1901-1969
2. 丹下健三(2)：1913-2005
3. 吉阪隆正(8)：1917-1980

4. 大高正人(10)：1923-2010
5. 菊竹清訓(15)：1928-2011
6. 吉田鉄郎(18)：1884-1956
7. 岸田日出刀(20)：1899-1966
8. 高橋就一(23)：1924-2016
9. 前川國男(24)：1905-1986
10. 原広司(25)：1936-
11. 安藤忠雄(28)：1941-
12. 大谷幸夫(32)：1924-2013

2. 資料提供

(1) 現物(貸出先：貸出資料 用途)

・令和4年度の現物資料については、貸し出しはなし。

(2) 画像(貸出先：貸出資料 用途)

- ・団体：丹下マイクロ(今治市市民会館)/展覧会でのパネル展示及び関連書籍への転載『TANGE から建築を学ぶ者への出題 都市のコア——今治市庁舎広場』4点
- ・個人：渡辺仁(晩年の渡辺仁肖像写真 他)/学術的調査研究13点
- ・個人：岸田日出刀(1936_BERLIN_OLIMPIC)/学術的調査研究21点
- ・団体：菊竹清訓(石橋文化センター音楽堂 他)/所有者による維持管理を目的とした保護活動のための調査9点
- ・個人：大高正人(自動車労連日産労連)/所有者による改修工事のため図面関連1式
- ・団体：坂倉準三(羽島市庁舎関連)/所有者による解体・改修工事のため170点
- ・団体：坂倉準三(羽島市勤労青少年ホーム及び羽島市民会館)/所有者による改修工事のため167点
- ・個人：吉田鉄郎(馬場氏牛邸)/建築討論WEBへの記事掲載のため『日本建築学会内建築討論』2点
- ・団体：吉田鉄郎(映像資料 近代——モダニズムと伝統の架け橋のオーラルヒストリー)/有形文化財登録のための企画にて展示放映1点
- ・個人：坂倉準三(国立西洋美術)/会誌への掲載のため『コンクリート工学』2点
- ・企業：坂倉準三(新宿西口広場及び地下駐車場)/出版物への掲載のため『小田急百貨店の展覧会——新宿西口の戦後50年』4点
- ・企業：大高正人(坂出市人工土地)/テレビ朝日にて放映『タモリ倶楽部』1点
- ・企業：坂倉準三(新宿西口駅本屋ビル設計図)/令和3年度放送済のテレビNHKから再放映『すこぶるアがるビル』1点

- ・企業：坂倉準三（新宿西口駅本屋ビル設計図）/ 令和3年度放送済のテレビNHK組から再・再放映『すこぶるアガるビル』1点
- ・個人：吉阪隆正（日仏会館）/ 卒業論文執筆のための研究調査120点
- ・個人：吉阪隆正（三沢邸）/ 所有者による改修工事のため102点
- ・個人：坂倉準三（飯箸邸）/ 所有者による改修工事のため65点
- ・個人：大高正人（広島基町団地基本計立案説明6803他）/ 卒業論文執筆のための研究調査109点
- ・個人：吉阪隆正（アテネ・フランセ施設）/ 卒業論文執筆のための研究調査64点
- ・個人：吉阪隆正（ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館）/ 論文集への掲載『日本建築学会計画系論日本語版』43点
- ・個人：吉阪隆正（野沢温泉ロッジ）/ 所有者による改修工事のため25点
- ・個人：吉阪隆正（ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館）/ 論文集への掲載『日本建築学会計画系論英語版』43点
- ・個人：坂倉準三（札幌冬季オリンピック大倉山ジャンプ場）/ 学術的調査研究49点
- ・団体：大高正人（シンポジウム時の三春町に関する映像）/ 見学会にて放映『日本インテリア学会34回大会』1点
- ・企業：吉阪隆正（近藤邸ヴィラ・クウクウ）/ 雑誌掲載『CasaBRUTUS11月号』1点
- ・企業：大高正人（プロフィール写真）/ ケーブルネット296にて放映『建築遺産』1点
- ・個人：菊竹清訓（アクアポリス）/ 論文集への掲載『日本建築学会計画系論文集』16点
- ・団体：丹下マイクロ資料（熱海ガーデン、草月会館他）/ 『丹下健三展——仮称』企画・展示のための調査研究89点
- ・団体：菊竹清訓（久留米商業高等学校講堂 他）/ 所有者による維持管理を目的とした保護活動のための調査研究64点
- ・個人：大高正人（広島基町団地及び関連施設）/ 卒業論文執筆のための研究調査218点
- ・個人：坂倉準三（藤山邸）/ ゼミ課題の模型製作のため38点
- ・企業：坂倉準三（小田急新宿西口駅本屋ビル 他）/ テレビ東京・BSテレ東にて放映『新美の巨人たち』4点
- ・企業：渡辺仁（晩年の渡辺仁肖像写真）/ NHKBSプレミアム・BS4K 他放映『美の壺（天井編）』1点
- ・個人：坂倉準三（大阪府総合青少年野外活動センター）/ 学術調査及び修士論文への掲載94点
- ・企業：吉阪隆正（近藤邸）/ 雑誌掲載『婦人画報「名作住宅を受け継ぐ」2月号』1点
- ・個人：坂倉準三（PADIGILIONE GIAPPONESE 他）/ 卒業模型作成のための研究調査2点
- ・個人：村田豊（日本炭素ビル案 他）/ 修士論文執筆のための調査研究57点
- ・個人：菊竹清訓（スカイハウス）/ 美術館の展示室にて放映『東京都庭園美術館にて大学院による画像放映』2点
- ・個人：坂倉準三（札幌冬季オリンピック大倉山ジャンプ場写真資料）/ 基礎資料としての調査2ファイル
- ・個人：こどもの国（こどもの国児童館配置図 他）/ 学術的調査研究24点
- ・個人：坂倉準三（札幌冬季オリンピック大倉山ジャンプ場写真資料）/ 基礎資料としての調査2ファイル（ネガ含む）/
- ・個人：村田豊（東京都三宅村阿古小・中学校体育館）/ 修士論文への掲載2点
- ・個人：菊竹清訓（千栄禅寺）/ 修士論文への掲載24点
- ・個人：吉阪隆正（吉阪自邸 他）/ 学術論文への掲載192点
- ・企業：坂倉準三（東京日仏学院）/ 雑誌掲載『ダイナースクラブ会員誌「シグネチャー施設改装工事に係る寄付金募集のための施設紹介」』2点
- ・個人：こどもの国（こどもの国A地区児童遊園 他）/ 学術的調査研究28点
- ・個人：坂倉準三（ディーゼル博士記念石庭 他）/ 学術的調査研究74点
- ・個人：前川國男（プレモス73号 他）/ 学術的調査52点 うち掲載5点
- ・個人：菊竹清訓（長龍寺）/ 修士論文への掲載5点
- ・個人：大高正人（広島市長寿園団地計画設計図 他）/ 学術論文への掲載『日本建築学会中国支部研究発表会』8点
- ・個人：坂倉準三（塩野義製薬西宮寮 他）/ 学術的調査研究61点
- ・企業：吉阪隆正（近藤邸）/ 雑誌掲載 他『TOTO 通信2023号、カタログ、TOTOのHP』1点
- ・団体：坂倉準三（渋谷再開発計画'66 他）/ 論文掲載『会報誌 DOCOMOMO Japan33号』2点
- ・個人：坂倉準三（岡本太郎邸 他）/ 菊竹清訓（スカイハウス）/ 原広司（原邸）/ 多言語にわたる出版物への掲載『Japanese Houses Since 1945』16点
- ・個人：菊竹清訓（BS久留米第2工場 他）/ 学術的調査研究127点
- ・団体：大高正人（新宿都心計画図）/ 学術的調査研究2点

- ・個人：前川國男（プレモス7号アクソメ図 他）/ 連載記事掲載『建築討論「遺跡としての晴海団地」第2回』4点
- ・個人：渡辺仁（建築略歴書 渡邊高木事務所発行の冊子）/ 学術的調査研究17点
- ・個人：吉阪隆正（浦邸 他）/ 学術論文への掲載15点
- ・個人：こどもの国（こどもの国 A 地区児童遊園 他）/ 学術的調査研究28点
- ・個人：坂倉準三（ディーゼル博士記念石庭 他）/ 学術的調査研究74点
- ・個人：坂倉準三（名神高速道路トールゲート 他）/ 学術的調査研究137点

(3) 資料閲覧及び複写の提供

資料閲覧及び複写の提供実績の概要は、以下のとおりである。

ア. 閲覧実施件数及び閲覧点数の実績

- ・実施件数：33件
- ・閲覧に供した資料点数：10,824点
- ・資料群別の実施件数
- ・坂倉準三建築設計資料：8件
- ・前川國男建築設計資料：3件
- ・吉阪隆正建築設計資料：3件
- ・菊竹清訓建築設計資料：4件
- ・渡辺仁建築設計資料：1件
- ・大高正人建築設計資料：3件
- ・村田豊建築設計資料：3件
- ・岸田日出刀建築設計資料：2件
- ・こどもの国資料料：3件
- ・丹下マイクロ資料：3件

イ. 複写の提供実績

- ・提供件数：1件
- ・提供点数：10点

3. 第4回近現代建築アーカイブズ講習会【中止】

近現代の建築資料を所蔵する組織の学芸担当者等を対象とし、近現代建築資料における収集、整理、保存及び利用等に関する必要な専門的知識と技能の習得を目的として令和元年、2年と開催してきたが、令和3年度と令和4年度は新型コロナウイルス感染症流行状況の予測が困難であったため、開催を中止した。

4. 近現代建築アーカイブズ研修オンライン教材制作

前年度に引き続き、講習会中止の代替手段として、インターネットで公開する研修教材1本（約30分）を制作した。「建築資料の損傷と保存」（コメンテーター：貴田啓

子 東京藝術大学大学院准教授）

建築資料を取り扱うための基礎的な教材として、文化庁公式 YouTube チャンネル bunkachannel にて公開した。

5. 『国立近現代建築資料館紀要』第2号刊行

当館の収蔵資料に関する情報と、館職員や協力者の調査研究成果の公開について、研究論文や資料紹介等を掲載する『国立近現代建築資料館紀要』第2号を令和4年9月にオンラインと印刷（A4判、75ページ）の両方で刊行した。逐次刊行物として ISSN を取得している（ISSN 2436-6757 [オンライン] ISSN 2436-6765 [印刷]）。第1号と併せて J-Stage に登載し、安定して長期公開を行う体制を整えた。

内容は以下のとおりである。

・論文

火のないところに煙は立たずール・コルビュジエの
原画に基づいて制作された東急文化会館の緞帳に
ついてー 加藤道夫

上海華興商業銀行綜合社宅（設計：前川國男建築設計事務所）における住戸計画と空間構成ー収蔵資料の分析から得られた知見ー 小林克弘

・資料紹介

ヴァスマート氏所蔵吉田鉄郎著作関連資料整理報告
江本弘

村田豊建築設計資料のうち、図面以外の資料について 飛田ちづる

国立近現代建築資料館が所蔵する菊竹清訓設計の日本政府建立戦没者慰霊碑の図面群について 戸田穰、加藤直子

・プロジェクト解説

「丹下健三 1938–1970 戦前からオリンピック・万博まで」展開催記録ーアーカイブズ展示の試みー
木下紗耶子

・報告

建築アーカイブズのあり方ー令和3年度アーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会）短期コースに参加してー 飛田ちづる

・年次報告

令和3年度国立近現代建築資料館活動報告

6. 収蔵資料検索システムの公開・運用

令和3年6月に公開した収蔵資料検索データベース（<https://db.nama.bunka.go.jp>）を運用している。収蔵する資料群の概要公開（16資料群）、ファイル（図面筒、図面フォルダ等）レベルまでの目録公開（9資料群）、アイ

テム(個別の図面や資料)レベルまでの目録公開(7資料群)、サムネイル画像の公開(一部:3資料群)をしている。データベースサーバの管理は(株)ITフレット・サービスに委託した。

7. 資料のデジタル化

令和2年度から、一貫した仕様でのデジタル化作業をとりまとめて実施している。令和4年度は3,002点(Ⅱ1. 展覧会の関連業務に含む4,138点と併せて7,140点)について、スキャナによる高精細デジタル化を行った。

- 15_ 菊竹清訓資料1,965点
- 23_ 高橋純一・第一工房資料625点
- 28_ 安藤忠雄資料412点
- 25_ 原広司+アトリエ・ファイ建築設計資料4,138点(Ⅱ1. 展覧会の関連業務)

Ⅲ. 情報収集

1. オーラルヒストリー

「原広司 建築に何が可能か—有孔体と浮遊の思想の55年—」展

本展覧会の開催にあたり、原広司(昭和11年(1936)→)に3時間に渡るインタビューを行い、編集版を展覧会場にて公開した。オーラルヒストリー2本の他、展覧会イベントとしてゲスト(前述)を招きギャラリートークを行い、収録、放映した。

(1) 原広司オーラルヒストリー①

「有孔体と浮遊の思想」

収録日: 令和3年11月7日

収録対象: 原広司

聞き手: 小林克弘(当館企画主任)

記録時間: 約10分

収録場所: アトリエφ

展覧会タイトルにも使用し、原氏の建築理論の始まりであり、一貫して制作活動を行っている「有孔体」並びに「浮遊の思想」についてインタビューを行った。

(2) 原広司オーラルヒストリー②

「生い立ち、そして建築理念」

収録日: 令和3年11月7日

収録対象: 原広司

聞き手: 小林克弘(当館企画主任)

記録時間: 約17分

収録場所: アトリエφ

以下4つのテーマについて原氏にお話をいただいた。
【生い立ち】空襲の2日前に母親の実家のある長野・飯田市へ疎開する。食べるものに本当に苦勞し、なぜ生きているのかを問うようになる。生きるということに対して本気に考えるようになったのは、敗戦した日本を体験したことに起因する。

【集落調査】東京大学原研究室にて集落調査に着手する。1970年の万博開催への勢いの傍ら、環境問題、公害があらわになり、原氏自身が自然的な建築に興味を持ち、集落調査が始まった。それまで集落が建築史に出てくることはなかったが、継続して調査を行うことを決意、自然と共存してきた建築は公害を生むことはなく、環境について考えていこうという問いかけは多くの支持を得ることになる。

【トポロジー】原氏の建築理論で度々出てくる「トポロジー」。動きを捉える数学理論としてホモトープを上げ、浮遊の思想へ転換されてゆく。このホモトープ概念によって、浮遊の思想を建築化する経路を生み出していった。

【建築理念】建築だけではなく社会全体が「お金」を基準とした概念で回り、目指すべき理想、つまり理念が欠如していることを指摘する。ニヒリズムのような自虐的風潮に押されている現代、原は「建築は希望」と訴える。自由と平等という理念のもと、建築は形而上的であり、なぜ私たちは生きているのかという答えを探し続け、建築として答えようとしている。あいまいな部分があってもこそ「人間的」であり、建築においての悟りを模索し続けている。

Ⅳ. 調査研究等

我が国の近現代建築に関わる構造資料及びその電子化継承に関する調査

ワーキンググループ委員

主査: 竹内徹(日本構造家倶楽部)

委員: 伊藤潤一郎(日本構造家倶楽部)、佐々木睦朗(日本構造家倶楽部)、金田勝徳(日本構造家倶楽部)、金箱温春(日本構造家倶楽部)、多田脩二(日本構造家倶楽部)、原田公明(日本構造家倶楽部)、満田衛資(日本構造家倶楽部)、森部康司(日本構造家倶楽部)、小澤雄樹(芝浦工業大学)、川口健一(東京大学)、安藤顕祐(日建設計)、浜田英明(法政大学)、藤本貴子(法政大学)

顧問: 難波和彦・加藤道夫(近現代建築資料館、～2022.9)、大宮司勝弘(近現代建築資料館、2022.11～)、青山(高瀬)道乃(近現代建築資料館)

1. 調査の背景と目的

18世紀の産業革命以降、鉄やコンクリート等の新しい構造材料が現れると、従来の伝統構造をベースに設計を行ってきた建築家とは別にこれらの材料を駆使した建造物を実現する構造エンジニアという職能が成立するようになった。その後、素材や技術の発展に沿って新しい構法を編み出し、建築家と協働しながら建築を構造面から設計する構造エンジニア（構造設計者、構造家）という職能が確立していった。

我が国における構造技術分野の専門化は1923年の関東大震災を契機に耐震構造を中心に進んだ一方で、戦後様々な材料を駆使し多様な構造デザインを実現する欧米型の構造家が活躍するようになった。しかし我が国の近現代建築に関わる構造資料は、これまでに概要把握のための網羅的な調査が行われたことがなく、散逸や滅失の危機にさらされているものもあると推定される。そこで平成29年度～31年度には功績の顕著であった戦後～1990年代に活躍した22名の構造家を抽出して各人に関する本格的な調査及び資料の整理を実施し、その調査結果を「我が国の近現代建築に関わる構造資料の概要把握調査方法の提案」として取りまとめた。

一方、1990年以降の構造資料においては電子化が一段と進んでおり、より後代の構造資料継承に関してはその対応も喫緊の課題となってきた。特に知的財産権の運用厳格化やデジタルデータのインターネットを通じた拡散性の増大により、構造家がまだ存命の内に没後の所有権の移管や公開の是非についての意思を記録しておくこと、また、電子化を視野に入れた残すべき資料の種類や移管書式の整備等について、当該構造家や法律家を交えてまとめていくことが早急に求められる。構造資料以外の分野でも21世紀以降、設計情報の電子化が進んでおり、これ等の情報をいかにアーカイブとして構築し、継承するかの方策を見いだすことは近現代建築資料館の課題である。したがって、電子化において先行する構造資料の調査は、今後、近現代建築資料館が建築に関わる他の電子情報をいかに継承していくかについての収集方針策定においても貴重な資料となると考えられる。本年度は、複数の存命構造家のデジタル資料について調査した昨年度の成果をふまえて、デジタル・アーカイブ構築のための具体的な手法及び課題を技術的側面、法的側面より検討し、ネットワーク化を含む構造資料の電子化継承に関わる方法論についての具体的検討を行った。

2. 調査方法の概要

令和4年度の調査は以下の手順で進めた。(1)これまでの構造資料所在調査をもとに、欠落した情報を補完しつつ、存命及び最近逝去された構造家を対象とする代表的な建築物、構造解析方法、構法と、その施工法リストを作成する。(2) (1)をもとに本年度の調査対象とすべき複数の構造家を選定する。(3)抽出した構造家の資料保存状況（デジタルデータ保管状況を含む）について、概略を調査し、電子化資料整理の実践を行う。(4)資料管理マニュアル及び、構造家の資料継承のために必要となる、構造家没後の著作権・所有権の移管や公開の是非についての意思確認に関わるフォーマットを検討する。(5)構造資料継承に関わる啓蒙活動の企画を行う。

3. 本年度の調査結果

3-1：構造作品年表（1868～2019）及びその系譜

3-2：調査した構造家の資料概要 (1) 川口衛 (2) 渡辺邦夫 (3) 新谷真人 (4) 斎藤公男 (5) 佐々木睦朗

3-3：構造家資料の管理・継承方法の提案 (1) 構造家資料におけるデジタル資料管理マニュアル (2) 譲渡契約書（案）及び継承方針シート (3) 構造資料継承に関わる啓蒙活動の企画

第1回

日時：2022年7月5日（水）18時00分～19時30分

場所：オンライン開催

打合せ内容：前年度報告書の内容について説明を行い、今年度への持ち送り事項などの確認をした。今年度の実施体制及び業務計画について近現代建築資料館より説明がなされた。今年度の調査対象（渡辺邦夫、川口衛、新谷真人、佐々木睦朗、斎藤公男）の状況について確認し、意見交換を行い、以下について合意に至った。1) 今年度は取りまとめの年度であり、3月前に報告書を取りまとめる必要あり。2) デジタルアーカイブのためのマニュアルを整備し、共有ストレージ上での整理を行う（非公開）。3) 公開可能な情報及び資料リストを抽出し、対象となる構造家の業績シートを報告書として取りまとめる。デジタルデータのアーカイブマニュアル、スケッチや写真などの「著作物」の所有権やCopyrightを後進に託すための書式、構造家の業績をまとめるための報告書フォーマットを7月末までに全委員に送付。5) それに従い、渡辺邦夫、新谷真人、佐々木睦朗、斎藤公男のデジタルデータの整理を実施しストレージにアップし、報告書用業

績シートを作成する。6) 次回、成果を持ち寄り協議する。

第2回

日時：2022年9月29日（木）16時00分～17時30分
場所：対面（法政大学市ヶ谷田町校舎）／オンライン併用
打合せ内容：前回議事録の確認。前回の議事録の内容について説明を行い、確認を行った。シート作成状況の報告、今年度の調査対象（渡辺邦夫、川口衛、新谷真人、佐々木睦朗、斎藤公男）の調査状況について確認し、意見交換を行った。

第3回

日時：2022年12月15日（木）17時00分～19時00分
場所：対面（法政大学市ヶ谷田町校舎）／オンライン併用
打合せ内容：前回議事録の確認。前回の議事録の内容について説明を行い、確認を行った。シート作成状況の報告。今年度の調査対象（渡辺邦夫、川口衛、新谷真人、佐々木睦朗、斎藤公男）の調査状況について確認し、意見交換を行った。

第4回

日時：2023年3月20日（月）17時00分～19時00分
場所：対面（法政大学市ヶ谷田町校舎）／オンライン併用
打合せ内容：前回議事録の確認。前回の議事録の内容について説明を行い、確認を行った。令和4年度報告書案の確認。今年度の報告書案について確認し、意見交換を行った。

構造家資料の継承に関する助言

日時：2022年12月8日（水）10時00分～12時00分
場所：オンライン開催
講師：桑野雄一郎／くわのゆういちろう（高樹町法律事務所）
内容：桑野氏から贈与契約書及び所有権、著作権について解説があった。また継承方針シートの効力、著作者人格権について解説があった。

V. 委員会

1. 運営委員会

令和4年度委員

（◎は委員長、○は委員長代理、五十音順 敬称略）
大村理恵子（パナソニック汐留美術館主任学芸員）、
○加藤雅久（居住技術研究所主宰）、◎川向正人（東京理科大学名誉教授）、隈研吾（東京大学特別教授・名誉教授）、児玉耕二（日本建築士事務所協会連合会会長）、田路貴浩（京都大学大学院教授）、山名善之（東京理科大学教授）

開催状況

第20回：令和4年8月3日 ※Web会議

〔主な議題〕

- ・資料の受入について
 - ①樋口清旧蔵吉田鉄郎蔵書 LE CORBUSIER-SAUGNIER, *Vers une architecture*（初版）
 - ②堀口捨己建築資料
- ・展覧会の開催について
令和5年度（2023年度）展覧会企画（案）

第21回：令和5年1月24～30日 ※書面審議

〔主な議題〕

- ・資料の受入について
大谷幸夫建築資料

第22回：令和5年3月13日 ※Web会議

〔主な議題〕

- ・資料の受入について
 - ①堀口捨己建築資料
 - ②藤森照信旧蔵東京大学生産技術研究所建築史研究資料（仮）
- ・展覧会の開催について
令和5（2023）年度展覧会企画
「文化庁国立近現代建築資料館10周年記念特別展 日本の近現代建築——NAMA コレクション大公開」（仮）
- ・今後の事業計画について

2. 小委員会

(1) 収集小委員会 ※Web会議

令和4年度委員（◎は委員長、五十音順 敬称略）

加藤諭（東北大学准教授）、◎加藤雅久（居住技術研究所主宰）、角田真弓（東京大学技術専門職員）、藤木竜也（千葉工業大学准教授）、山崎幹泰（金沢工業大学教授）

開催状況

第17回：令和5年3月3日 ※Web会議

〔主な議題〕

- ・資料の受入れについて
 - ①堀口捨己建築設計資料
 - ②藤森照信旧蔵東京大学生産技術研究所建築史研究資料

(2) 企画小委員会

令和4年度委員（◎は委員長、五十音順 敬称略）

大村理恵子（パナソニック汐留美術館主任学芸員）、鈴木明（武蔵野美術大学教授）、◎田路貴浩（京都大学大学院教授）、前田尚武（京都市京セラ美術館企画

推進ディレクター)、米山勇(東京都江戸東京博物館
研究員)

開催状況

第17回: 令和5年2月2日

〔主な議題〕

・令和5年度 10周年記念特別展(案)

(3) 情報小委員会

令和4年度委員(◎は委員長、五十音順 敬称略)

後藤真(国立歴史民俗博物館准教授)、齋藤歩(京都
大学総合博物館特定助教)、永崎研宣(人文情報学研
究所主席研究員)、本間友(慶應義塾ミュージアム・
コモンズ専任講師)、森本祥子(東京大学文書館准教
授)、◎山名善之(東京理科大学教授)

開催状況

第13回: 令和5年3月6日

〔主な議題〕※報告事項のみ

VI. 運営

1. 施設の充実

特段の記載事項なし。

2. 広報・広聴

(1) 資料館ウェブサイト

ウェブサイトの保守管理を(株)ナカヨに委託して運
用した。館の概要、閲覧等利用の案内、展覧会の開催、
開館・閉館の予定等を告知するとともに、刊行物のデ
ジタルファイル等を掲載した。

(2) 文京ミューズフェスタ2022

令和4年12月15日(木)にギャラリーシビック(文
京シビックセンター1階)にて開催された「文京ミュー
ズフェスタ2022」(主催:文京区、文の京ミュージアム
ネットワーク)に参加した。開催中の「原広司 建築に何
が可能かー有孔体と浮遊の思想の55年ー」のポスター、
チラシ及びパネル等を掲示し、区民ら来場者に広報を
行った。

(3) アンケート調査

「令和4年度収蔵品展こどもの国のデザイン——自
然・未来・メボリズム建築[併設]新規収蔵資料紹介」、
「原広司 建築に何が可能かー有孔体と浮遊の思想の
55年ー」の来館者に対して、展覧会の評価等に関する
アンケート調査(任意)を実施した。

VII. 予算

令和4年度予算額 106,857千円

VIII. 組織

令和4年度職員名簿

館長(文化庁企画調整課長)	平山 直子 (R4.6.9まで)
館長(文化庁企画調整課長)	寺本 恒昌 (R4.6.10から)
館長補佐(企画調整課課長補佐)	伊野 哲也
副館長	吉野 孝行

【研究系】

主任建築資料調査官(収集担当)	加藤 道夫 (R4.9.30まで)
主任建築資料調査官(収集担当)	大宮司 勝弘 (R4.11.1から)
主任建築資料調査官(企画担当)	小林 克弘
主任建築資料調査官(情報担当)	田良島 哲
研究補佐員	寺内 朋子
研究補佐員	青山(高瀬) 道乃
研究補佐員	小池 周子
研究補佐員	木下 紗耶子 (R4.5.31まで)
研究補佐員	門間 光 (R4.7.1から)
研究補佐員	王 聖美 (R4.9.16から)

【事務系】

事務室長	吉野 孝行 ※副館長兼務
専門職	小林 美緒
専門職	吉野 貴子 ※再任用
事務補佐員	酒口 ひろみ
事務補佐員	室田 恵実

IX. 年譜

令和4(2022)年

6月

寺本恒昌館長(文化庁企画調整課長)就任(10日)

「令和4年度収蔵品展こどもの国のデザイン——自

然・未来・メタボリズム建築〔併設〕新規収蔵資料
紹介（21日～8月28日）

8月

「篠井家旧蔵吉田鉄郎城端郵便局」贈与契約締結（1
日）国立近現代建築資料館運営委員会（第20回）
（3日）

9月

「安藤忠雄初期建築資料令和4年度」贈与契約締結
（13日）

「高橋翫一資料2022年度」贈与契約締結（14日）

10月

「シュパイデル旧蔵ブルーノ・タウト関連資料」贈与
契約締結（24日）

11月

「樋口清旧蔵吉田鉄郎蔵書 LE CORBUSIER-
SOUGNIER, *Ver une architecture*（初版）」贈与契約
締結（8日）

12月

「原広司 建築に何が可能か ―有孔体と浮遊の思想の
55年―」（13日～令和5年3月5日）

令和5（2023）年

1月

国立近現代建築資料館運営委員会（第21回）（24～
30日） ※書面審議

2月

国立近現代建築資料館運営委員会企画小委員会（第
17回）（2日） ※Web 会議

3月

国立近現代建築資料館運営委員会収集小委員会（第
18回）（3日） ※Web 会議

国立近現代建築資料館運営委員会情報小委員会（第
13回）（6日） ※Web 会議

国立近現代建築資料館運営委員会（第22回）（13日）
※Web 会議

国立近現代建築資料館紀要 第3号

2023(令和5)年12月15日 発行

編集・発行：文化庁国立近現代建築資料館

〒113-8553 東京都文京区湯島4-6-15 湯島地方合同庁舎内

電話 03-3812-3401

E-mail: nama@mext.go.jp

<https://nama.bunka.go.jp/>

制作：美学出版合同会社

デザイン：右澤康之

非売品

Bulletin of

National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs

vol. 3

Published: December 15, 2023

Edited & Published by:

National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs

4-6-15 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8553, Japan

Phone: +81 (0) 3-3812-3401

E-mail: nama@mext.go.jp

<https://nama.bunka.go.jp/>

Production by: Bigaku Shuppan LLC

Design by: UZAWA Yasyuki

Not for sale

©2023 Agency for Cultural Affairs



**National Archives of Modern Architecture,
Agency for Cultural Affairs**